萌える！プロレスのススメ

文／萌えプロ製作委員会
イラスト／吉井ダン

イカロス出版

萌える！プロレスのススメ

文／萌えプロ製作委員会
イラスト／吉井ダン

イカロス出版

萌える！プロレスのススメ
文／萌えプロ製作委員会
イラスト／吉井ダン
イカロス出版

萌える！プロレスのススメ

この本の主な内容

第一章
プロレスってなんだろう?

第二章
プロレスの歴史

第三章
技をおぼえてみよう!

第四章
伝説のレスラーたち

第五章
使える!
レスラー名言・珍言集

第六章
観戦に行ってみよう!

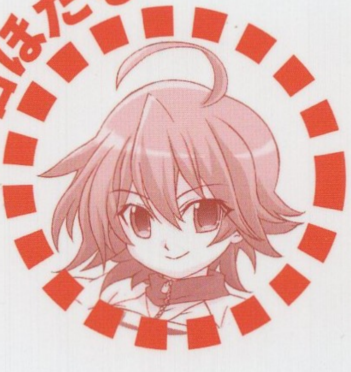
資料編
プロレス用語集、
公式ルール

彬葉（あきば）学園SPS団

（最高に燃えるプロレスを最高に盛り上げるの団）

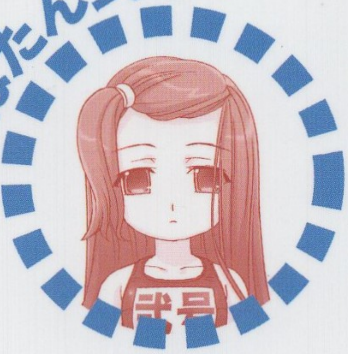
団員紹介

力石ほたる



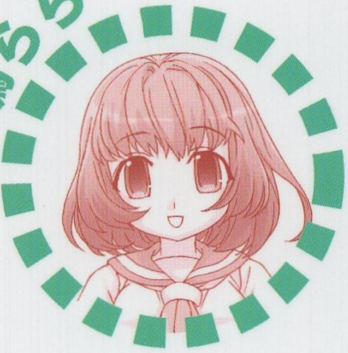
SPS団の団長。プロレスの復権をひたすら願う熱血少女。少々荒っぽいところがあるものの、後輩の面倒見は意外と良い。

ちはたん武号（にごう）



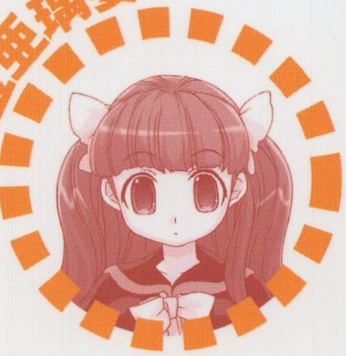
SPS団の副団長。ほたるに誘われて強引に入団させられた。ふだんは無口で無表情だが、プロレスの実力は団員一との噂がある。

霧嶋（きりしま）らら



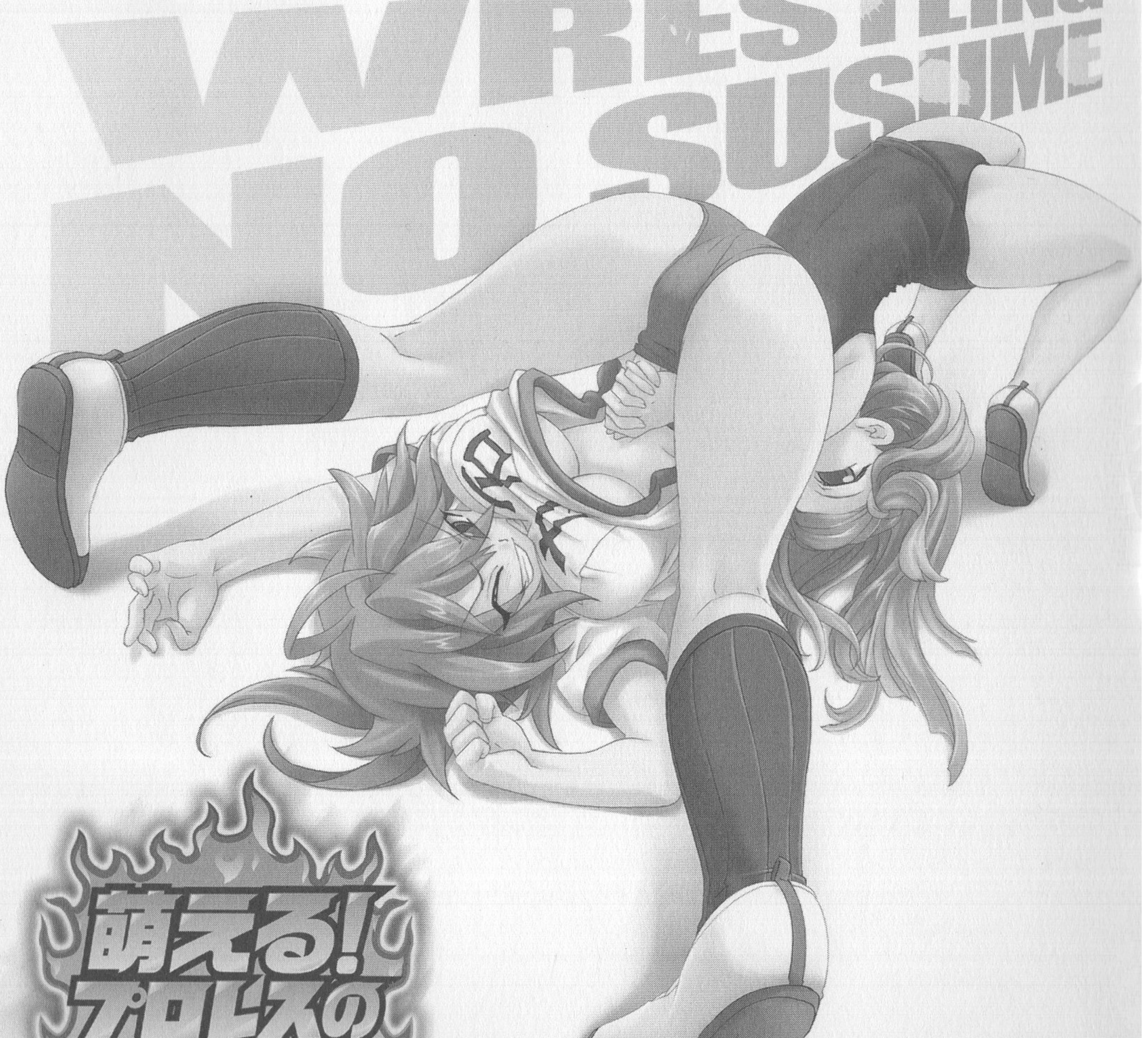
SPS団の書記。DVDやインターネットで20世紀の伝説のレスラーたちの試合を“蒐集”するプロレスオタク。ほたるとは幼なじみ。

城金亜璃裟（しろがねありさ）

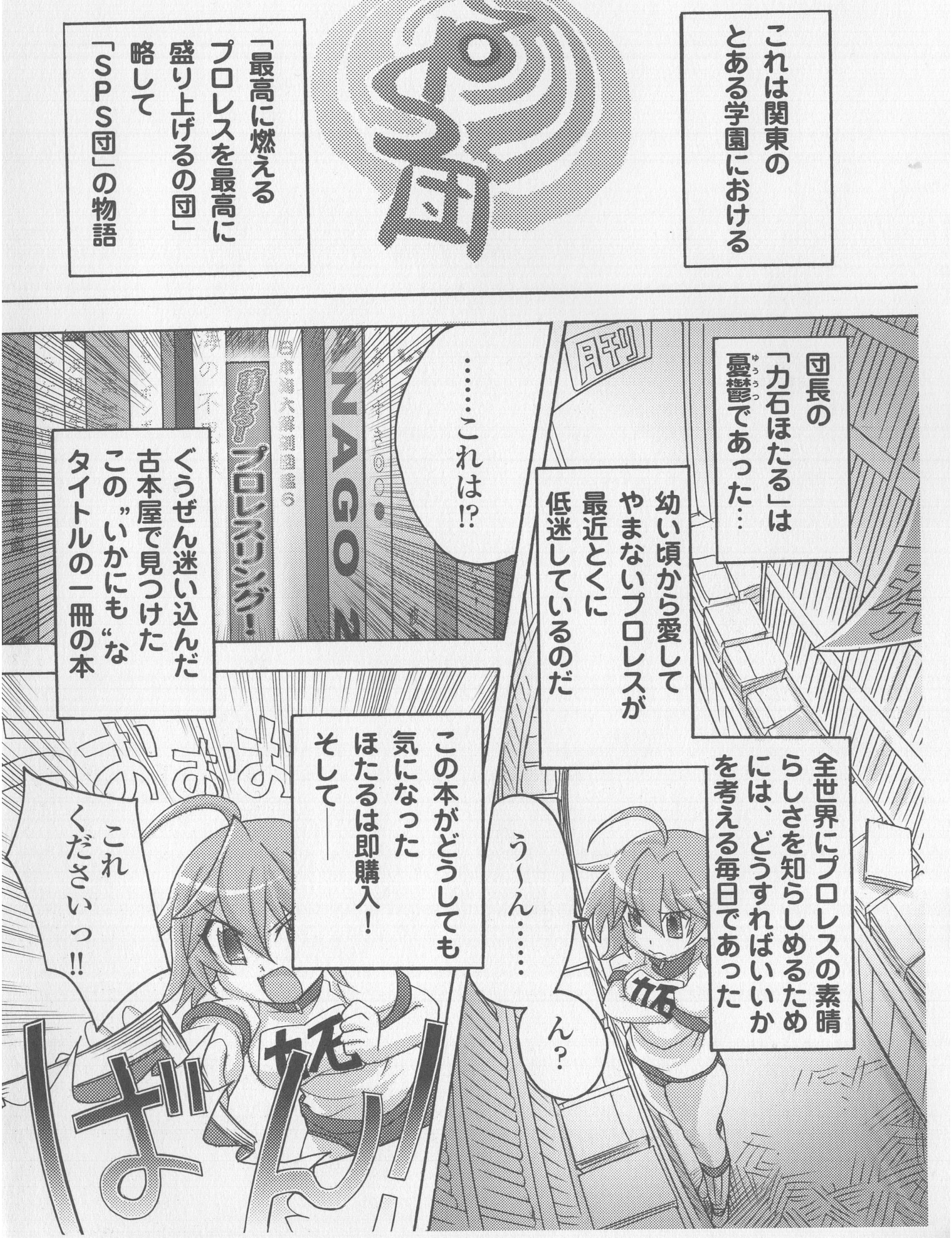


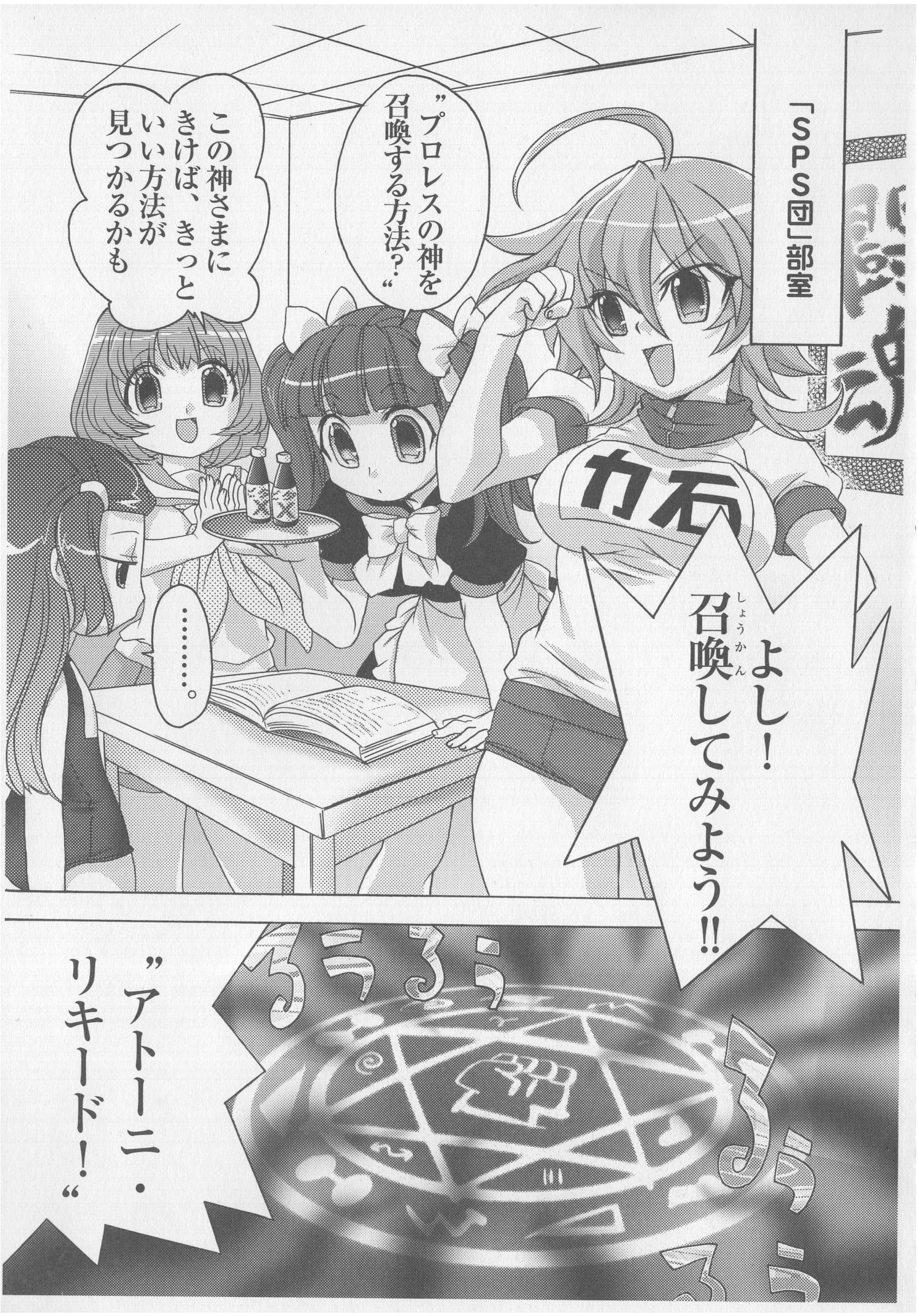
SPS団の会計係。メイド喫茶でバイトをしているが、なにかと理由をつけてはバイト代を団の運営資金にされてしまう不運な娘。

MOERU! PROFESSIONAL WRESTLING NO SUSUME

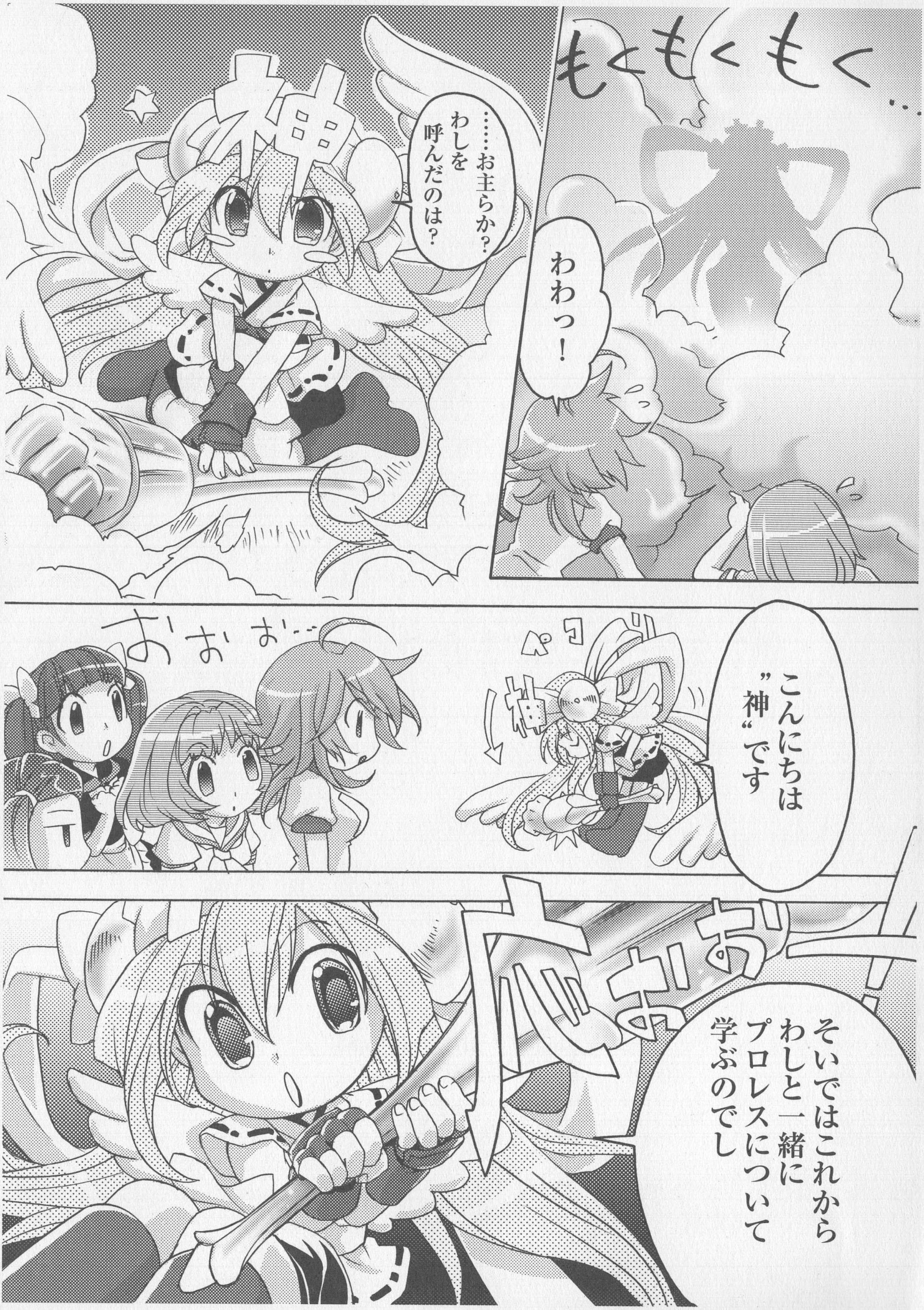


萌える！
プロレスの
ススメ


これは関東の
とある学園における
SPS団
「最高に燃える
プロレスを最高に
盛り上げるの団」
略して
「SPS団」の物語
月刊
団長の
「力石ほたる」は
憂鬱（ゆううつ）であった…
幼い頃から愛して
やまないプロレスが
最近とくに
低迷しているのだ
……これは!?
プロレスリング！
NAGO
ぐうぜん迷い込んだ
古本屋で見つけた
この”いかにも“な
タイトルの一冊の本
全世界にプロレスの素晴
らしさを知らしめるため
には、どうすればいいか
を考える毎日であった
う〜ん……
ん？
力石
この本がどうしても
気になった
ほたるは即購入！
そして——
おおお
これ
くださいっ!!
力石
ばん


「SPS団」部室
”プロレスの神を召喚する方法？“
この神さまにきけば、きっといい方法が見つかるかも
力石
……………。
よし！召喚（しょうかん）してみよう!!
ゔぅゔぅ
”アトーニ・リキード！“

神
MAW
キターーッ!!

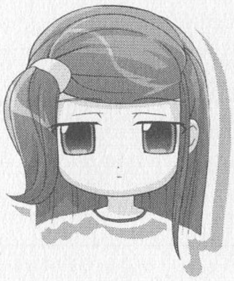

もくもくもく…
わわっ！
神
……お主らか？
わしを
呼んだのは？
ペタリ
神
こんにちは
"神"です
おおお…
そいではこれから
わしと一緒に
プロレスについて
学ぶのでし

CONTENTS

もくじ

第一章 プロレスってなんだろう？ 9

第二章 プロレスの歴史 17



第三章 技をおぼえてみよう！ 29

第四章 伝説のレスラーたち 65

第五章 使える! レスラー名言・珍言集 131

第六章 観戦に行ってみよう！ 143

資料編 プロレス用語集、公式ルール 157

第一章

プロレスってなんだろう？

プロレスの〝プロ〟とは？

戦後間もない日本において、敗戦で覇気を失った日本人にプライドと活力を取り戻させた「プロレス」。日本でのプロレスの歴史は1953年、力道山が設立した日本プロレス協会からその端を発する。それから50数年を経た現在、団体数はゆうに40を超え、約650人のレスラーがプロとして活躍しているが、その「プロレス」の定義を考えた時、行き着く答えは十人十色、じつに多様なものとなっている。

プロレスは最強の格闘技である。
プロレスはエンターテイメントである。
プロレスは八百長（やおちょう）である。
プロレスはドラマである。
プロレスは人生である。

プロレスに関わる名の知れた人物がプロレスを形容した一言においても、それは見て取れる。果たしてその答えは……、すべて「Ｙｅｓ」である。

相反するはずの定義がリング上で渾然（こんぜん）一体となって存在するミラクルワールド、プロレス。そこに一つの答えがある。「どの格闘技よりもハードな練習に耐えた屈強な肉体もしくは感性を持ったレスラーが、対戦相手と共に試合を組み立てていき、勝敗に至るまでのプロセスも含め、観客はレスラー同士の織り成す世界観を広い心で楽しむ」

これがプロレスである。

さらにプロレスの〝プロ〟とは、レスリングを突き詰めたプロフェッショナルという意味だけではない。プロがあるからにはアマ（アマチュア）もある訳だが、アマチュア・レスリングは純粋にスポーツとして確立されていて、基本は似ていても同じ土俵で語ることはできない。そういった意味では、プロ野球、プロテニス、プロゴルフといった、プロもアマチュアも同じルールのもとに競い合うスポーツとは一線を画する。

では、レスリングにおいてプロとアマの違いは何か？

一つ目は、プロとしての活動の土台が観客からお金をもらって行う興行であるということ。チケットを買い、会場に足を運んでくれた観客にさらにプロレスを好きになってもらい、楽しんでもらうために、レスラーは日々努力している。お金をもらうということは、レスリングを仕事としている訳だから、収入を得るため、多い団体は年に200以上の会場をまわって試合を行うことになる。

二つ目は、レスラーが戦うのは対戦相手だけではないということ。単に相手に勝つだけを目的とするなら、プロレスはここまで根強い人気を得ることはできなかっただろう。レスラーにとっての最大の敵は、じつは対戦相手ではなく観客である。試合内容がしょっぱい（＝つまらない）と、ファンの足は会場から遠のく訳だから、興行として成り立たなくなる。プロレスの世界において一流のレスラーであるためには、強いだけではなく、最高のエンターテイナーでなくてはならないのだ。

エンターテイメントってどういうこと？

「プロレスはエンターテイメントだ」と多くのファンは言う。エンターテイメントを辞書で引くと、「娯楽・気晴らし、またそのための催し」、とある。

プロレスについて議論するときに必ずもち上がるこの単語は、昭和の後期、プロレスをこよなく愛するファンが、心ない人達に八百長扱いされるプロレスを擁護（ようご）するにあたって、苦しい想いの中でたどり着いたも

っともふさわしい表現と言えまいか。

あたたかく広い心を持ち、ものごとの楽しみ方を知っているプロレスファンは、その人の良さ（？）ゆえに「プロレスは八百長」というそしりを受けてきた。「なんでロープに振ると帰ってくるの？」「ジャイアント馬場の十六文って効くの？」「ストンピングって本気で蹴ってないよね」「流血は自分で傷つけるんだろ？」など、答えの出せない質問責めに陰で涙してきた。

しかし、答えが出ないからこそプロレスは面白いとも言える。

前述したが、プロレスラーは強いだけではトップになれない。神と両親が与えてくれた人よりも恵まれた身体を、トレーニングでさらに極限まで鍛え抜き、誰よりも強くなる…。今新たな波となっている総合格闘技ならば、それだけでも十分であろう。何か月も前から決められた試合日と対戦相手に合わせて体調を整え、試合ではいかに相手に攻められることなく勝利できるか。そういった試合を求めるファンが現在の総合格闘技ブームを支えている。

だが、プロレスの世界ではそれだけでは通用しない。プロレスラーとしてトップに立つには、あらゆる才能と実力を求められるのだ。

プロレスラーはスゴい！

立ち技最強を目指すK・1、グラウンドでの関節技やパンチを取り入れ文字どおりの潰し合いを展開するＰＲＩＤＥ（最近ＵＦＣに吸収されたが）がブームを巻き起こしている昨今、プロレスはまたもや氷河期時代に入ってしまった感さえある。テレビ放映ではゴールデンタイムが当たり前だった昭和後期を考えると、現在は放映が深夜枠に追いやられ、時には別の番組と差し替えられたりすることもある。

プロレスには過去にも何度かの危機があった。長州軍団大量離脱時の新日本や天龍同盟大量離脱時の全日

本などは、当時はこれで（団体が）潰れてしまうんじゃないのか？　と本気で心配したものだ。

しかし、プロレスは今も生き続けている。離脱や分裂を繰り返し、他団体との交流戦で新鮮なカードをファンに提供しながら、おそらくこれからも存続していくのである。プロレスが興行であることを知っていてもなお、会場が選手と観客の熱気に満ちあふれているのはなぜか？

それは「プロレスラーはスゴい！」からである。

多くのプロレスラーは、子供の頃から身体がデカい。人よりも恵まれた身体をスポーツや格闘技でさらに鍛え、喧嘩にしてもその地域では誰からも恐れられる存在であったりする。ある団体の中堅レスラーH選手を例にとってみよう。彼は高校時代の暇つぶしが暴走族狩りだったそうだ。一人で向かってくる族車の前に仁王（におう）立ちし、「10人近いチンピラをいたぶって遊んでましたわ、はははっ」と事も無げに笑う。高校柔道で県下No.1になり、186cm、100kgの肉体を誇る恐いもの知らずの彼でさえ、天職と定めたプロレス界に練習生として入団した翌日には、あまりの辛さに逃げ出した経験を持っている。

人並みはずれた身体を持った青年が練習生として「道場」に入ると、翌日からデビューに向けたトレーニングが始まる。トレーニングという名を借りたシゴキにより一日にしてそれまでのプライドは崩壊、バラバラになりそうな身体をさらに苛め抜き、ときには先輩のイジメにも耐え、まずは耐える身体をつくり上げていくのだ。

雑用に追い回される合間を縫って積み上げたトレーニングでできた鋼の肉体としなやかな筋肉、そして強靭な精神力を得てはじめてプロレスラーとしての本格的な練習が始まる。が、いきなり技を教えてはもらえない。H選手の場合、リングに上げてもらえた初日の練習はボディスラムの受け身だった。

本人曰く、「最初の一発目で背骨が折れたと本気で思った、息が詰まって呼吸ができない中、のたうち回る自分に追い打ちをかけるように先輩に無理矢理引きずり起こされ二発、三発……七発までは覚えていたけど、後は気絶してたみたいで、気がついたらリング下でバケツの水をぶっかけられてました。その夜は背中と腰の痛みで一睡（いっすい）もできなかった。でもその夜、試合のリングでかわいがってくれた先輩レスラーを半殺しにす

るまで絶対に辞めないと誓った」。だが、その先輩レスラーとは後に絶大な信頼を寄せ合う師弟関係となり、現在はかなり仲がいいそうだ。

あらゆる技の受け身を経験し、耐えられるようになったH選手が意外に思った事の一つとしてロープワークがあった。四角いリングのまわりに張られている三本のロープ。レスラーが反動を利用して勢いをつけたり、相手を飛ばして技の威力を増すために上手く利用しているアレだ。一見、強いゴムのような弾力のあるものに見えるけれど、実は、中身は太いワイヤーが詰まっている。各コーナーポストにピンと張られたロープは並の人間には鉄の棒にさえ感じられるはずだ。勢いをつけてロープに飛ぶと、これがかなり痛い！　試合前などにロープの張り具合をチェックするため、レスラーがリング内を縦横に行き来してロープに飛ぶ光景がときおり見られるが、あれもまた普通の人にはできない芸当なのだという。

受ける身体を作り上げ、技のダメージを最小限に抑えるテクニックを身に付けると、いよいよグラウンド（寝転がった状態での攻防）を学ぶ。やっと自分の実力を発揮し、思いっきり戦えると喜んだのもつかの間、さらなる地獄が待っていた。先輩レスラーに関節技を面白いように極められ、子供のように悲鳴を上げる。練習生はタップ（まいったの合図）をしても止めてもらえない。先輩レスラーは次の関節技に移って新たな痛みが増すだけだ。首から足までバラバラにされたような感じで立ち上がる事すらできなくなった頃、スリーパー・ホールドで絞め落とされ、やはり気がついたらリング下にボロ雑巾のように転がっていた…。

こうした一連の想像を絶する練習において、レスラーのタマゴたちは〝怪我をしない身体づくり〟をしていく。一般社会では仕事中の怪我は保証されるべき公傷であるが、プロレスラーの場合、それはヘタクソの烙印（らくいん）を押されたようなものだ。したがって怪我がもとで引退を余儀なくされても何の保証も無い。

優れたレスラーになるには、強くて巧いうえに怪我をしない事が大切になっていくのだが、怪我の認識は一般人とはずいぶん違う。トップレスラーのほとんどは身体のあちこちに爆弾を抱えていて、首、膝、腰など、我々ならば動けなくなるような激痛が走る状態であってもリングに上がればお構い無しに戦うし、勝つためには相手のウィークポイントを無情にも責め立てる。流血に至っては、怪我とさえ考えていない。傷口

を縫うような怪我をしても絆創膏（ばんそうこう）を貼って翌日の試合に出場し、塞（ふさ）がった傷口が開こうが気にする様子も無い。

本題に戻ろう。こんな練習漬けの生活を一年近く経験し、受ける事によって学び、身に付け、スパーリングもそつなくこなせるようになると、ようやくレスラーとして認められデビューする事ができるのである。練習生として道場に入ってデビューに至るまで、10人の恐いもの知らずの猛者（もさ）がわずか1～2人しか残らない、一人も残らない場合も多々ある。そんな過酷な練習の積み重ねを経て、彼らのレスラー人生は始まるのだ。

しかし、この時点ではまだ「レスラー」であっても「プロレスラー」ではない。お金を払って観にきてくれた観客を満足させ、楽しませる事ができるようになるまで、メインイベンター（興行の最後の試合を務める選手）を目指し、前座的な第一試合や第二試合でさらに磨きをかけていかなくてはならない。

プロレスラーの本当のスゴさはこれだけではない。本当に必要なものを、練習ではなく試合の積み重ねによって会得していかないと生き残れない世界なのだ。

プロレスラーに最も必要なもの、それは「華（はな）」である。プロレスラーはある意味、リング上の役者でなくてはならない。良い役者は演技の中で相手を光らせ、なおかつ自分も光る。わがままに自分だけが光ろうとすると、相手の演技を意味のないものにし、観る側に不快感を与えてしまうものだ。そんなドラマを観ても感動はしないし、また観たいと誰が思うだろうか。

ドラマの中の起承転結には、出会いがあり、事件があり、裏切りがあり、結末がある。そして優れたドラマは、観る者の喜怒哀楽を見事なまでにコントロールし、満足させるものだ。それと同じように、ただ攻めて潰すだけのプロレスには感動が無い。相手のいい所を最大限に引き出し、受けることによってそのスゴさを演出し、それでも耐えて立ち上がる。立ち上がって自分もアピールする。誰が観ても痛みが伝わる限界を超えた死闘の中に、感性という「華」を持つ者だけが、プロレスラーとして、メインイベンターとして光輝く存在となるのである。

プロレスが八百長であるとか台本があるとか…そんなつまらない事を議論するよりも、まずは試合を観るべきだ。雪崩（なだれ）式バックドロップをくらっても、パワーボムをくらっても、ラリアットで一回転してぶっ倒されても、フランケンシュタイナーで3mの高さからまっ逆さまに落ちても、顔面に渾身の蹴りをぶち込まれても、はたまたトペ・スイシーダが自爆しても、折り畳みイスがぶっ壊れるまで背中を強打されても、それでも彼らは起き上がって反撃する。そして翌日も元気に戦っている。

普通の人間ならばどれも死に至る程の荒技（よいこは真似をしないでね）であっても、きちんと受けて、それ以上の気迫をもって反撃していく。プロレスラーのスゴさの答えはこれに尽きると言えまいか。

マニアなキモチ

プロレスファンとして純粋にプロレスを楽しむには、少しばかりの知識を持つ事により、その面白さは何十倍にも広がりを見せる。レスラーのプロフィールや得意技、団体の歴史、背景、レスラーや軍団同士の相関関係などを知る事により、リング上で繰り広げられる試合の一つ一つに意義を見出すことができるようになる。

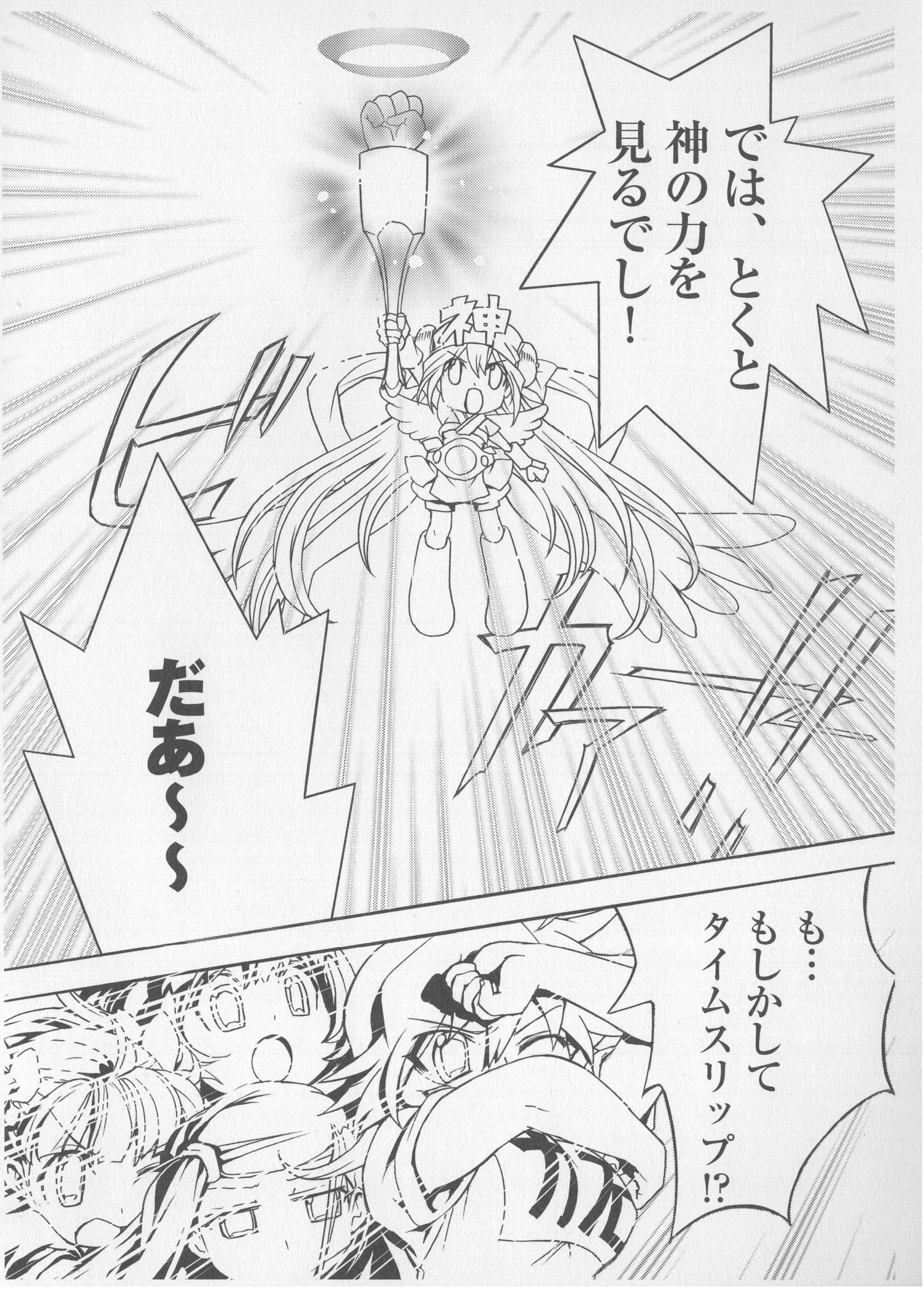
そうすると、次第にレスラーの内に秘められた感情まで読み取れるようになっていくので、さらに面白みは増していく。それを繰り返し、プロレスファンは進化を遂げながらより深くプロレスの魅力にハマっていくのである。ここまでいけば立派なプロレスマニアだ。

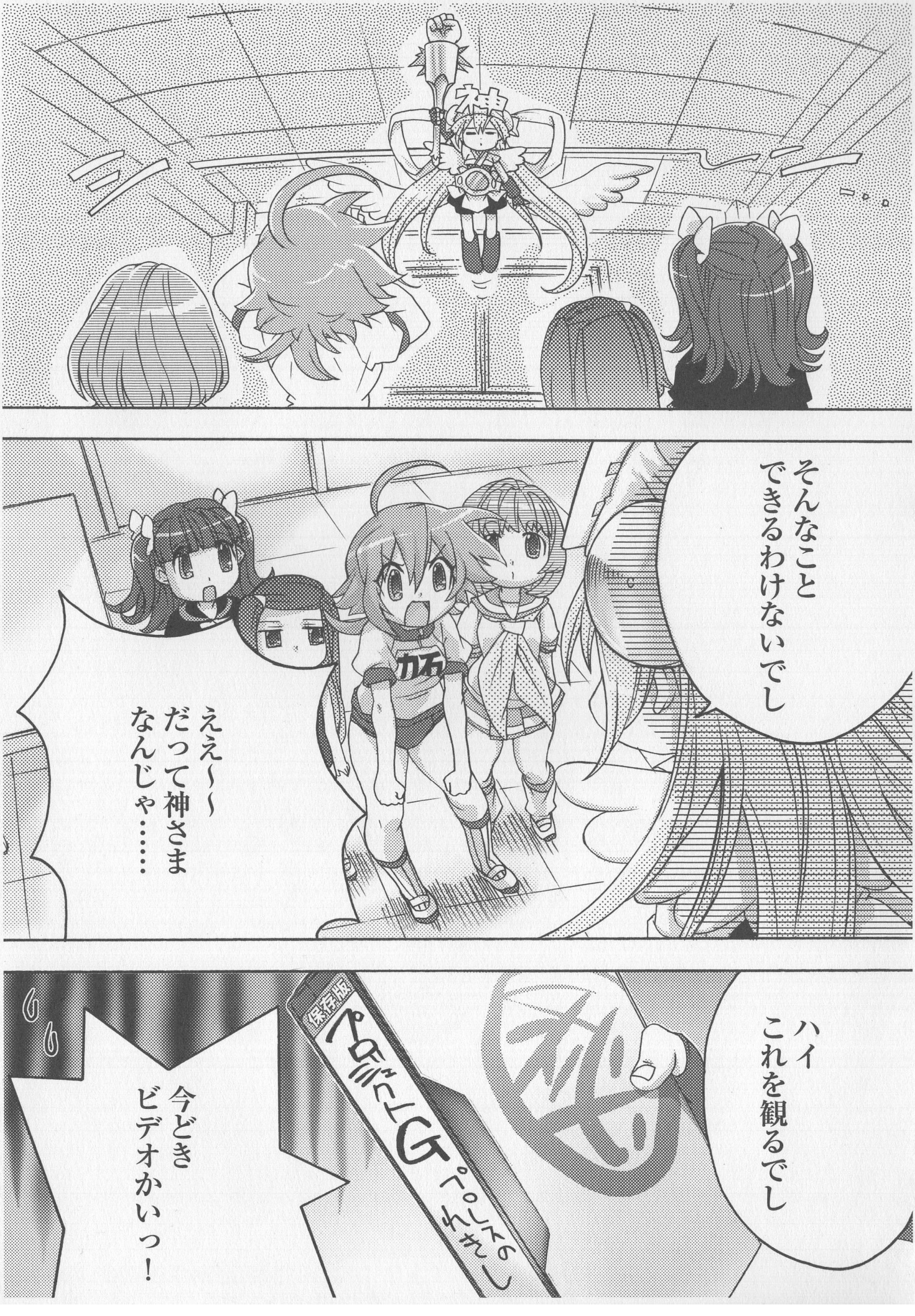
ジャズマニアが並の人には面白さを理解できないジャムセッションを楽しむように、プロレスマニアはレスラー同士が織り成す芸術的格闘絵巻を楽しむのだ！　プロレスを心から楽しめる豊かな感性は、普通の人に無い優れた個性なのだということを知ってほしい。

さあ、覚悟はいいか？　プロレスの四次元ワールドに出発するよ!!

第二章

プロレスの歴史


では、とくと神の力を見るでし！
神
カァッ
ビ
だあ～～
も…もしかしてタイムスリップ!?

神
シ――ン…。。
そんなこと
できるわけないでし
ええ～～
だって神さま
なんじゃ……
カ石
ハイ
これを観るでし
保存版
ペロミェントG
プロレスの
れきし
今どき
ビデオかいっ！

プロレスの誕生

ここからはプロレスを知る第一歩として、プロレスの起源を探ってみよう。

プロレスの下地となるレスリングは人類最古のスポーツであり、古代ギリシャに始まったオリンピックの種目(グレコローマンレスリング)でもあった。やがてグレコローマンレスリングはイギリスに渡り、正々堂々とした戦いぶりに騎士道精神を見出したイギリス人たちにより、独自の格闘技へと変化していく。そして1760年代以降、イギリスのランカシャー地方で行なわれた興行、ランカシャーレスリング(キャッチ・アズ・キャッチ・キャン)が盛んになっていった。

グレコローマンレスリングとは異なり、ランカシャーレスリングは投げ、崩し技以外に、顔・首・腕・足・手首など、全身どこを攻撃してもよいという関節技も加わり、スポーツというより格闘技としての要素を色濃く取り入れたものとして当時の観客を魅了。このランカシャーレスリングがプロレスの起源といわれている。

起源としては実はもう一つの説があり、ランカシャーレスリングが始まった同じ頃、アメリカで行なわれたグレコローマンスタイルの賞金マッチの興行こそ、プロレスの起源だと主張するアメリカ人が多く存在する。だがルールやスタイルにおいて、「プロレスらしさ」を完成させたランカシャーレスリングに分があることは否めないだろう。

1830年代になると、アメリカで賞金マッチにキャッチ・アズ・キャッチ・キャンとグレコローマンスタイルを融合させたミックス形式を取り入れたり、腰から下のキックを認めるルールが加わったりした興行が各地で盛んに行なわれるようになり、現在のプロレスへと進化していった。

プロレスの発展

プロレスのスタイルがイギリスからアメリカに渡り、そのアメリカで興行として現在のプロレスにつながる要素となったのは、19世紀後半のカーニバル・レスリング（アスレチック・ショー）とされている。カーニバル・レスリングとは簡単に言うと、サーカスの見せ物の一つだ。そこではプロレスラー同士の試合だけでなく、力自慢の観客をリングに上げ、挑戦を受けたりしたとされている。

カーニバル・レスリングは、サーカスとともに街から街を渡り歩き、見せ物的要素の強い興行によりアメリカ全土に知られるようになっていくのだが、同時にプロレスラーの並み外れた腕力やテクニックも知れ渡ることになる。

街一番の力自慢がプロレスラーに挑戦しようとも、レスラーは娯楽性を損なうことなくキッチリと最後は勝ってみせる。負ける事が許されない分、やはり当時からプロレスラーは凄かったという訳だ。

アメリカで始まったプロレス興行のスタイルは、このカーニバル・レスリングが大きく影響している。エンターテイメントとしての現在のアメリカン・プロレスの在り方は、まさしく「カーニバル・ショー」だ。

あまり知られていないが、〝銀髪鬼〟の呼び名で知られるフレッド・ブラッシーもこのカーニバル・レスリング経験者であり、「そこで覚え、培われた技術を現在のプロレスラーが受け継いでいるのだ」と語っている。

近代プロレス完成へ

20世紀に入り、サーカスとともに街から街へと渡り歩くカーニバル・レスリングも次第に下火になってい

った。アメリカの人口が大都市へ集中し始めたことが原因であると思われる。

やがてカーニバル・レスリングは大都市を中心としたテリトリー（縄張り）を設け、大会場で行われるようになる。テリトリーができるとそこにレスラーが集まり、プロモーション（興行会社）が生まれる。プロレスラーは仲間としてのつながりを深め、試合の流れを打ち合わせたり、各テリトリーの情報を交換できるようになった。こうしてアメリカにおける近代プロレスは完成していくのである。

そして1930年代、アメリカで生まれた近代プロレスはやがて世界へと広がりを見せていった。起源となるイギリスをはじめ、カナダやメキシコ、ハワイ、オセアニア、そして日本へ……。

プロレスはその国ならではの進化を続け、現在ではエンターテイメントを極めるプロレス、テクニックを駆使したプロレス、華麗でアクロバティックなプロレス、真剣勝負にこだわるプロレス、楽しく激しいプロレスなど、さまざまなスタイルが生まれ、世界中のどこかで毎日のように試合が行われている。

日本プロレスの旗揚げ　戦後・力道山（りきどうざん）の時代

アメリカで完成されたプロレスが日本に渡り、その歴史をスタートさせたのは、第二次世界大戦後の1953年、力道山が設立した日本プロレス協会によってであり、世界のそれと比べると意外なほど歴史が浅い。

しかし、日本人プロレスラー自体は、日本でプロレス興行が産声をあげるはるか以前に存在していた。なんと力道山が生まれる40年も前に、日本人初のプロレスラーが誕生していたのだ。1883年、松田幸次郎（本名・荒竹光次郎）らの伊勢ケ浜部屋の序の口力士が、プロレスラー募集の船に乗ってアメリカへと旅立ち、松田は翌年には松田虎吉（トラキチ・マツダあるいはソラキチ・マツダ）としてデビューを果たしている。

その後も多くの日本人レスラーがアメリカマットで活躍しており、小島泰弘（ヒロ・マツダ）や、ハワイでは志熊俊一（キラー・シクマ）なども人気レスラーだったが、アメリカで活躍したこれらの日本人レスラーは、

その技術を日本に持ち帰ることはなかった。

さて、日本プロレスを旗揚げした力道山は、木村政彦や山口利夫といった柔道家との死闘を経て、対戦相手を外国人レスラーにしぼる。シャープ兄弟ら大型外国人レスラーを伝家の宝刀・カラテチョップでバッタバッタとなぎ倒す様は、敗戦間もない頃の落ち込んでいた日本人の心に希望を与えることとなった。旗揚げ同年の2月にNHK、8月には日本テレビがテレビ放送を開始。街頭テレビにはプロレスファンが押し寄せ、皆が熱狂した。当時のテレビの三大コンテンツであった大相撲やプロ野球も、プロレス放送の熱狂の前では色あせて見えたといわれる。

ブームが落ち着いた後も国内の市場を独占していた日本プロレスだったが、1963年、突如大きな衝撃に見舞われる。力道山が赤坂のナイトクラブ「ニュー・ラテン・クオーター」で暴力団員に刺され、一週間後、腹膜炎から腸閉塞を併発し死亡する。プロレス人気はこのまま凋落かと思われたが、力道山の死後も東京プロレス、国際プロレスが相次いで旗揚げ、さらに二大エースとして日本プロレスを支えていたアントニオ猪木、ジャイアント馬場がそれぞれ新日本プロレスと全日本プロレスを旗揚げし、両エースを失った日本プロレスは崩壊。力道山が築きあげた戦後プロレスは幕を閉じた。

猪木、馬場の両巨頭時代

力道山亡き後のプロレス界は、アントニオ猪木の新日本プロレスとジャイアント馬場の全日本プロレスによって再び黄金時代を迎える。両団体はプロレスのカラーの違いを明確に打ち出す事により、それぞれのファンに支持されていった。

アントニオ猪木率いる新日本プロレスは「プロレス最強」を掲げ、柔道のウィリアム・ルスカ、ボクシングヘビー級チャンピオンのモハメド・アリ、極真空手の〝熊殺し〟ウィリー・ウィリアムスなどとの異種格闘

技戦を行い、「誰が一番強いんだ?」というファンの思いに応える話題性を全面に押し出すと同時に、それまでヘビー級へのステップとしての位置付けでしかなかったジュニア・ヘビー級をヘビー級から切り離した独自のカテゴリーとして確立し、タイガーマスクやダイナマイト・キッド、小林邦昭などのスピードと華麗さを併せ持つスーパースターを育て上げた。

一方、ジャイアント馬場率いる全日本プロレスは、馬場独自のアメリカマット界との強力なコネクションをもとに、普通では実現しない大物外国人レスラーを次々と招聘し、日本人レスラー対外国人レスラーというわかりやすい構図でファンを魅了した。

こうして第2期プロレス黄金時代を築き上げた猪木、馬場の両巨頭も、1980年代に入ると年齢的な衰えを感じはじめ、それぞれ自分に代わる次世代エース候補を育て上げ、さらにプロレスを面白くさせていく。新日本の藤波辰巳（現・藤波辰爾）と長州力、全日本のジャンボ鶴田と天竜源一郎（現・天龍源一郎）の台頭である。彼らは団体の看板として団体のカラーを実践し、アピールし続けるだけでなく、タッグパートナーでもあったお互いに対してもライバル意識を剥き出しにした。

ＵＷＦの格闘路線

1984年、日本のプロレス界に大きな転機が訪れる。新団体ＵＷＦ（ユニバーサル・レスリング・フェデレーション）の旗揚げである。

新日本プロレスの元営業本部長の要職にあった新間寿氏の呼びかけにより、前田明（現・前田日明）やラッシャー木村、グラン浜田、剛竜馬、マッハ隼人らによって立ち上げられたＵＷＦは、藤原善明、高田伸彦（現・高田延彦）、山崎一夫ら遅れて参戦した選手たちとともに、ショー的要素を一切廃した格闘技色の濃い試合スタイル（シュートスタイル）を実践、一部のマニアから絶大な支持を得るようになっていった。

その試合スタイルは道場におけるスパーリングさながらで、今までほとんど注目されることのなかったアキレス腱固めやチキンウイング・フェイスロックといった地味な技が説得力を伴うフィニッシュ・ホールドとして多用され、従来の大技を軸にした試合スタイルからの脱却を図った。またロープに振る・振られるといったプロレス特有の動きをほとんどしない試合も見られるようになった。

ＵＷＦはさらに、日本において「プロレスの神様」と称されるカール・ゴッチのストロングスタイルを実践する団体として話題となった。ゴッチ門下生である木戸修や藤原善明といった〝いぶし銀〟系レスラーの才能は、ＵＷＦマットにおいて初めて開花したと言ってもいい。

しかしこのＵＷＦ、旗揚げから崩壊、離散に至るまでの背景は謎に満ちあふれている。設立の裏にはアントニオ猪木の事業の失敗による莫大な負債が関係しているとも言われ、また猪木自身も後に新日本を離脱し、ＵＷＦに参加する計画だったと言われる。実際、ＵＷＦに参加したレスラーの一人は、猪木から「あとから俺も行くので先に行っておいてくれ」と請われたと証言しているのだ。だが猪木がＵＷＦに来ることはついぞなく、最終的にＵＷＦに参加したレスラーは中堅と若手のレスラーのみとなってしまった。

さらに不思議な事は、秘密裏であるとはいえＵＷＦに参加していた外国人レスラーをジャイアント馬場とドリー・ファンク・ジュニアが窓口となって招聘していたということである。まだ規模が小さいとはいえ、ライバル団体に協力するメジャー団体の構図は、当時のプロレス界においてはあり得ない事であった。

一部に熱狂的ファンを獲得したＵＷＦであったが、テレビのレギュラー放映枠を持たなかったことが致命的な弱点となっていく。

またメジャー団体の中堅クラスのレスラーしか擁していなかったＵＷＦに、正真正銘のトップレスラーだった佐山聡（初代タイガーマスク）を迎えたことにより崩壊が加速していった。佐山はＵＷＦ参加の条件として新間寿氏の追放を求め、独自に考案したルールを試合に持ち込んだことで、エースの一人である前田明との確執を招いた。

そしてタイミング悪く社長の逮捕（強要罪）、メインスポンサーだった企業の会長刺殺事件などが続き、急

速に資金繰りが悪化。1985年、UWFはファンに惜しまれながらもその短い幕を閉じた。

平成プロレス・混迷と低迷

1988年に大仁田厚がFMWを旗揚げし、デスマッチを主体としたインディー団体という新しいカテゴリーを確立した。その成功を見た多くの関係者はこぞって新団体を設立、プロレス界は歯止めのきかない多団体時代へ突入する。

同年に前田日明によって設立された第二次UWFも、最終的にはUWFインターナショナル、リングス、藤原組、パンクラスと分裂し(これらは俗にU系団体と呼ばれる)、ファンを裏切る格好となってしまった。団体が増えると、ファンの嗜好の細分化が進み、ジャンルによってマニア化していくのが常である。この時期はプロレス界にとって不運が重なった氷河期時代と言ってもいいだろう。視聴率が下がると、プロレス中継はゴールデンタイムから夕方枠、さらには深夜枠に追いやられ、いっそうプロレスファンの熱は冷めていく。

またアメリカマット界の興行スタイルも、2大メジャー団体によるレスラーの囲い込みが進んだことで、次第にトップレスラーの日本招聘が難しくなっていった。これだけでも日本のプロレスにとっては大打撃であるのに、追い打ちをかけるようにニューウェイブが押し寄せる。

K-1、PRIDEといった総合格闘技の台頭である。真剣勝負であるこれらの総合格闘技に、度重なる内紛や分裂、そして絶対的スターのいなくなったプロレスに寂しさを感じていたファンは飛びついた。一部の中堅レスラーが総合格闘技に挑戦するも、惨敗が続き結果を残せていないという事実も、プロレス人気の低迷に拍車をかけることになった。

冬の時代は続く。

1999年のジャイアント馬場の死は、後の全日本の崩壊を（存続し、現在は復活しつつある）招き、経営権をめぐる確執で三沢光晴をはじめとするほとんどのレスラーが退団、プロレスリング・ノアの旗揚げにつながった。新日本では橋本真也が解雇され、ZERO—ONEを旗揚げする。武藤敬司も新日本を退団し、全日本の救世主として移籍、その後社長となって辣腕をふるっている。インディー団体はさらに増え続け、メジャー団体とインディー団体が入り混じり、両者の境界はますます曖昧になってきている…。

こうした状況のなか、2006年、プロレス界の未来を考えグローバル・レスリング連盟が発足し、プロレス統一機構として現在も活動が続いている。このグローバル・レスリング連盟が今後機能し、発展していく事こそ、プロレス復権に向けての第一歩となるかもしれない。

プロレスの復権は成るか

ざっとプロレスの歴史を辿ってみたが、皆さんはどう思われただろうか？

ここで改めて断言するが、プロレス人気が低調気味だからといって、今後プロレスの灯が日本から、あるいは世界から消えてしまうようなことは決してない。

なぜなら、プロレスは単なるスポーツや格闘技ではなく、闘いのドラマであり、エンターテイメント（娯楽）であり、時代の精神を写す鏡として、流行に関係なく観客を魅了できるパワーをもった〝大衆文化〟だからである。

厳しいトレーニングを通して磨き上げた強靭な身体とテクニック、創造性をもとに、レスラーたちはリングという舞台で自分を光らせ、対戦相手を光らせ、みんなをハッピーにしてくれる。

こうした美点さえ失われなければ、今から何百年が経とうとも、プロレスの歴史が途絶えることはないだろう。これからプロレスを知ることになる皆さんも、その歴史の一部になれるのだ！

BREAK TIME

プロレス界にチャンピオンがたくさんいる理由

　プロレス界では「石を投げればチャンピオンに当たる」と言われるほど、たくさんの王座（タイトル）が存在する。日本でも各団体ごとに●●ヘビー級王座、■■タッグ王座など最低二つ以上の王座があるので、元王者も合わせたら、いったい何人の“チャンピオン”がいるのか見当もつかない。こうしたはたから見ればうさんくさい状況はなぜ生まれたのだろうか？　その答えは、日本にプロレスをもたらした本場アメリカマット界に見出すことができる。

　実はアメリカでも、20世紀の初め頃までは一つの王座、一人の王者が当たり前だった。すなわち、1908年に当時アメリカン・ヘビー級王者（国内王者）を名乗っていたフランク・ゴッチが、欧州最強の男 ジョージ・ハッケンシュミットを破って初代王者に認定された統一世界ヘビー級王座だ。

　だが1920年代の末頃から状況が変わってくる。タイトルマッチが商売になることに気づいた各地のプロモーター（興行主催者）たちが、世界王座の“のれん分け”を望むようになったからだ。当然ながら、観客はただの試合よりは王座が賭けられた試合に興味を持つし、プロモーター側としても宣伝の柱となり、観客数のアップを見込めるタイトルマッチを歓迎する。

　ところが、今のように全国ネットのテレビ放送もインターネットもない時代、タイトルマッチを観たかったら、王者に自分たちの地元に来てもらうしか方法はない。しかし王者は一人しかおらず、全米中から引く手あまた。国土が日本の約25倍もあるアメリカのこと、これでは何年待たされるかわかったものじゃない。

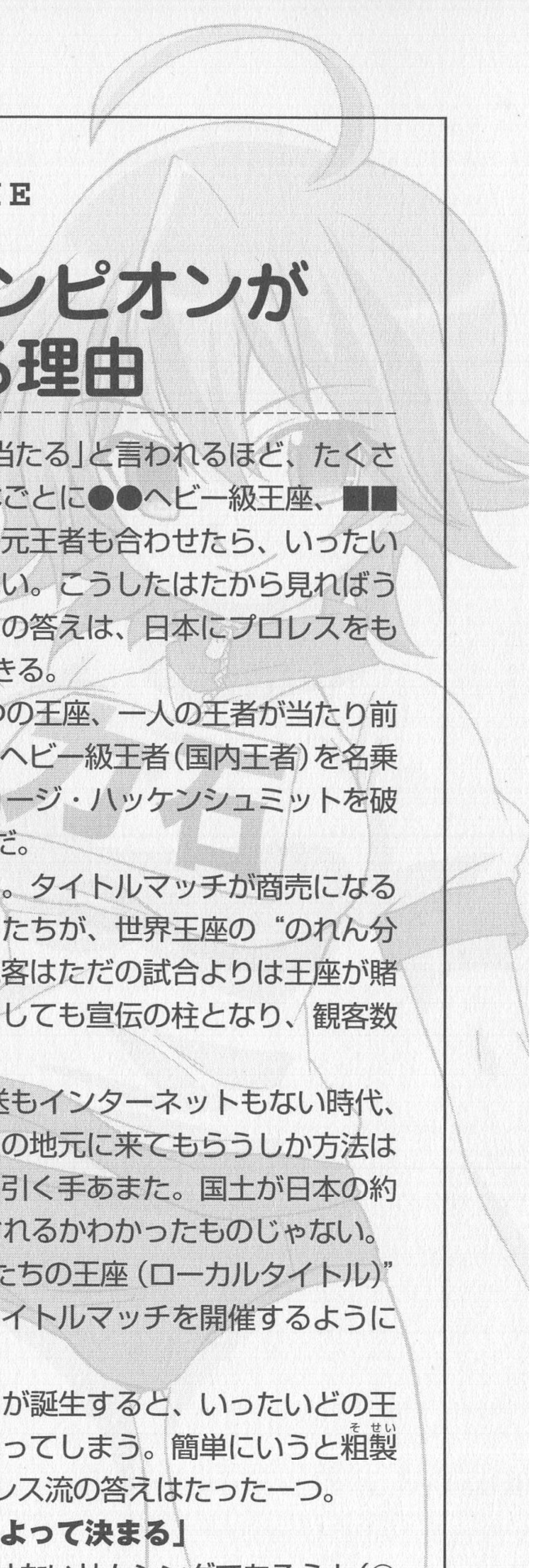
　というわけで、各地のプロモーターたちは“自分たちの王座（ローカルタイトル）”と王者を続々と認定して、地元で好きなときにタイトルマッチを開催するようになった。観客だって喜ぶのだからそれでいいのだ。

　ただし、こうして星の数ほどの“チャンピオン”が誕生すると、いったいどの王座が最も権威があるのかがさっぱりわからなくなってしまう。簡単にいうと粗製乱造による価値の低下だ。この問いに対するプロレス流の答えはたった一つ。

「王座の価値は、それを保持しているレスラーによって決まる」

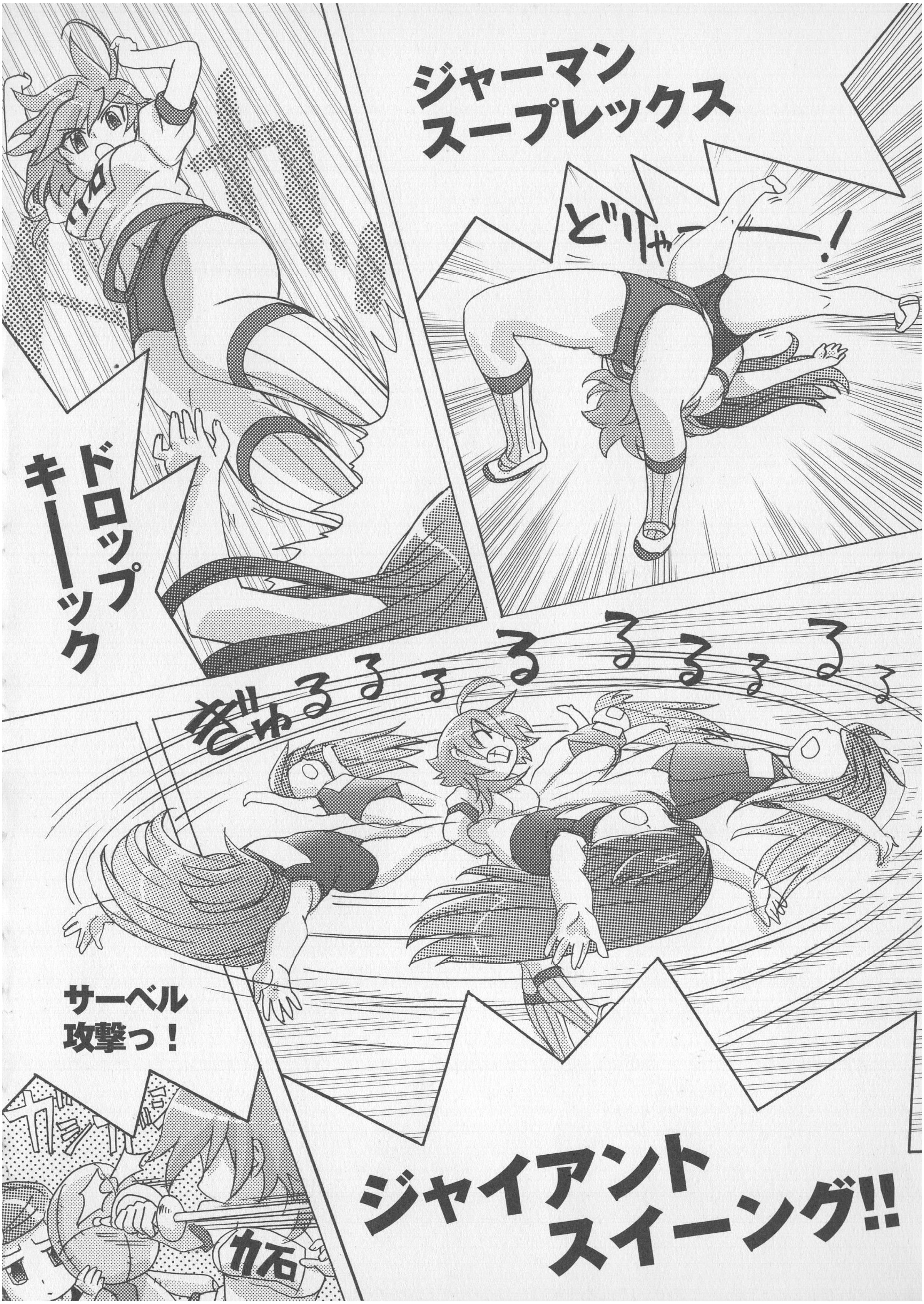
　プロレスが純粋なスポーツであろうと、そうではないサムシングであろうと（©フミ斎藤）、基本的にダメなレスラーはチャンピオンになれない。強くて巧いレスラーが持っている王座を、それ以上に強くて巧いレスラーが闘って勝ち獲ることで、王座の価値はゆっくりとだが確実に高まっていく。

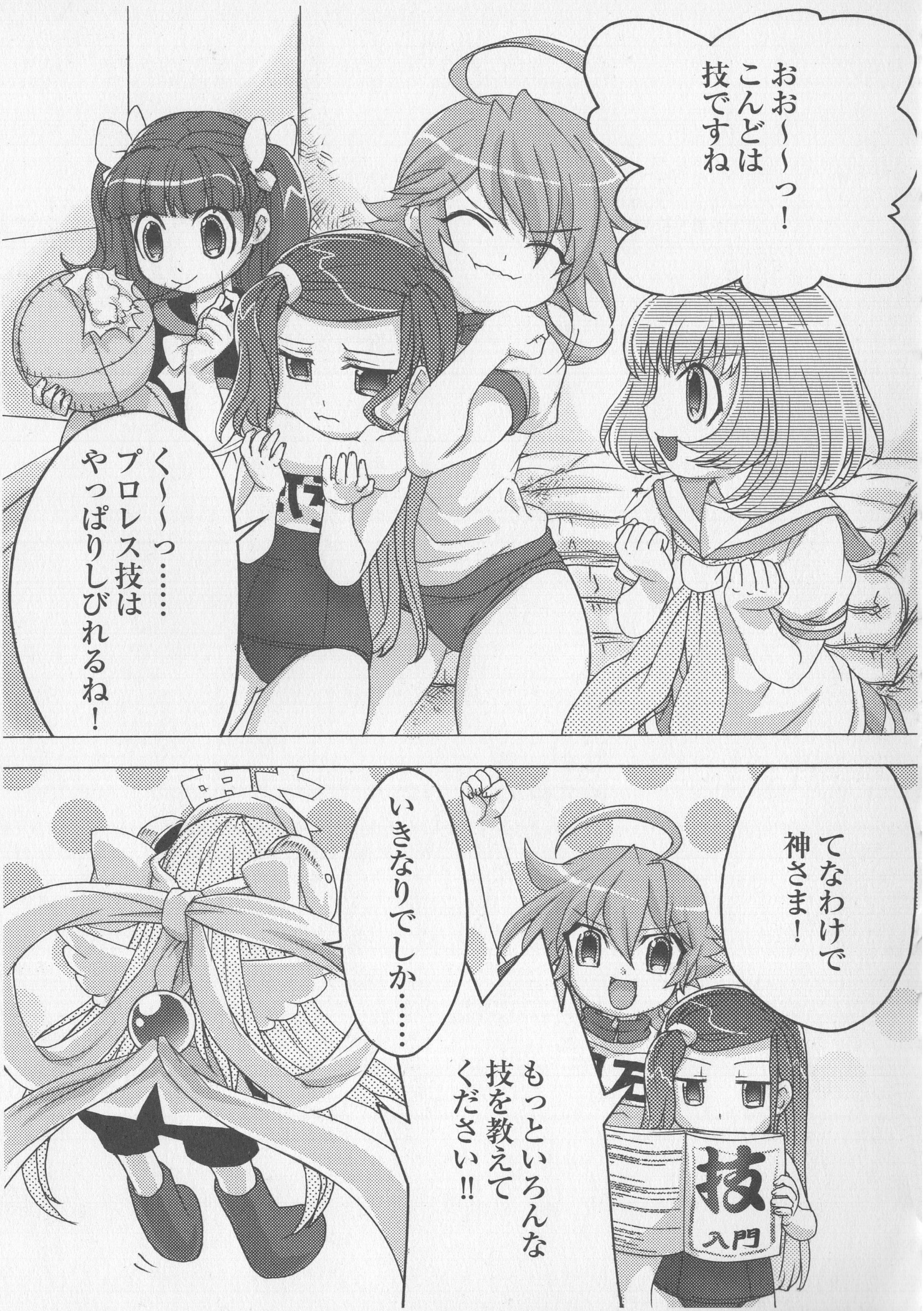
「プロレスの王座」と一口にいっても、その価値はピンからキリまである。これは否定しようのない事実だ。ただし、その価値を決めるのは他でもない、プロレスラー自身なのだ。



第三章

技をおぼえてみよう！


ジャーマン
スープレックス
どりゃーーー！
ガッ
ドロップ
キーーック
ぎゅるるるるるるるるるる
ジャイアント
スイーング!!
サーベル
攻撃っ！
ガシィ
力石


おお〜〜っ！
こんどは
技ですね
く〜〜っ……
プロレス技は
やっぱりしびれるね！
てなわけで
神さま！
もっといろんな
技を教えて
ください!!
いきなりでしか……
技
入門

プロレス技と試合運びの関係

プロレスの歴史が理解できたなら、プロレスを楽しむ上で必要不可欠な技を覚えてみよう。前述したが、プロレスの試合は勝敗の結果だけを求めるものではなく、そのプロセスにこそ真の醍醐味がある。入場のパフォーマンス、ゴングが鳴ってからの序盤の探り合い、グラウンドの攻防、痛め技の応酬、さらにスタミナを奪ってからフィニッシュに至るまでの大技の入り方、絶体絶命のピンチをさらに切り返しての反撃、両者限界を越えての激闘の末に訪れる結末。この一連の、いわば人生にも似たプロセスにファンは熱狂し、感情移入していくのである。

野球に例えると、攻撃側は決勝点となる1点を取りにいく時、全員がホームランを狙う（勝ちのみの追求）と大味になって結局は点をあげられないまま終わる可能性の方が高い。だからスピーディーな小技で出塁（序盤の主導権争い）し、自己犠牲のバントで進塁（グラウンドの攻防）させ、技巧派のヒット（痛め技でスタミナを奪う）でランナーを返す事を狙う。たとえアウトになっても、長打力をもったネクストバッター（フィニッシュとなる必殺技）が勝負を決める。もちろん、シナリオどおりには進まないのも勝負事の常、相手バッテリーは配球を組み立て、野手はケースに応じて守備位置を移動する。そういったやり取りにファンが手に汗を握り、一喜一憂していくのと同じ感覚である。

さて、そのプロセスを楽しむために必要な知識として、技を覚えることが大切になる。ただ「うわっ、痛そう！」「骨が折れそうだよ…」程度の認識でもプロレスは充分に面白い。しかしよりディープに楽しむためには、一つ一つの技を覚え、どこにダメージがあり、どのタイミングで技が出るのかを知っていると、まるで戦っているのが自分であるかのような体験が可能になる。

好きなレスラーができたなら、その選手の得意な技を覚えていこう。そうすることによって、「よぉし、

ここで●●だ！」「□□で決めろ〜」なぁんて、自分なりの展開を予想しつつ応援することもできる。たとえ違う技が出ても「くぅ〜、そうきたか！」などと妙に納得して嬉しくなるものだ。さらに、その技によって相手のダメージを計ることができるようになると、もうあなたは立派なプロレスマニアといえるかもしれない。

痛め技と決め技（必殺技）の違い

プロレスの試合ではプロセスが大切であるということは、わかっていただけたと思う。一試合の中に盛り込まれた様々なドラマは、観る者に感動を与えてくれる。

選手は観客の気持ちをコントロールしながら徐々に盛り上げていかなくてはならないから、レスラーが花道に姿を現したところから、すでにストーリーは始まっている。

ゴングが鳴って試合開始が告げられても、レスラーはいきなり大技にはいかない。相手の様子をうかがい、自分の調子を確認しつつ、お互いが自分のペースに持ち込むため、主導権を握るための探り合いだ。

徐々に身体が温まってきたら、相手にダメージを与え、疲労を蓄積させるために痛め技や関節技などを出し始める。言うまでもなく、プロレスラーは尋常でないスタミナと精神力を持ったいわば超人だ。したがって開始直後にバックドロップをくらったとしても平然と起き上がるし、受け身をきちんと取ることでかなりのダメージを軽減できる。なにより元気いっぱいの序盤に大技を掛けようとしても、相手も「はい、そうですか」と掛けさせてはくれないはずだ。

序盤から中盤にかけては、お互いが痛め技や関節技、絞め技を駆使し、相手のスタミナを奪い、自分の決め技を最も効果的に仕掛けるための攻防が繰り広げられる。と同時に、相手の決め技を封じる、あるいは決め技の威力を半減させるため、身体の一部を重点的に攻めたりする。

ここで面白いのは、痛め技と決め技は、戦うレスラーによって認識が違うということである。例えばブレ

ーンバスターという技は、多くのレスラーは痛め技として使っているが、橋本真也選手のブレーンバスター（垂直落下式ＤＤＴ）は紛れもなく決め技であった。もちろん、彼のブレーンバスターには観る者すべてを納得させる強烈なインパクトがあった。同じように、ジャーマン・スープレックスやラリアット、パワーボム、ダイビング・ボディプレスなど、使い手によって痛め技であったり決め技であったりする。

だが、やはり決め技として使うレスラーには、ひと味違う〝キレ〟がある。一つの技に磨きをかけ、誰よりもその威力を知り、「ここぞ！」と決めたその時が来るまでじっと耐えてから繰り出す技は、試合における大きな勝負の分かれ目といえる。

決め技を出すからには絶対に返させない、ここで決めてやるという自信をもって仕掛けるのだから、返された時のショックも大きい。同じ技を繰り返す事しか残されていないレスラーは、今度は相手の決め技をくらう運命が待っているのが常だ。

力道山のカラテチョップにはじまり、アントニオ猪木の卍固め、ジャンボ鶴田のバックドロップなども、決め技・最後の一手として有名であったが、さすがにトップを張るレスラーの必殺技は、ほとんど返されることはなかった。

さあ、本題。

試合を観る上で、技を覚えているとお互いのレスラーが次に何をしたいかが見えてくる時がある。試合の凄さだけでなく、レスラー同士の駆け引きや意地の張り合いなども感じとれるようになると、プロレスの楽しみ方にいっそう深みが増す。

またプロレスラーとファンとの読み合い、探り合いが生まれることによって、レスラーは観客とも勝負することになる。いい意味でファンの予想を越える、インパクトのある試合をしていかないと名勝負は生まれないし、いずれは忘れ去られる選手となってしまう。だから技を覚えるということは、〝ファンがプロレスラーを育てる〟ことにもつながる。

なぁに、プロレスが好きになるとすぐに覚えてしまうので、気をラクにしていこう。

代表的なプロレス技

あ行

●アキレス腱固め

この技を一躍有名にしたのは第一次ＵＷＦです。当時ほとんどのＵＷＦ選手がフィニッシュ・ホールドにしていた感があり、シンプルな見た目とは裏腹に、危険度五つ星の関節技です。

掛け方は、相手の足首を腕でロックし、踵（かかと）のすぐ上にあるアキレス腱を圧迫し捻（ひね）り上げていきます。ポイントはロックした後、いかに相手の足を固定できるかです。

プロレスファンなら誰もが一度は試した事があると思いますが、アキレス腱固めは力が強いほど効く訳ではありません。腕力がある人でも、力任せに絞り込んでいるだけではそれほど痛くなく、実際はアキレス腱ならぬただの「ふくらはぎ絞り」になっていたりします。

本当のアキレス腱固めは、ロックしている腕をやや上に引き上げながら、自分の上半身を内側に捻るようにすると、一瞬にしてタップ（降参の合図）させるほどの決め技になります。

●足四の字固め（フィギュア・フォー・レッグロック）

この技の使い手として最も有名なのは、力道山のライバルだった〝白覆面の魔王〟**ザ・デストロイヤー**。しかし、デストロイヤーの足四の字は「逆四の字」と言われていて、真上から見ると「4」の字が反対に組まれていました。

また**ジョニー・パワーズ**の使う足四の字は、他のレスラーより威力がある（とされた）ことから、四の字の倍、「エイトロック」と呼ばれました。この他、〝ネイチャーボーイ〟バディ・ロジャース、**リック・フレア**

ーも忘れてはいけません。

日本人の最初の使い手は、グレート草津（初代。Ｋ・１に参戦している格闘家グレート草津は二代目）と言われています。その後、ラッシャー木村や最近では**武藤敬司**が決め技にしています。

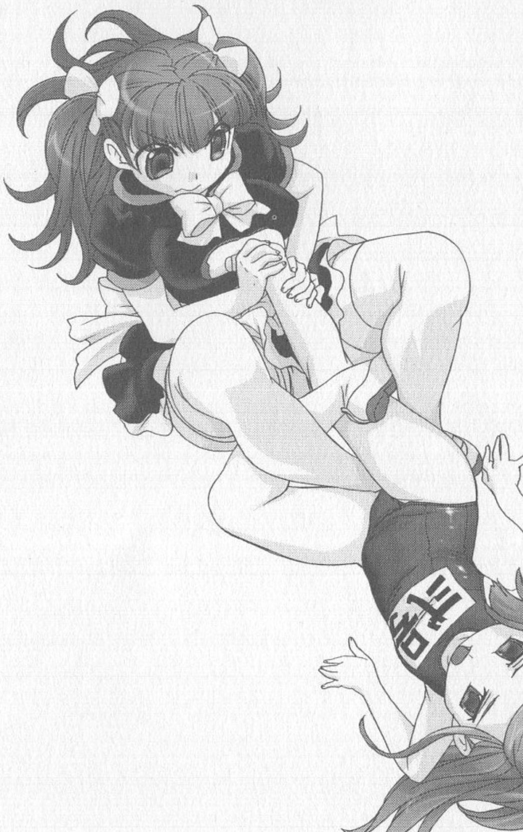
掛け方は、仰向けに倒れた相手の片方の足首を掴（つか）み、膝（ひざ）から直角に折り曲げるようにして自分が３６０度回転、さらに反対の足を掴んで数字の４の形になるようにロックします。そして自ら後ろに倒れ込み、最初に掴んだ足首に自分の膝裏を乗せるようにしてフックすれば出来上がり。ほとんどのレスラーはこの方法を用いますが、ジョニー・パワーズは立ったまま回転せずに、レッグロックの体勢で足を組む入り方をしていました。

返し方には幾つか種類があり、相手が回転しようとする際に頭を掴んで丸め込む方法、回転中に後ろを向いた相手のお尻を蹴る方法、もう一つは、技が掛かった後にお互いがうつ伏せになるように反転し、相手に逆にレッグロックが掛かるようにする方法などがあります。

●アルゼンチン・バックブリーカー（アルゼンチン式背骨折り）

幾つかあるバックブリーカー（背骨折り）の中でも一番の拷問（ごうもん）技と言えます。

アルゼンチンの名前の由来は、元祖である**アントニオ・ロッ**



足四の字固め

力がアルゼンチン国籍でデビューした（本当はイタリア人）ことから付けられています。

日本人では、かつては坂口征二（せいじ）（タレントの坂口憲二の父）、現在は**中西学**や井上雅央が主な使い手として知られています。

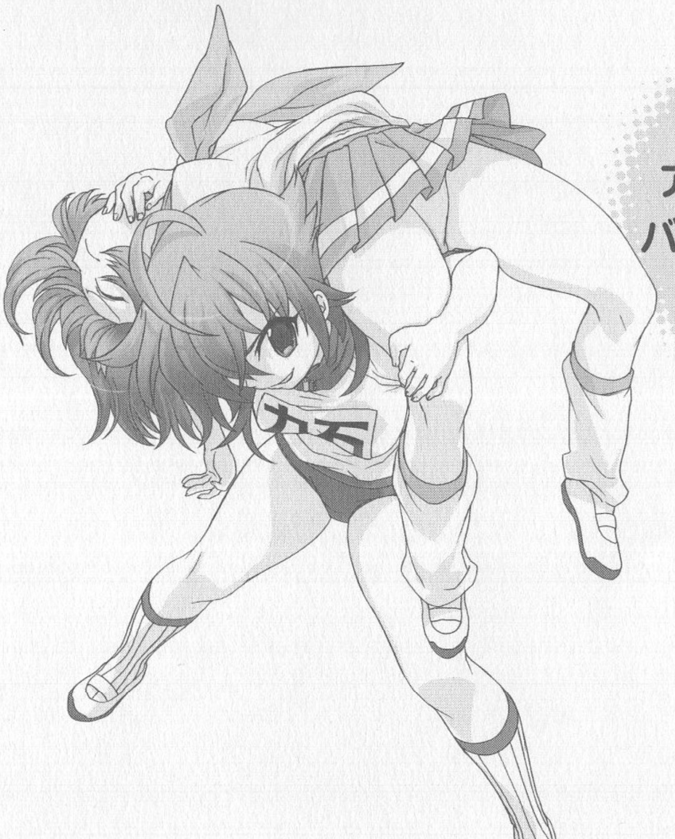
掛け方は、片方の腕で首を反らせるように相手の顎（あご）を取り、胴体を仰向けにして両肩に乗せ相手の股下にも腕を入れてロックし、そのままリフトアップして両腕で絞り上げます。この技は締め技と関節技の複合技で、首、背骨、腰、股関節すべてにダメージを与えます。相手はほとんど身動きできず、呼吸さえも困難になります。

絶対という技の抜け方はありませんが、ジタバタしていれば（運が良ければ）外れる事もあります。また、ギブアップかどうか様子をうかがいに来たレフェリーの服を掴んで強引に倒れるという、ちょっと卑怯（ひきょう）な方法もあります。

●腕ひしぎ逆十字固め（柔道名・腕ひしぎ十字固め）

ギブアップを取る関節技で、最も使われる頻度（ひんど）の高い技のひとつ。

この技のオリジナルは実は柔道技で、柔道では腕ひしぎ十字固めといわれていますが、なぜかプロレスだと〝逆〟がついてしまいます。文字どおり、極めたときの姿が十字に見えることから付いた名前です。



アルゼンチン・バックブリーカー

掛け方は、掛ける側が股間に相手の片腕を差し込み、両者が仰向けになった状態で肘関節を逆方向に曲げ、肘と肩にダメージを与えます。

抜け方は、両手をがっちりと組み、肘を伸ばされないようにして防ぐ方法がよく見られます。ただしこの技は、関節の極める部分がかなり狭いので、よほど完璧に極まらないかぎり単なる痛め技としての効果しかありません。完璧に極まりさえすれば、一瞬にしてギブアップを奪えます。

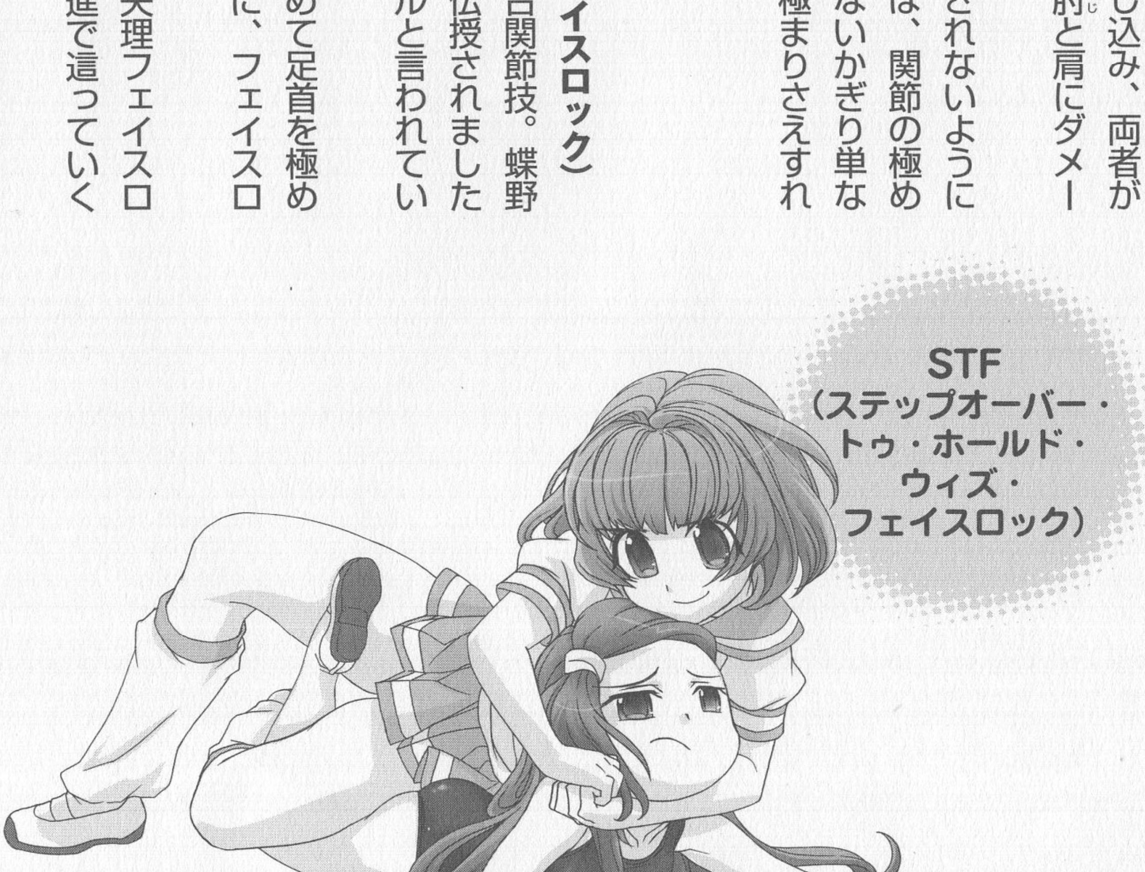
●STF
（ステップオーバー・トゥ・ホールド・ウィズ・フェイスロック）

蝶野正洋の決め技として一躍脚光を浴びた複合関節技。蝶野選手はこの技を〝鉄人〟**ルー・テーズ**から直に伝授されましたが、元祖はそのテーズの兄貴分、レイ・スチールと言われています。

掛け方は、うつ伏せの相手の背後から足を絡めて足首を極める（ステップオーバー・トゥ・ホールド）と同時に、フェイスロックで顔面を絞め上げます。

掛けられた相手は身動きできなくなり、無理矢理フェイスロックを手で外すか、ロープまで小刻みに匍匐前進で這っていくしか逃れる術はありません。

当代随一の使い手である蝶野によって、フェイスロックを羽


STF
（ステップオーバー・
トゥ・ホールド・
ウィズ・
フェイスロック）

根折り固めに変えた羽根折り式、スリーパー・ホールドに変えたスリーパー式、足を交差させてロックするクロス式などの様々な派生技が生まれました。

蝶野以外にも、馳浩（はせひろし）の裏STF、マグナムTOKYOのSTF（ステップオーバー・トゥ・ホールド・ウィズ・フェロモン）、ミラノコレクションATのSTF（ステップオーバー・トゥ・ホールド・ウィズ・ファッション）などの亜流技が知られています。

またアメリカでも、ジョン・シーナがオリジナルのSTFをSTF・Uと称してフィニッシュ・ホールドとして使っています。

●エルボー

エルボーとは「肘（ひじ）」の事です。プロレスではパンチは反則なので、多くのレスラーはパンチの代わりの打撃技としてエルボーを使っています。このエルボーによる基本技には大きく二つ、エルボースマッシュとエルボードロップがあります。

エルボースマッシュは、下から肘を振り上げるようにして相手の顎や顔面に打ちつけます。連続して使うと脳が揺れてかなり効きます。**ドリー・ファンク・ジュニア**、西村修などがこだわって使用しています。

エルボードロップは、倒れている相手の胸板に自分の体重を乗せるようにして肘を落とします。これを飛び上がってから落とすとジャンピング・エルボードロップに、コーナー最上段やトップロープから落とすとダイビング・エルボードロップになります。

この他〝エルボーの貴公子〟と呼ばれた**三沢光晴**は、助走をつけてのランニング・エルボー、身体の回転力を利用したローリング・エルボー、場外にいる相手を急襲するエルボー・スイシーダなど、多彩なバリエーションを持っています。また武藤敬司のフラッシング・エルボー、**ザ・ロック**のピープルズ・エルボーなども発展技として広く知られています。

ところで、パンチがご法度（はっと）のプロレスルール。なのに「フィストドロップ」やアントニオ猪木の「弓を引く

左ストレート」、天龍源一郎の「グーパンチ」などが当たり前のように存在するのも、プロレスの奥深さ（？）といえるでしょう。

●延髄斬り

アントニオ猪木の代名詞的な技です。モハメド・アリとの異種格闘技戦のために開発されたといわれていますが、その後、プロレスの試合で多用されて一躍有名になりました。

相手の首の後ろ（延髄）を目がけて蹴りをぶち込む単純な技ですが、試合においては起死回生の一撃として使われていました。天龍源一郎もこの技の使い手の一人ですが、彼の場合は相手の首を片手で掴み、そこを起点にして蹴り込むスタイルです。また名称こそ異なりますが、川田利明のジャンピング・ハイキックも延髄斬りの一種と考えていいでしょう。

ちなみに、延髄斬りは海外でも「エンズイギリ」というほぼそのままの名称で使われています。

か行

●カナディアン・バックブリーカー（カナダ式背骨折り）

アルゼンチン・バックブリーカー、ハイジャック・バックブリーカーと並ぶ世界三大バックブリーカーの一つ（ハイジャックの代わりにシュミット式バックブリーカーを入れる説もあり）。アルゼンチン式は相手を両肩に担ぎ上げますが、このカナダ式は相手を片方の肩に担いで締め上げます。技名の由来には、カナダで活躍した**ユーコン・エリック**が得意としたためという説と、担ぎ上げた姿勢がカナダの樵が木を担いでるように見えるからという説があります。

掛け方は、片方の肩に相手を仰向けにひっくり返して乗せ、両腕で相手の顎や胸の前をガッチリと抑え、相手の下半身を自分の背中側に宙吊りにして完成です。肩を支点にして相手の下半身が宙吊りになるため、身体の重みで背骨をそのまま軋ませることができます。相手は暴れるほどに自分の背骨を痛め、身動きすら

できなくなります。

この技を有名にしたのは、〝人間発電所〟**ブルーノ・サンマルチノ**。ライバルのジャイアント馬場との試合で出したカナディアンは伝説となっています。

日本では吉江豊がカナディアン・バックブリーカーの体勢から相手をうつ伏せにフェイスバスターの形で落とす派生技、「カナディアン・ハンマー」の使い手として知られています。

●キチンシンク

相手のみぞおち目がけて自分の膝を思い切り突き立てる、単純ながら強烈な技です。技名の由来は、くらった相手のお腹が「台所の流し台（キッチン・シンク）」のように凹むからという説が有力です（他にも諸説あり）。この技をくらった相手は、クルリと一回転してマットに叩きつけられ、みぞおちを抑えるようにして身体を丸めてもがき苦しみます。かなり悲壮感の漂う技です。

元祖は不明ですが、使い手として最も有名なのは**ジン・キニスキー**です。日本人では、ジャンボ鶴田や長州力がロープに振って返ってくる相手にキチンシンクをくらわせる派手な使い方をしていました。

●逆エビ固め（ボストン・クラブ）

観る側にも痛みが伝わる、プロレスの代表的な技です。

元祖は〝黄金のギリシャ人〟の異名を持つギリシャ系レスラー、**ジム・ロンドス**。技名の由来は、技をかけたときの姿がロンドスの地元で獲れるボストン名物のエビ（ボストン・クラブ）に似ていることから付けられました。

掛け方は、仰向けになっている相手の両足を脇の下に挟んでグルリとまたぎ、うつ伏せになった相手の背中を反らすようにして背中と腰を締め上げます。なお、片足だけをとって締め上げる技を逆片エビ固め（ハーフ・ボストン・クラブ）といいます。

逃げ方は、腕立て伏せ&匍匐（ほふく）前進の要領でロープまで進んでいく方法が一般的ですが、藤原善明は頭をマットに付けて倒立し、身体を反転させて相手を逆に投げ飛ばすという驚きの返し技を開発して観客を魅了しました。

最近は痛め技として使われることが多いですが、決め技としては、**クリス・ジェリコ**が「ウォール・オブ・ジェリコ（ジェリコの壁）」という名前で大事に使っています。

●キャメル・クラッチ（ラクダ固め）

その名の通り、相手の背中にまたがって顎に手を掛けて締め上げる姿が、ラクダの背中にまたがって口にかけた手綱（たづな）を後ろに引いているように見えることから、キャメル・クラッチ（ラクダ固め）と呼ばれます。うつ伏せになった相手の顎を両手でロック、そのまま後ろに引き、腰を深く落として自分の体重をかけることで相手の背骨に激しいダメージを与えることができます。また顎ではなく、顔面を掻（か）きむしるようにして締め上げる屈辱（くつじょく）的な掛け方もあります。

ラクダというイメージのせいか、この技を得意とするレスラーは**ザ・シーク**やアイアンシークなどのアラビア系キャラクターのレスラーがほとんどです。またメキシコでは「カバージョ」と呼ばれ、〝聖者〟**エル・サント**が多用していました。カバージョは日本でもスペル・デルフィンが決め技として使っています。

●ギロチン・ドロップ

仰向けにダウンした相手目がけて勢いよくジャンプし、片足を水平に真っ直ぐに伸ばし、膝裏からふくらはぎにかけての部分を相手の首筋に〝ギロチン〟のように叩きつけます。相手に逃げられると派手に尻餅（しりもち）をつくことになるので、なかなかリスクの高い技です。

元祖は不明ですが、**ブルーザー・ブロディ**のそれは観る者を納得させる強烈なインパクトがありました。また**ハルク・ホーガン**も「レッグドロップ」という名前でこの技をフィニッシュ・ホールドにしています。

日本では、かつて小橋建太がコーナー最上段からダイビング式のギロチン・ドロップを決めたこともありました。高山義廣（よしひろ）もよく使っています。

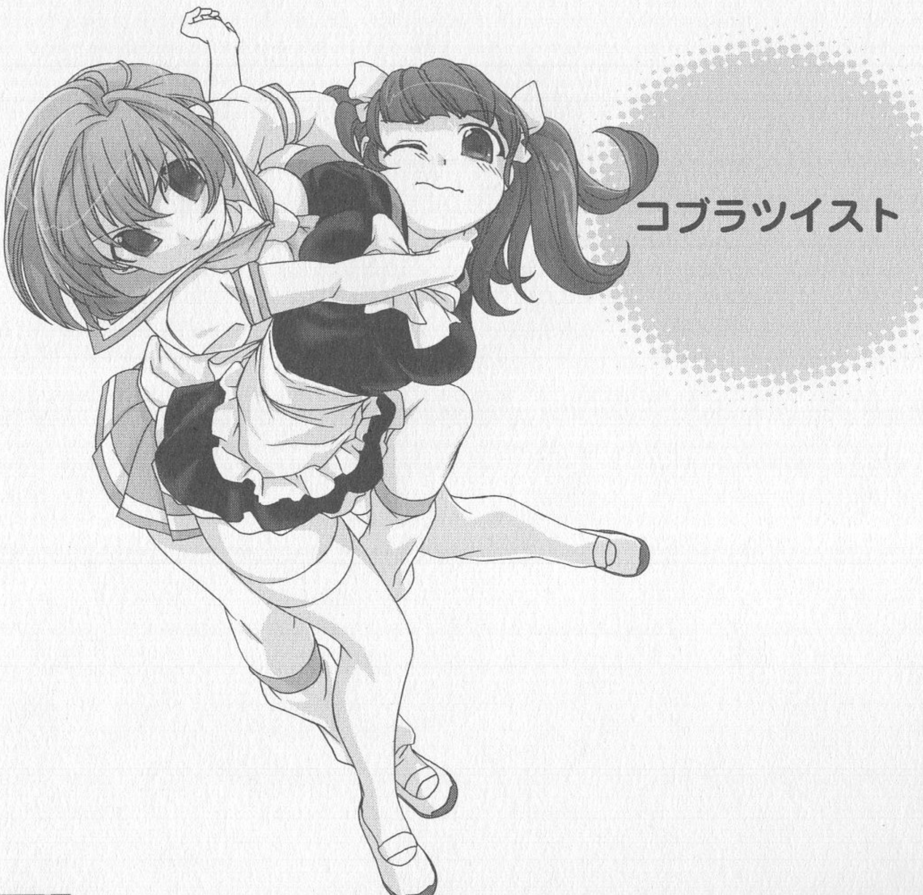
　こうなると身体が大きなレスラーの得意技と思われがちですが、史上最軽量(163cm・75kg!)で世界ヘビー級王者となった**レイ・ミステリオ**もスプリングボード式のレッグドロップをフィニッシュ・ホールドのひとつにしています。

●コブラツイスト

バックドロップやブレーンバスターと並んで、最も有名なプロレス技のひとつ。その昔、プロレスごっこをする子供たちは必ずコブラツイストの掛けっこをしたものです。アブドミナル(腹直筋)ストレッチ、グレープバイン(ぶどう絞り)といった別名もあります。

　掛け方は、相手の左足に自分の左足を乗せて絡めるようにフックし、素早く背後にまわって自分の左腕を相手の右脇の下を通して首の後ろに巻きつけ、両手をクラッチして相手の上半身を思い切り捻り上げます(左右は逆でも可)。返し方は、背筋を使って力づくで投げ飛ばします。

　海外ではディック・ハットン、日本では**アントニオ猪木**の代名詞的な技でした。またジャンボ鶴田も両手の平で相手の顔をグイグイ押し下げる派生技「拷問コブラ」で有名になりました。



一方、藤波辰爾や西村修はコブラツイストの体勢のまま後ろに倒れこんでフォールを取りにいく「グラウンドコブラ」の名手として知られています。

さ行

●サソリ固め

（スコーピオン・デスロック、シャープシューター）

長州力の決め技として一躍有名になった技です。変形の逆エビ固めともいうべき技で、腰や背中だけでなく足首の関節も極める複合技です。

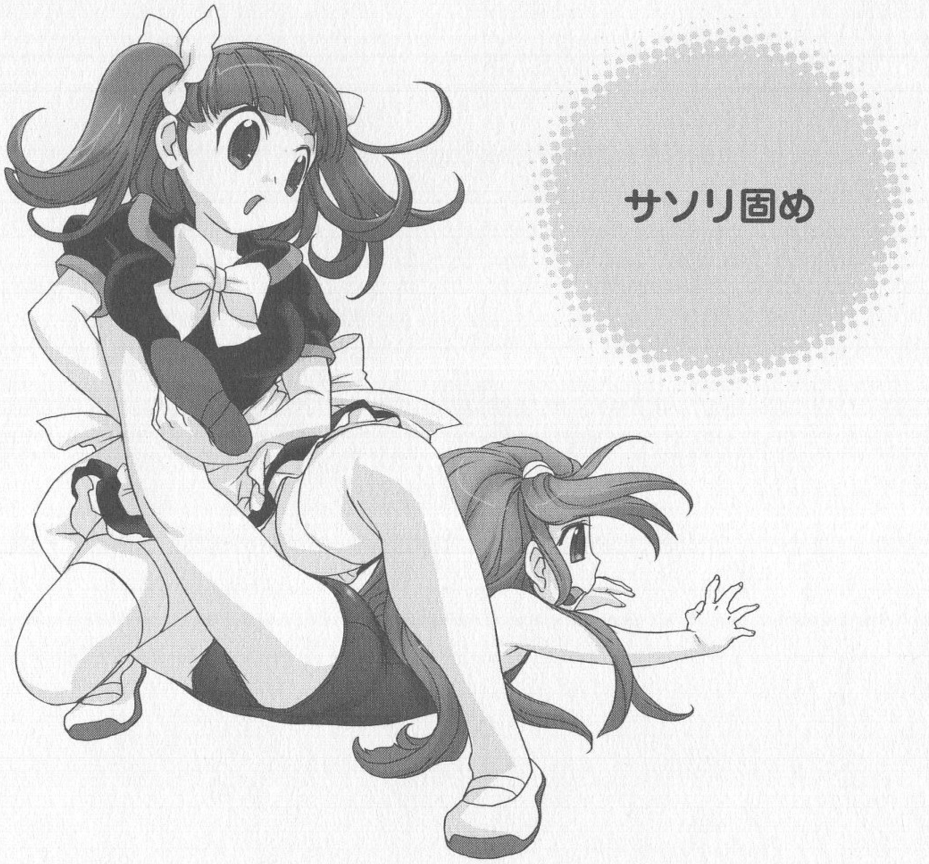
掛け方は、自分の片足を相手の股間に入れ両足を交差してフックし、ステップオーバーして反転し、腰を落として締め上げます。長州力のサソリ固めはステップオーバーするまでの〝間〟が魅力で、相手を正面から見下ろすように睨む瞬間が大きな見せ場となっています。

アメリカではシャープシューター（狙撃手）という技名になり、〝ヒットマン〟**ブレット・ハート**やスティングなどが名手として知られていました。

●ジャイアント・スイング

相手をひたすらブン回す技。

掛け方はいたってシンプル、仰向けになった相手の両足を自分の両脇に抱え込み、円を描くように力任せに振り回します。



掛けられた方は遠心力によって頭に血が上り、回転により平衡（へいこう）感覚を失ってフラフラになります。ただし、掛ける方が円の中心軸となって振り回すので、困った事に掛ける方にもダメージがあります。

海外では**ドン・レオ・ジョナサン**や**ゴリラ・モンスーン**、**ジン・キニスキー**らが、日本では**馳浩**が代表的な使い手として知られています。とくに馳浩の引退試合における惜別のジャイアント・スイング45回転(当時の馳の年齢)は伝説になっています。

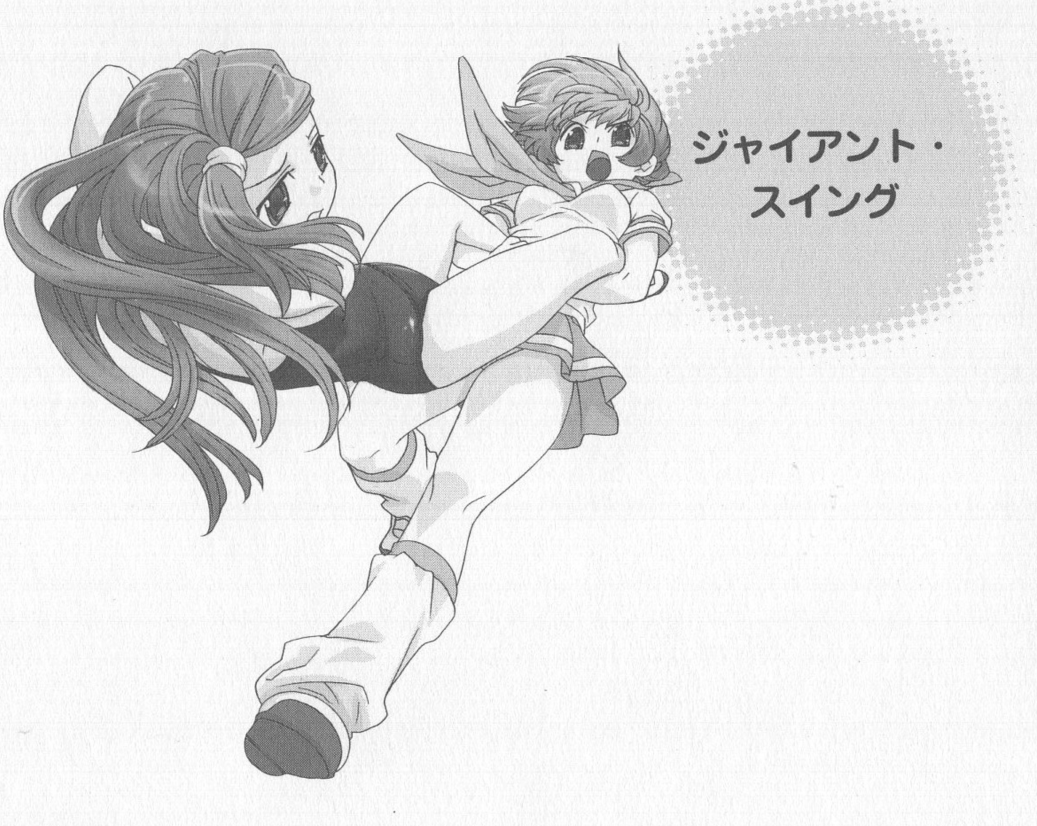
なお、この技が出たら、観客は1回ごとに大声で「イーチ!、ニー!……」と数を数えるのがマナーです。

●シャイニング・ウィザード(閃光魔術)

武藤敬司が開発した変型の飛び膝蹴りで、2001年からムーンサルト・プレス、足四の字固めに続く新しい決め技として使っています。

掛け方は、片膝立ち状態の相手に向かって走りこみ、その相手の足を踏み台にして、顎や側頭部に強烈な膝蹴りを叩き込むというもの。武藤選手はまた、レフェリーやタッグパートナーの背中(!)、ロープに飛び乗っての膝蹴りなど、様々なバリエーションも生み出しました。

この技以降、シャイニング・ケンカキックやシャイニング・イナズマなど、片膝立ちの相手を踏み台にする技は「シャイニ


ジャイアント・スイング

ング●●」と呼ばれるようになりました。ある意味で今のプロレス界の〝流行技〟といえるでしょう。

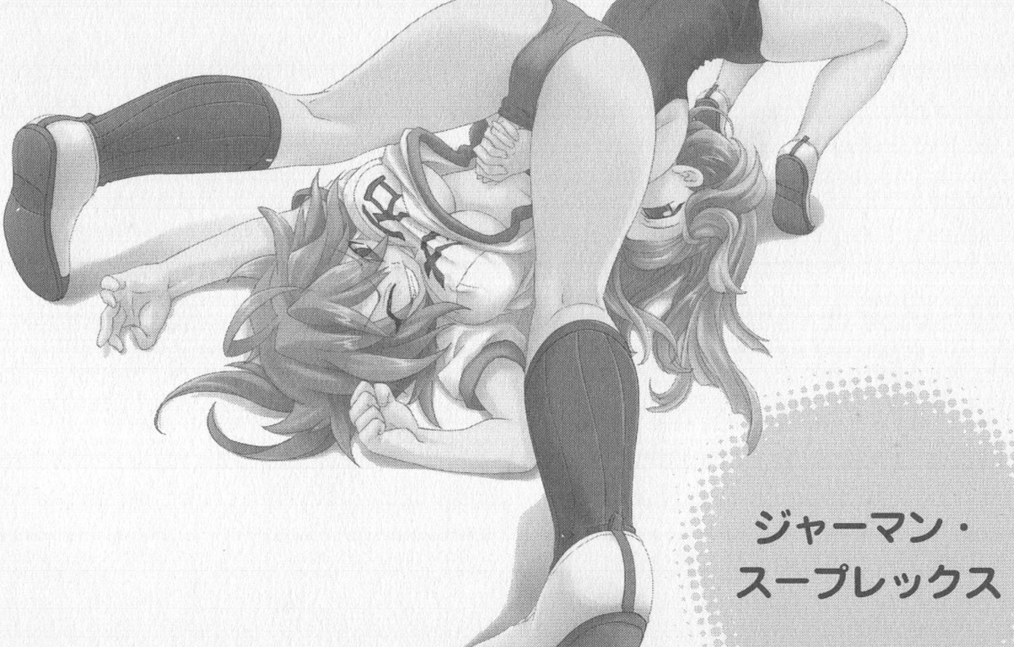
●ジャーマン・スープレックス

最も有名なプロレス技のひとつで、日本における元祖は**カール・ゴッチ**です。

掛け方は　背後から相手の腰に両腕を回し、相手の腰の前で両手をクラッチしたまま後方にブリッジして投げ、相手の後頭部をマットに叩きつけます。投げた後に相手を離さずにフォールに移るとジャーマン・スープレックス・ホールドになります。スープレックスとはアマレスの「後ろ反り投げ」のことです。

返し方は、組みつかれた瞬間にエルボーをくらわす、投げられないように足をフックするといったオーソドックスな方法のほか、踵（かかと）で股間を蹴り上げる急所攻撃（反則です！）、前転するようにして膝十字固めに切り返すなどの高度なテクニックもあります。

ジャーマン・スープレックスは、その芸術的な美しさから「プロレス技の王」とも言われ、じつに様々なレスラーが決め技として使っています。またタイガースープレックスやドラゴンスープレックス、投げっぱなしジャーマン、起き上がりこぼし（連続）ジャーマンなど、より過激な派生技も多く生まれています。



ジャーマン・
スープレックス

●ジャンピング・ニーバット

簡単です、ジャンピング・ニーバット。飛び上がって、相手の顔面に向かってニー、すなわち膝をブチ込むだけのシンプルな技です。ロープの反動を利用して威力を増すとより効果的です。

日本人では、かつては**ジャンボ鶴田**、現在はその直伝により**秋山準**が多用しています。特に秋山のジャンピング・ニーバットは高さといい、威力といい、十分に痛みの伝わる完成の域にあります。

他の使い手としては、中西学や高山義廣も威力のある豪快なジャンピング・ニーを見せてくれます。

●スモールパッケージ・ホールド（小包固め、首固め）

「相手の両肩を3秒間マットにつければ勝ち」というプロレスルールの特徴を巧妙に利用した技です。敵の猛攻のスキをついた一瞬の固め技として、ベビーフェイス（善玉）にもヒール（悪役）にも多用されます。掛けられた方はたいていの場合まだ余力を残しているので、納得がいきません。

掛け方は、自分の左腕を相手の首の後ろにまわして上半身を屈めさせ、相手の右足を自分の両足で挟み込んでロックし、同時に相手の左足を自分の右腕で抱えるようにして後ろに一回転し、がっちりと固めます（左右は逆でも可）。こう書くとややこしいですが、慣れれば一瞬で決めることができ、かつ簡単に逃げられない優れた固め技です。

あまりに地味なため特定のレスラーが決め技にすることはほとんどありませんでしたが、２００６年に**丸藤正道**が変型のスモールパッケージ・ホールド「完璧首固め」で王座を奪取し、一躍脚光を浴びました。

●スリーパー・ホールド

プロレスが誕生した頃からある代表的な絞め技です。一見、柔道の裸絞めに似ていますが、プロレスのそれは微妙に違います。左右の頚動脈を前腕部と上腕部で圧迫することにより、相手を落として（気絶させて）しまう技です。

元祖は定かではありませんが、代表的な使い手としてはグレート東郷、**バーン・ガニア**、アントニオ猪木、最近では**飯塚高史**などが有名です。

この技をめぐる攻防には、プロレス的な見せ場があります。落ちた（気絶した）かどうかを確認するために、レフェリーは絞められているレスラーの腕を上に持ち上げます。レフェリーが手を放すと、ダラリと力なく落ちる腕…もう一度持ち上げる…ダラリと落ちる…さらに持ち上げる…これでダメならレフェリー・ストップかと思われた三度目、落ちたと思われたレスラーの腕が力強く震えながら「まだだ！　俺はまだできる！」とばかりに天をめざして伸びる！　プロレスの醍醐味を感じさせてくれるシーンです。

た行

●体固め

プロレスのフィニッシュで最も一般的なフォール技です。仰向けに倒れた相手の上半身に覆い被さるように自分の上半身を重ね、相手の両肩が上がらないように押さえつけて3カウントを奪います。

エビ固めや片エビ固め（相手の両足または片足を抱え込んでの体固め）より返されやすいのが難点ですが、フォール技の基本中の基本で、使わないレスラーはまずいません。

また、たとえ3カウントを取れなくとも、連続して体固めを仕掛け相手に返させることで、相手のスタミナを奪うことができます。

●ダブルアーム・スープレックス

イギリス出身の名レスラー、**ビル・ロビンソン**が日本で初めて披露し、その技のイメージから「人間風車」という彼のニックネームともなった技です。他にもローラン・ボックやボブ・バックランドなどが使い手として有名でした。

掛け方は、リバース・フルネルソンの姿勢で相手の両腕、肩、首を極め、そのまま後方にブリッジして投

げ、相手の背中と腰をマットに叩きつけるだけのように見えますが、腕を極められているせいで受け身をほとんど取れないため、実はかなり危険な技です。

　このダブルアーム・スープレックスは最後までリバース・フルネルソンを解かずに投げるのが正しいのですが、近年、投げっ放し式が主流になったのは、せめて受け身がとれるようにするためなのかもしれません。

●チョップ

　パンチが反則となるプロレスでは、エルボーと並んで最も多用される打撃技のひとつ。指を真っ直ぐに伸ばし、オープンハンド（手の平）または小指側を勢いよく相手の身体に叩きつけます。

　力道山は相撲で体得した張り手を空手の手刀打ちを参考に改良し、決め技「カラテチョップ」を編み出したと言われています。

　なお一口にチョップといっても、大きく振り上げた手を相手の首筋目がけて振り下ろす袈裟切りチョップ、脳天にチョップを打ち下ろす脳天唐竹割り、耳の付け根に手を振り下ろす耳削ぎチョップ、手の平を下に向けてバックハンドで繰り出す逆水平チョップ、両手を同時に振りかぶって相手の首筋に叩きつけるモンゴリアン・チョップ、自ら回転する遠心力を利用したローリング・チョップ、超高速の小刻みなチョップを連続で繰り出すマシンガン・チョップ、両腕を交差して放つクロスチョップなど、実に様々なバリエーションが存在します。

　力道山以外のチョップの名手としては、ジャイアント馬場、キラー・カーン、ワフー・マクダニエル、天龍源一郎、リック・フレアー、橋本真也、小橋建太、佐々木健介などが知られています。

　2005年7月に東京ドームで行われた小橋建太対佐々木健介の試合は、試合中に両者合わせて218発のチョップを繰り出す空前絶後のチョップ合戦となり、プロレスにおけるチョップの威力、凄味をあらためて知らしめることになりました。

●DDT

日本では〝破壊王〟**橋本真也**の得意技として有名になりました。

相手をフロント・ヘッドロックにとらえ、後方に勢いよく倒れ込んで相手の頭部をマットに強打する荒技です。効果的な返し方…というかダメージの軽減の仕方は、自ら前にでんぐり返るようにして、頭を直接打たないようにする方法があります。

元祖はアメリカの**ジェイク・〝ザ・スネーク〟・ロバーツ**で、技名の由来は彼のペットのニシキヘビ・ダミアンの名をとった「ダミアン・ディナー・タイム」の略とも、殺虫剤のDDTとも言われています。

オリジナルがシンプルなため、現在は雪崩式、スイング式、ダブルアーム式、垂直落下式、リバース式、不知火（しらぬい）(変型のリバースDDT)、シューティングスター式など、じつに様々なバリエーションが生まれています。

●ドラゴン・スクリュー

技名の「ドラゴン」からわかるとおり、元祖は〝飛龍〟**藤波辰爾**（たつみ）です。U系レスラーとの対戦でキックをくらい続けた藤波が、防御と攻撃を一体化させ、テイクダウンを奪うための手段として使っていました。

掛け方は、相手の右足首を自分の左手で抱え込むようにキャッチし、相手を片足立ちの状態にさせます。さらにもう一方の自分の腕をキャッチした相手の足の内側から巻き込むように絡め、自分も身体ごと回転して相手の足の膝を捻って破壊します(左右は逆でも可)。

藤波以降はほぼ忘れ去られた技となっていましたが、90年代後半に**武藤敬司**が高速回転のドラゴン・スクリューから足四の字固めに移行するフィニッシュの流れを確立し、一躍トレンド技となりました。

変型技としては、新崎人生の曼荼羅（まんだら）捻り(ドラゴン・スクリューの逆回転バージョン)が知られています。

●ドロップキック

代表的なプロレス技のひとつで、ジャンプした後に空中で両足を揃え、足の裏で相手を蹴りとばす豪快な技です。1930年代に活躍した〝ジャンピング〟ジョー・サボルディが元祖と言われていますが、初期の名手としては**パット・オコーナー**やアントニオ・ロッカの方が有名です。その後もドロップキックへのこだわりを売りにするレスラーは星の数ほど現れました。

日本では、2mを超える長身のジャイアント馬場が繰り出すドロップキック、その名も「三十二文ロケット砲」が、プレミア度の高い技として伝説になっています。

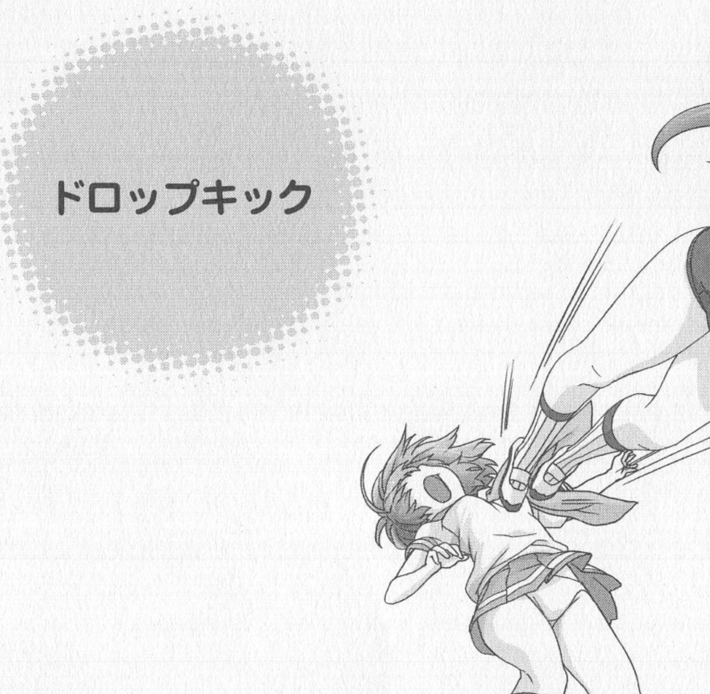
一口にドロップキックといっても、正面飛び式や背面飛び式、横っ飛び式など様々なスタイルがあり、また低空ドロップキック、相手をコーナーにもたせかけての串刺しドロップキック、コーナーやトップロープを使ったミサイルキックなど、数多くのバリエーションがあります。

プロレス技の基本といわれるだけあって、ある意味ではレスラーのセンスを問われる技といっていいでしょう。

な行

●ニードロップ

簡単です、ニードロップ。倒れた相手の顔や胸板に向かってニー、すなわち膝を落とすだけのシンプルな技です。飛び上が



って膝を落とせばジャンピング・ニードロップに、コーナーやトップロープ上からダイビングして膝を落とせばダイビング・ニードロップになります。

この技を一躍有名にしたのは**キラー・コワルスキー**で、対戦相手のユーコン・エリックにダイビング・ニードロップを仕掛けた際、エリックの耳を削いだ恐怖の殺人技として恐れられました。またブルーザー・ブロディも「キングコング・ニー」という呼び名でフィニッシュ・ホールドにしていました。

日本人レスラーでは、キラー・カーン、藤波辰爾、川田利明、大森隆男、四代目タイガーマスク（ムーンサルト・ニードロップ）などが主な使い手です。

●ネック・ハンギング・ツリー（人間絞首刑台）

向かい合った状態で相手の首（頸動脈）を両手で絞め上げ、そのまま腕力にものをいわせて高々と持ち上げるシンプルかつ豪快な技です。その様は、まさに一切の抵抗を許さぬ絞首刑。

代表的な使い手は、ドン・レオ・ジョナサン、アンドレ・ザ・ジャイアント、ゴリラ・モンスーン、〝ビッグ〟ビル・ミラー、坂口征二…と超大型レスラーばかり。確かに、大型のパワーファイターが自分の力を誇示するのにこれほどふさわしい技はないでしょう。

最近では、ジャイアント・バーナードがネック・ハンギング・ツリーから開脚式パワーボムへ移行する発展技、「ボルドー・ボム」をフィニッシュ・ホールドとして使っています。

●ネックブリーカー・ドロップ（首砕き）

相手の首を片手または両手で抱え込んでマットに叩きつけ、首や後頭部、背中にダメージを与える技の総称です。

代表的なものとしては、正面から相手の首を両手で抱えた状態でクルリと反転し、相手とともに後方に倒れ込んでマットに叩きつけるスイング式、正面から走り込んで相手の首に飛びつき、脇の下に首を抱えるよ

うにして相手の背中側へ倒れ込むランニング式、同じ要領でコーナーやトップロープ上からダイブして相手の首に飛びつき、相手の背中側に倒れこむダイビング式などがあります。

スイング式は大技へのつなぎや痛め技として使われることが多く、現在も**小川良成**（よしなり）や大森隆男が好んで使用しています。ランニング式とダイビング式は決め技として使われ、前者は**ジャイアント馬場**の、後者は三沢光晴の決め技として有名です。

また**棚橋弘至**は旋回式のランニング・ネックブリーカー・ドロップとでも言うべき「スリング・ブレイド」を決め技にしています。

は行

●パイルドライバー（脳天杭打ち）

相手の身体を逆さまに抱え上げ、脳天（頭頂部）をマットに打ちつける危険度の高い技。**〝キラー〟バディ・オースチン**というレスラーは、（冗談抜きで二人の新人レスラーをこの技で死に至らしめています。

パイルドライバーは大きく、向かい合った相手の頭を自分の膝または股間に挟み込み、両手を相手の胴にまわして抱え上げ、尻餅をつくようにして脳天を打ちつけるドリル・ア・ホール・パイルドライバーと、相手を正面から抱え上げ、お互いが向き合った体勢で両膝をつくようにして脳天を打ちつけるトゥームストーン・パイルドライバーの二つがあります。

危険な技という割には、日本では多くのレスラーが痛め技として使ってきましたが、これは掛ける方が自分の太腿や両膝をクッションのように使って、意図的に威力を軽減しているからです（レスラーの仕事は相手をケガさせることではありません！）。アメリカやメキシコのプロレス界では、一部の例外を除きパイルドライバーを〝禁じ手〟にしています。

なお、トゥームストーン式に相手を抱え上げ、ドリル・ア・ホール式に落とす危険度五つ星のパイルドライバーは、俗に「リバース・パイルドライバー」と呼ばれ、蝶野正洋や〝ストーン・コールド〟スティーブ・

オースチンが首に致命的な負傷を抱える原因となりました。

パイルドライバーは見た目は地味ですが、最も危険度の高い技のひとつです。素人は絶対にマネしないように！

●バックドロップ

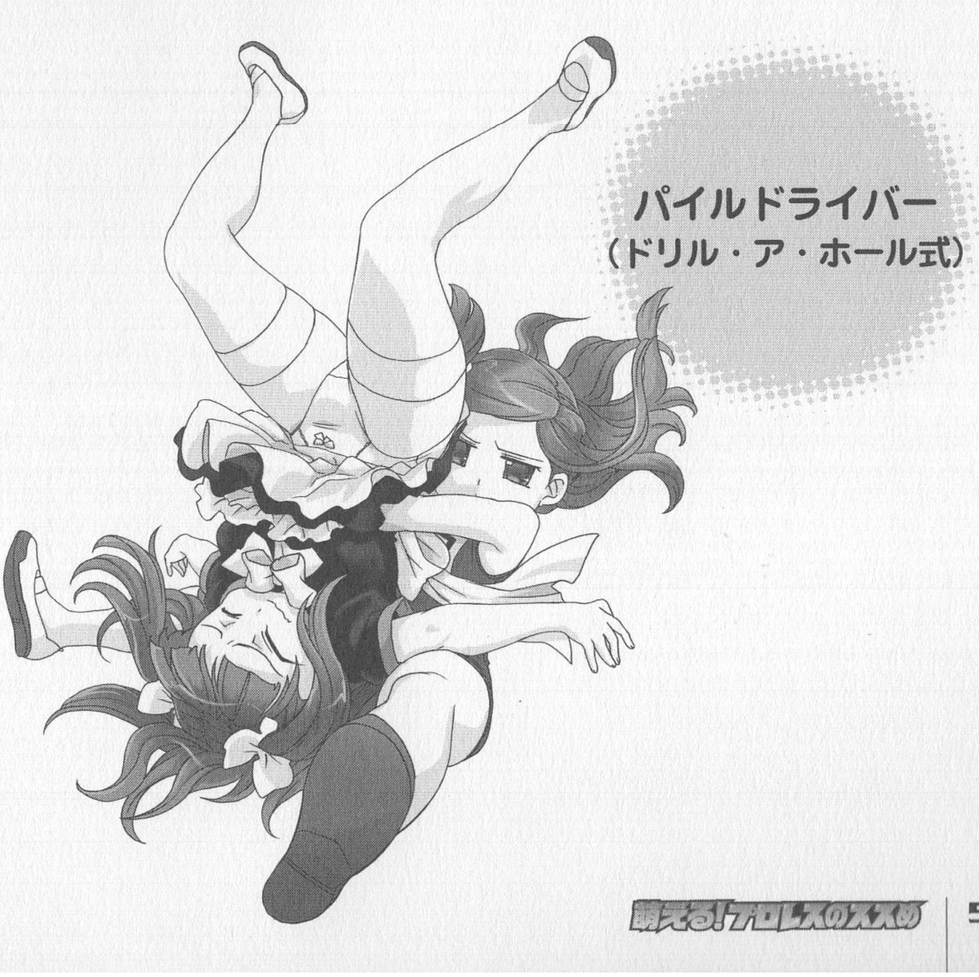
フィニッシュ・ホールドとして余りにも有名なプロレス技の代名詞。

ルー・テーズが元祖と言われていますが、アマレス技のバック・スープレックスは当時から一般的であり、正式なルーツはこちらと言えるかもしれません。

掛け方は、相手の脇の下に頭を入れ、相手の胴に両腕をまわして腰の前でクラッチし、後方にブリッジして投げ、相手の後頭部から背中をマットに叩きつけます。また投げた後に相手を離さずにフォールに移るとバックドロップ・ホールドになります。

使い手によって投げ方は様々で、ルー・テーズや**ジャンボ鶴田**の「へそ投げ式」、坂口征二や小橋建太の「抱え上げ式」、長州力やマサ斎藤の「捻り式」、蝶野正洋や小川良成の「低空式」などが存在します。

なお、ルー・テーズはあの手この手で故意に相手のヘッドロックを誘うことで、必殺のバックドロップの布石としていました。それがまた見せ場だったのです。



パイルドライバー
（ドリル・ア・ホール式）

●パワースラム

突進してくる相手をボディスラムの要領で抱え上げ、その勢いを殺さずに、すばやく反転してマットに叩きつける技です。相手の突進の勢いと体重が一気にのしかかることになるので、見た目以上にダメージがあります。またカウンター気味に決めることで、試合の流れを一瞬にして自分に引き寄せることができます。

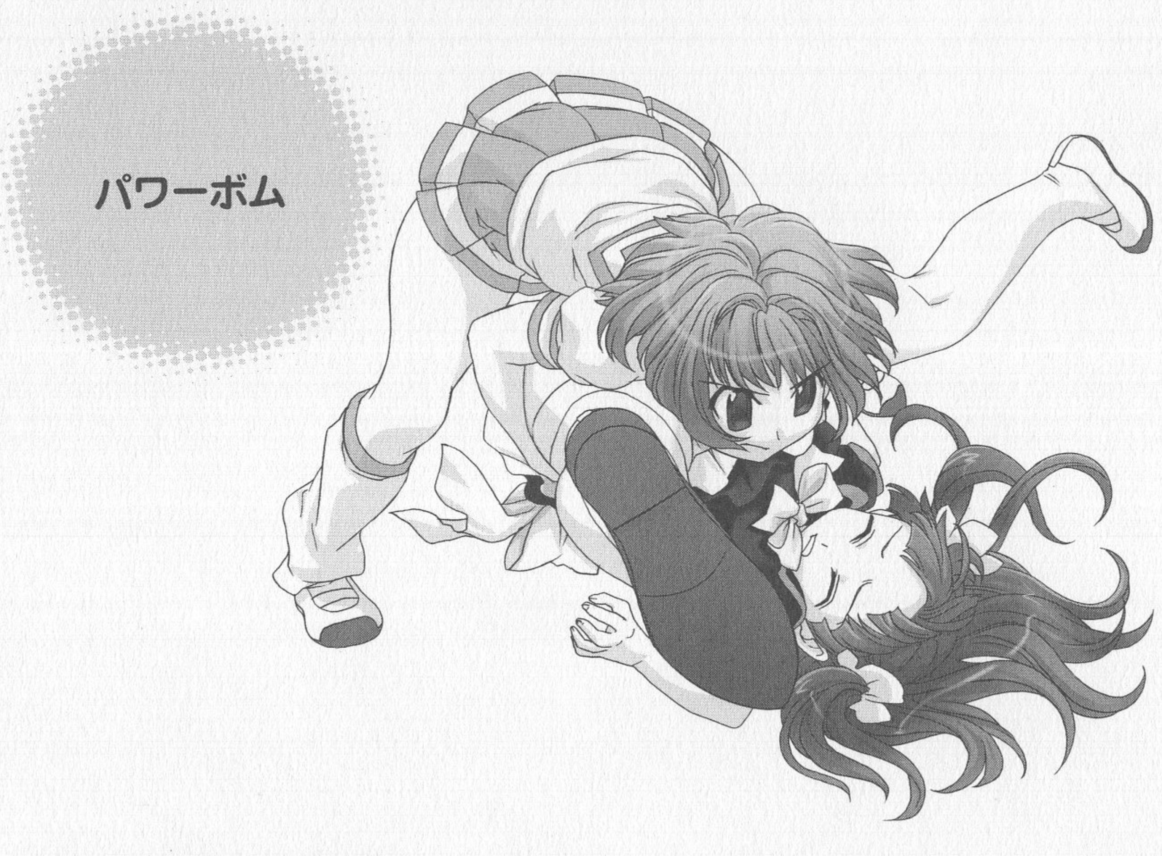
海外ではテッド・デビアス、**アニマル・ウォリアー**、バズ・ソイヤー、日本では**佐々木健介**がこの技の名手に挙げられます。

●パワーボム

テリー・ゴディのオリジナル・ホールドとして脚光を浴びたパワーボム。その原型はルー・テーズが多用したリバース・スラムと言われています。

掛け方は、向かい合った相手の頭を自分の膝または股間に挟み込み、両手を相手の胴にまわした状態から引き抜くように持ち上げます。相手の身体を高々と跳ね上げ、一気に後頭部から背中をマットに叩きつけ、さらに前屈みになって自分の体重をのせ、フォールを奪うという荒技です。

テリー・ゴディ以外にも**天龍源一郎**や川田利明が得意としています。テリー・ゴディが後頭部を叩きつける衝撃を重視したのに対し、天龍源一郎のパワーボムは叩きつけた後のエビ固め



のホールド性を重視しているのが特徴です。

返し方は、抱え上げられる前に踏ん張って逆に水車落とし（リバース・スープレックス）に切り返す、抱え上げられた時に頭にパンチを連打する、フランケンシュタイナーやウラカン・ラナで切り返す、自分から勢いをつけて背後に着地するなど。

この技はまた、ライガーボム、スプラッシュ・マウンテン、ラスト・ライド、餅つき（連続）パワーボムなど、数え切れないほどの派生技、発展技のベースになりました。

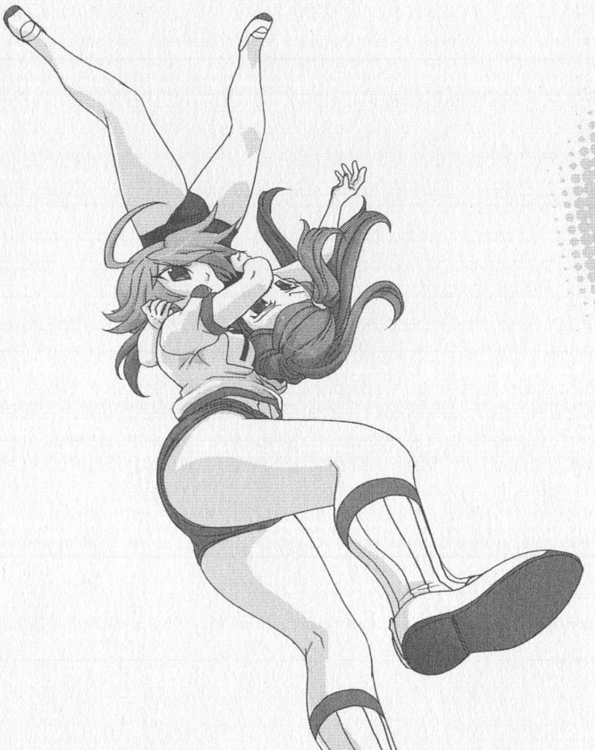
●ブレーンバスター（1）

やはり代表的なプロレス技のひとつ。

掛け方は、向かい合った状態から相手の首の後ろに腕をまわして抱え込み、タイツを掴んで一気に相手の身体を垂直に持ち上げます。一呼吸おいて、逆さまになった相手の頭に血が昇った瞬間、弧を描くようにして後ろに倒れ、相手の背中から腰をマットに強打させせます。この技は相手を垂直に持ち上げることから「バーティカル・スープレックス」とも呼ばれます。

この技の欠点は、掛ける直前に掛け手と受け手がほぼ同じ体勢になるため、ブレーンバスターを掛けようとしてブレーンバスターで返されるといった場面が多く見られることです。このブレーンバスターの掛け合い、踏ん張り合いはプロレスの見せ場のひとつです。

ブレーンバスター



高速ブレーンバスター（スナップ・スープレックス）、コーナー最上段から放つ雪崩（なだれ）式ブレーンバスター（スーパープレックス）、垂直に持ち上げた状態で数十秒間保持してから放つ超滞空ブレーンバスターなどのバリエーションも存在します。

●ブレーンバスター（2）

名前こそ（1）と同じですが、こちらは本当の意味でのブレーンバスター（脳天砕き）です。この技の元祖は**キラー・カール・コックス**、日本で有名にしたのは**ディック・マードック**です。

掛け方は、（1）と同じように向かい合った状態から相手の首の後ろに腕をまわして抱え込み、タイツを掴んで一気に相手の身体を垂直に持ち上げます。ここまでは同じですが、そこから後ろに倒れず、膝を折る（または尻餅をつく）ようにして真っ逆さまに脳天からマットに突き落としてダメージを与えます。ダメージは非常に高く、こちらは痛め技ではなく完全な決め技です。

日本における主な使い手は、橋本真也（垂直落下式DDTとして別の技とする説もあり）、川田利明、獣神サンダー・ライガー、金丸義信、望月成晃（まさあき）などで、いずれも決め技として使っています。

●ベアハッグ

プロレスにおける元祖は、20世紀初頭の名レスラー〝ロシアのライオン〟こと**ジョージ・ハッケンシュミット**です。

掛け方は、向かい合った状態で相手の胴まわりを両腕で抱え、ひたすら馬鹿力で締めつけて背骨と肋骨を圧迫します。さらに相手を持ち上げることで体重が反作用となり、より強烈なダメージを与えることができます。

代表的な使い手は、海外では**ブルーノ・サンマルチノ**、アンドレ・ザ・ジャイアント、日本ではストロング小林、坂口征二など。いずれも超怪力レスラーです。

見た目が地味なためか、近年はめっきり見る機会が減っていましたが、2002年に**ブロック・レスナー**がこの技でハルク・ホーガンをレフェリー・ストップに追い込み、ファンを驚愕させました。

●ヘッドバット（頭突き）

いわゆる頭突きです。掛け方は簡単、相手の頭を掴んで自分の額を相手の額にゴツン！と叩きつけます。もちろん自分も痛いのですが、石頭の人ほど効果的な技です。

この技を有名にしたのは〝黒い魔人〟の異名を持つ**ボボ・ブラジル**で、通常のヘッドバット（ココバット）に加え、ジャンプして豪快に見舞うヘッドバットを決め技にしていました。日本では**大木金太郎**が有名ですが、あまりにヘッドバットを多用したため、晩年は障害を抱えることになりました。その他、藤原喜明の一本足頭突き、**ダイナマイト・キッド**やクリス・ベノワ、泉田純至のダイビング・ヘッドバット（泉田の技名は隕石）などがよく知られています。

この技のプロレス的な見せ場は、ヘッドバットを得意とするレスラーにヘッドバットを掛けた際、逆に掛けた方が痛そうな顔をする場面です。

●ボディスラム

プロレスの基本技のひとつで、この技が一度も出ない試合の方が珍しいほどです。

日本プロレスの時代には、大技の一つとして力道山が使っていましたが（当時はマットが固かったため十分に有効でした）、現在は痛め技として、あるいはダイビング・ボディプレスやムーンサルト・プレスのような大技に移る際のつなぎとして多用されています。

掛け方は、互いに向き合った状態で相手の肩と股間に腕を差し入れ、逆さまに抱え上げてマットに叩きつけ、相手の背中や腰にダメージを与えます。

地味な技ですが、1987年の「レッスルマニアⅢ」でハルク・ホーガンがアンドレ・ザ・ジャイアントを

ボディスラムで投げたシーンは、プロレス史上屈指の名場面として知られています。

●ボディプレス

読んで字のごとく、仰向けに倒れている相手に、自分の身体をプレスするようにぶつけてダメージを与える技です。

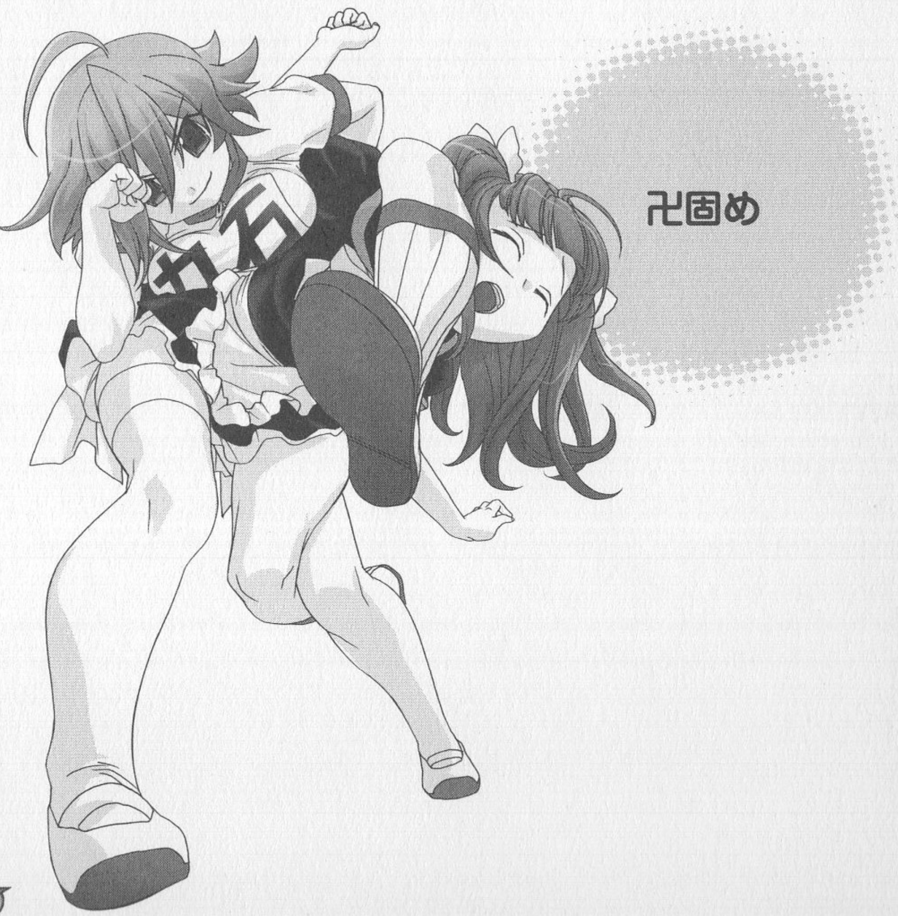
単なるボディプレスではあまりダメージはありませんが（200kgを超えるスーパーヘビー級は別）、コーナー最上段からのダイビング・ボディプレスのように、高さと勢いをつけることによって決め技になり得ます。

ダイビング・ボディプレスには宙を舞う華麗さがあり、**〝スーパーフライ〟ジミー・スヌーカ**、**ミル・マスカラス**、エディ・ゲレロ、外道、ロブ・ヴァン・ダムなど、多くのレスラーが決め技にしています。

ま行

●卍固め（オクトパス・ホールド）

アントニオ猪木が決め技として使っていたコブラツイストを、ライバルのジャイアント馬場が多用し始めたため、コブラツイストを上回る必殺技として、猪木が師匠カール・ゴッチと共に開発したといわれています。しかし、実はヨーロッパで一般的に使われていた「オクトパス・ホールド」を日本マットで


卍固め

披露しただけというものでした。

掛け方は、相手の背後から自身の右足を相手の左足に乗せるようにしてフックし、今度は相手の首を押し下げ、自身の左足を押し下げた相手の首に乗せるようにしながらふくらはぎの部分を使って首を極めます。さらに左腕を使って相手の右脇に潜り込ませるようにして右肩を極めます。自身の右腕は相手の臀部等に固定させて密着したら完成です（左右は逆でも可）。

こう書くとかなり複雑ですが、この複雑なところが逆にプロレス技として人気が高い要因となっています。

●ミサイルキック

コーナ最上段からのドロップキックをミサイルキックと呼びます。

日本で初めて披露したのはリッキー・ギブソンと言われていますが、技自体は**エドワード・カーペンティア**の頃から存在していました。

日本人レスラーで凄かったのは**高野拳磁**の２ｍの巨体が宙を舞うミサイルキックで、彼のこの技は特別に「人間バズーカ」と呼ばれていました。

その後、多くの中軽量級レスラーがこの技を使うようになった他、トップロープを利用してのスプリングボード・ミサイルキック（スワンダイブ式ミサイルキック）といった発展技も生まれています。

●ムーンサルト・プレス

リングと反対の方向を向いてコーナー最上段にのぼり、後方に２７０度バク転（ムーンサルト）して、自分の身体の正面をリング中央に仰向けに倒れている相手にプレスするようにぶつける技です。

使い手でとくに有名なのは**武藤敬司**と**小橋建太**。この二人のムーンサルトはフィニッシュ・ホールドとして絶対的な説得力を持っています。ただし残念なことに、二人とも長期間この技を使い続けたために膝を痛めてしまい、「ここ一番」の場面でしか見せなくなってしまいました。日本人以外では、ベイダーやブロッ

ク・レスナーなどの超重量級レスラーもこの技を使っていたことがありました。

オリジナルのムーンサルトの他、コーナーを使わないその場飛び式ムーンサルト、ロープの反動を利用したライオン・サルトなどの派生技も生まれています。

や行

●弓矢固め（ボー・アンド・アロー）

技を掛けたときの姿が弓に矢をつがえたように見えることからこう呼ばれます。

掛け方は、うつ伏せになった相手の両足をクロスさせ、腰に両膝を乗せ、片手で相手の首を、もう片方の手でクロスした相手の両足を抱え込むようにホールドします。そこから一気に後ろに倒れ込み、膝を支点として相手の首と両足を引き寄せ、相手の身体全体を弓なりに反らします。相手は身動きできないまま宙吊り状態となり、背中や腰に大きなダメージを受けます。

アントニオ猪木や藤波辰爾、西村修などの新日本プロレス系のレスラーが使い手として知られています。またドン・レオ・ジョナサンは「モルモン・シクル・バックブリーカー」として片足のみを持っての弓矢固めを使っていました。

掛けるのはなかなか大変ですが、見返りとしては余りある拷問技と言えます。

ら行

●ラリアット（クローズライン）

１９７０年代、**スタン・ハンセン**が自身のフィニッシュ・ホールドとして使用したウエスタン・ラリアット（西部式投げ縄打ち）がラリアットとしての元祖ですが、アメリカではクローズライン（語源は、首の高さにロープを張って馬やバイクで突っ込んできた者を捕らえる罠）として古くから存在しました。おそらくラリアットと呼ぶのは日本だけではないでしょうか。

相手の首を目がけて腕を打ちつけるシンプルな技ですが、**長州力**の「リキラリアット」、腕をL字に曲げた**ハルク・ホーガン**の「アックス・ボンバー」、ジャンボ鶴田の「ジャンボ・ラリアット」など、なぜか日本で一代ブームになりました。

現在は小橋建太や佐々木健介、小島聡などが決め技として使用しています。

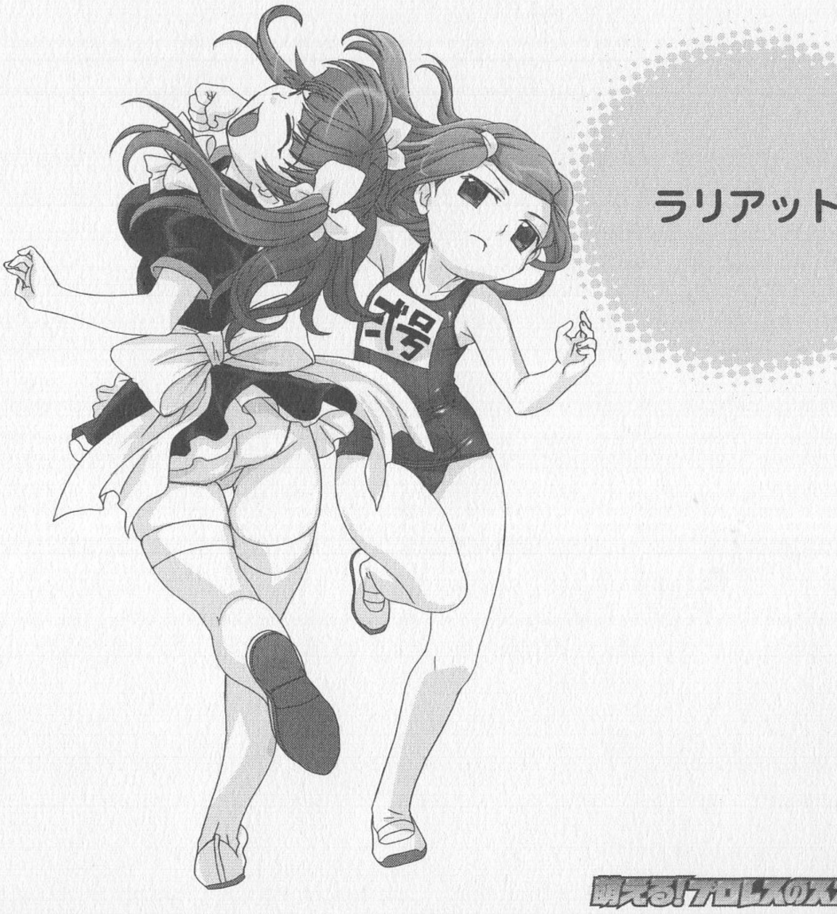
●ロメロ・スペシャル（吊り天井固め）

元祖はメキシコのテクニシャン、ラウル・ロメロで、開発者の名前がそのまま技の名前になっています。そのメキシコでは「タパティア」と呼ばれています。

うつ伏せになっている相手の太腿に乗って、自分の足首に相手の足首を絡めてロックし、両手首を掴んで後ろに捻り上げ、反動をつけて後方に回転します。この状態で相手の手足を自分の手足で支えて責め続ける拷問技です。

初代タイガーマスクが多用していましたが、掛けられた方は息もできず、身動きもできず、完全に手足の自由を奪われているので逃れる方法もありません。しかし弓矢固め同様、地味なフィニッシュになってしまうので、レスラーは必ず途中で解いてしまいます。

なお、この技は困ったことに掛ける際に相手の脇の下を突っついて相手に腕を差し出させ、〝協力〟させなくてはなりません。



●ローリング・クレイドル（回転揺り椅子固め）

観ていて楽しいプロレス技の代表です。古くは回転揺り椅子固め、回転股裂き固めなどと言われていました

掛け方は、コブラツイストの要領で背後から相手の左足に自分の左足を乗せてフックします。さらに相手の右足の付け根を両手で抱えながら後ろに倒れ込み、その勢いで自分の首を支点にしてグルグルと回転します（左右は逆でも可）。相手の三半規管を狂わせるのが目的ですが、ダメージはともかく、リングを何周もすれば観客は拍手喝采（かっさい）です。

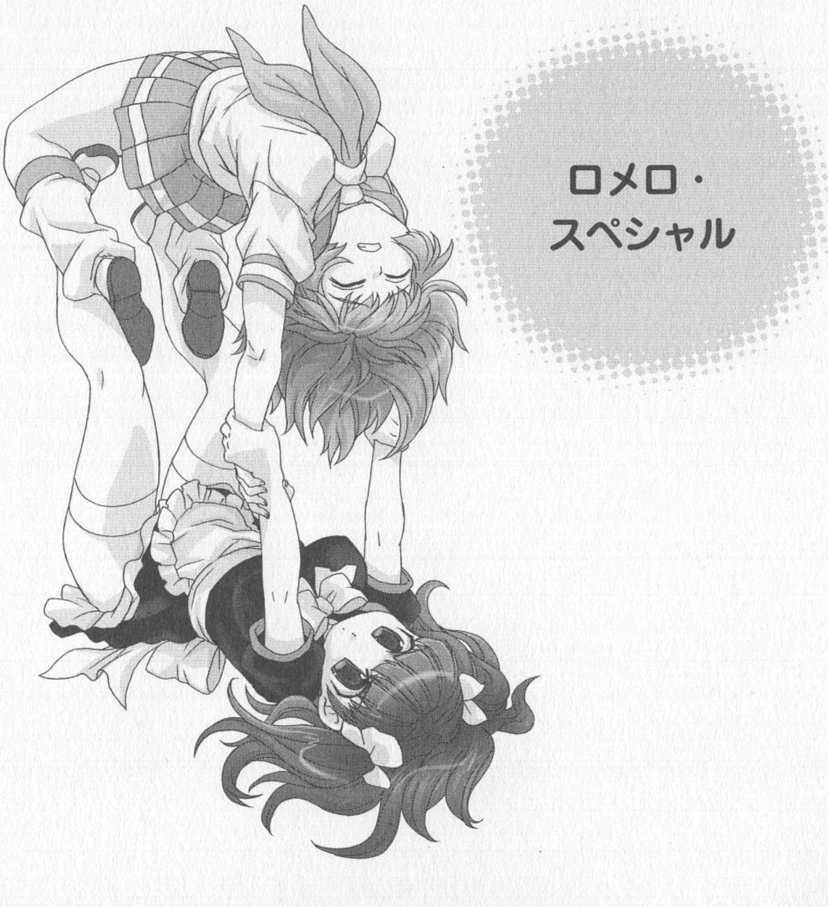
テリー・ファンクの必殺技として有名になり、その後、小橋建太から潮崎豪に受け継がれています。

●脇固め

オリジナルは柔道技（現在は反則技となったため使われていません）です。柔術で使われる場合は腕ひしぎ脇固めと言われます。

掛け方は、背後から相手の腕を取りながら倒れ込み、自分の脇のあたりを支点にして体重をかけます。そこから伸びた相手の腕を一直線になるようにして両手で手首を極め、後ろに反るようにして相手の肩関節を締め上げます。

使い手として最も有名なのは**藤原善明**で、ラリアットをかいくぐっての脇固めやブレーンバスターをかけられる寸前に切り



返しての脇固めなど、芸術的な入り方を見せてくれました。このため、なんと脇固めは海外で「フジワラ・アームバー」と呼ばれていたりします。

シンプルな割に、キッチリ極まると絶対に外せないどころか、取り返しのつかない事になる危険さを秘めた技です。

* * * * *

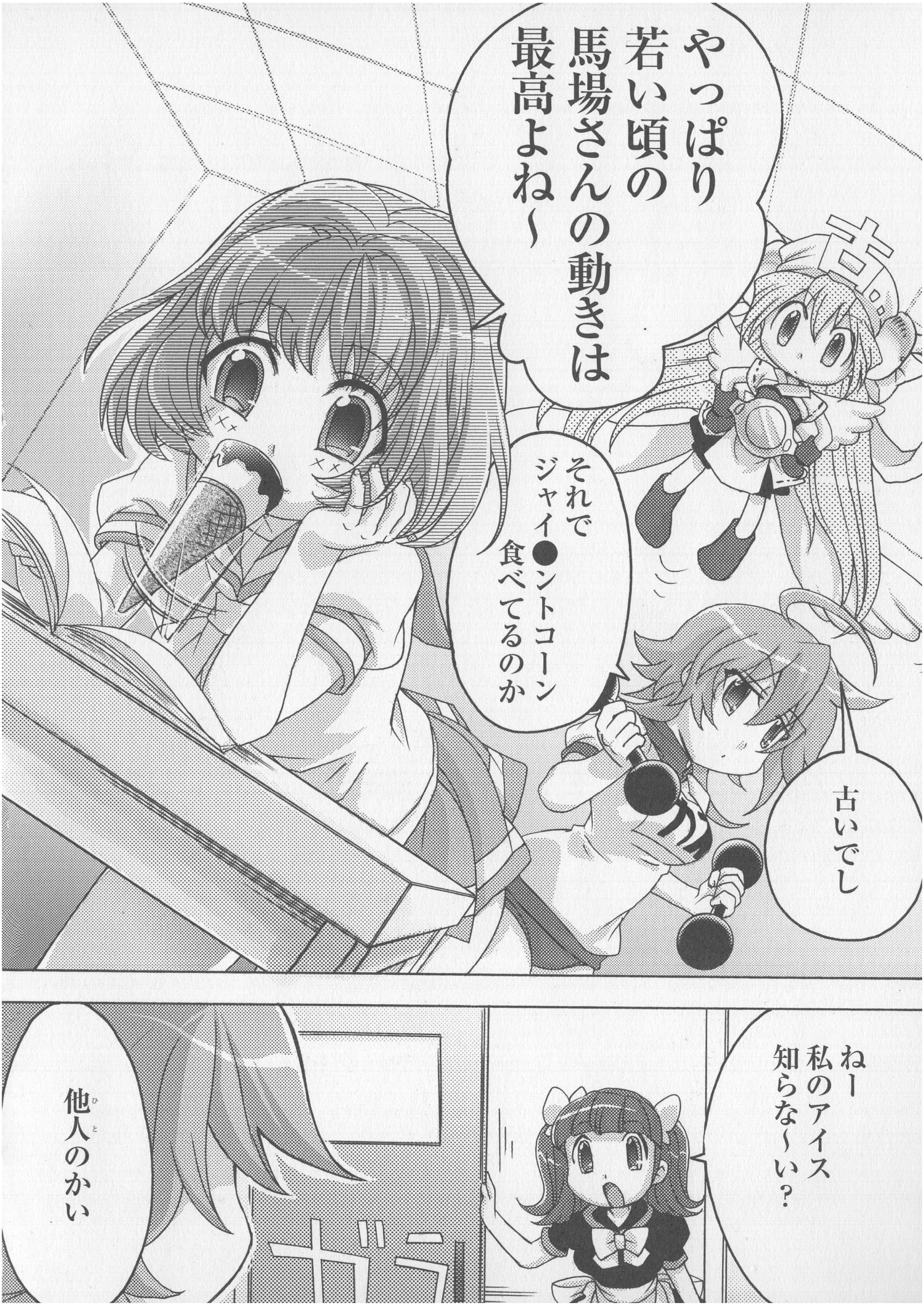
以上、代表的なプロレス技をひととおり見てきたが、実際にはこの何十倍もの数があり、ここで紹介したのはほんのひと握りにすぎない。

レスラーは練習に練習を重ね、さらに激しく、さらに華麗に……とオリジナルの技を進化させ、独自のフィニッシュ・ホールドを開発してきた。戦う相手レスラーも、それらの技に応じた高度な受け身を見いだし、返し技を修得して立ち向かう。

こうした「進化」を止めないからこそ、プロレスはおもしろいのだ！

第四章

伝説のレスラーたち


やっぱり若い頃の馬場さんの動きは最高よね～
古
それでジャイ●ントコーン食べてるのか
古いでし
ねー私のアイス知らな～い？
ガラ
他人のかい

スーパースター列伝

プロレスの魅力は、単にリング上で繰り広げられる闘いだけでなく、プロレスラー自身の人間的魅力に拠（よ）るところが大きい。もちろん、リング上のパフォーマンスやファイトスタイルもプロレスの面白さの一つだが、リング外のプロレスラーの言動や素顔を知ることは、観戦する上での楽しさを倍増させてくれるはずだ。

そこでこの章では、日本のプロレス界を牽引（けんいん）してきたスターレスラーたちのバックグラウンドを紹介しよう。プロレス界のスターは、なぜスターでいられたのか？　スターであるための条件とは……。

プロレス界では、頑張っているレスラーは当たり前。強いレスラー、巧（うま）いレスラー、華のあるレスラーはたくさんいる。だが、そのうちメインイベンターとしてトップを張り続けることができるスターは、ほんの一握りしか存在しない。その理由を自分なりに探ってみて欲しい。

力道山（りきどうざん）

日本プロレスの礎（いしずえ）を築いた力道山。日本が誇るスーパースターであり、誰もがその名前ぐらいは知っている。なのに、その生い立ちは謎に満ちていて、本当の力道山を知る者は一握りと言っていい。

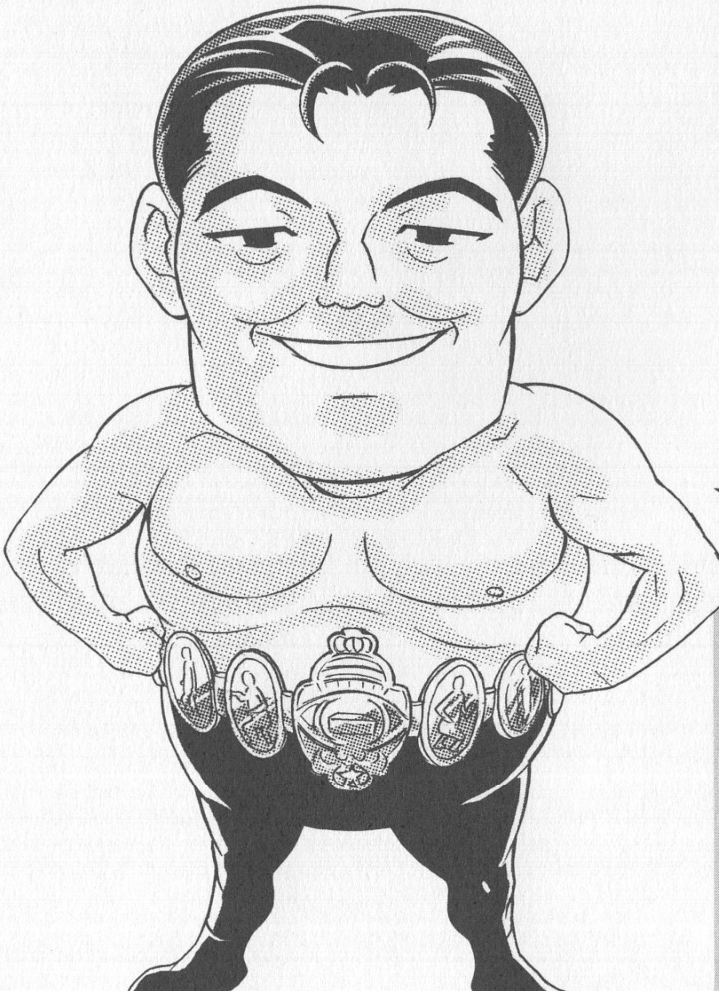
朝鮮半島出身の力道山は、長崎の農家・百田家の養子となり日本の戸籍（こせき）を取得。噂の域を出ないが、朝鮮半島時代にはすでに結婚していた話しがあるらしい。力道山自身が朝鮮半島出身であることを最後まで頑（かたく）なに隠し続けたため、出生から相撲界に入るまでの経緯はほとんど明らかにされていない。

二所ノ関部屋に入門後、1940年に「力道山」の四股名（しこな）で初土俵を踏み、6年後に入幕、その3年後には

関脇に昇進するも、1950年には自ら廃業している。廃業の理由は定かでなく、病気、差別、金銭問題など現在でも様々に囁かれている。

　そして翌年プロレスに転向。アメリカ修行を経て、1953年、興行界のドン・永田貞雄と新田建設社長の新田新作を後見に、日本プロレス協会を旗揚げした。その後のリングでの功績、実績は第二章でも紹介してあるので、ここでは力道山の人となりを中心に記しておく。

　力道山の性格は粗暴、感情の起伏が激しいタイプで、酒の席での暴力沙汰は後を絶たなかった。マスコミでも「力道山また暴れる」と何度も報道されている。これだけの乱暴者であっても、後見人である新田新作などの擁護もあり、その都度金で警察沙汰になるのを防



☆力道山

本名	百田光浩 （民族名：金信洛）
身長	176cm（公称180cm）
体重	116kg
生没年月日	1924年11月14日～ 1963年12月15日
出身	朝鮮半島咸鏡南道
所属	日本プロレス
得意技	カラテチョップ、 ボディスラム

いできたようだ。

飲んで気が大きくなり、相手を威嚇するためにガラスコップを噛み砕いて飲み込んでみたり、暴力団組員との喧嘩で、腹部に刺されたナイフをつかんでさらに何度も自分で刺してみたり、付き人のジャイアント馬場に度数の高い酒をボトルごとイッキ飲みさせたりと、アルコールがらみのエピソードは事欠かない。それ以外でも、アントニオ猪木を走行中の車から突き落としてレスラーの凄さをアピールしたりしている。

これらの際立った蛮行は、性格に拠るところが多いのも事実だが、試合前に飲んだ興奮剤の影響ともいわれている。

力道山は、京都の芸妓との間に義浩（故人、元プロレスラー、プロレスリング・ノア取締役）と光雄（プロレスラー、プロレスリング・ノア副社長）の二人の実息をもうけているが、二人とも父が朝鮮出身であったことは、その死後に知る事になる。

それが関係しているのかは定かではないが、北朝鮮の主席だった金日成と親交があり、1962年に金日成主席にプレゼントしたとされるメルセデス・ベンツが北朝鮮の国際親善展覧館に展示されている。

力道山は実業家としても有能で、赤坂の「リキマンション」や渋谷の「リキ・スポーツパレス」というプロレスの常設会場やアミューズメントを一体化させたレジャー施設をつくって成功させている。さらに箱根のゴルフ場事業が進行中だったが、自身の急死によってこの事業は消滅した。

世間では破天荒な荒くれ者として悪名を轟かせた力道山だが、日本のプロレス界に及ぼした影響は計り知れない。

同胞の大木金太郎との師弟関係は固い絆で結ばれていた。プロ野球出身のジャイアント馬場を英才教育で育て上げ、ブラジルから連れてきたアントニオ猪木を超スパルタ教育で鍛え上げた。自身がスーパースターであるための土台作りを、実業家以上の手腕でまとめ上げていたということか…。

力道山にも年齢的な衰えが見え始めた1963年12月8日午後10時30分、いつものように酒を飲んでいた力道山は、突然降って湧いたようなトラブルに巻き込まれる。

赤坂のキャバレー「ニュー・ラテンクオーター」で、暴力団住吉一家の構成員・村田勝志に登山ナイフで腹部を刺され、山王病院に緊急入院。その一週間後の12月15日、化膿性腹膜炎で死亡した（後の担当医の著書で発覚した事実として、死亡の直接的な原因は、麻酔担当外科医の気管内挿管の失敗による窒息死だと判明。見舞い客の持ち込んだ寿司を平らげ、病状を悪化させ死亡したとの説もあるが、まったくのデマである）。

太く短く、全力で走り抜けた力道山の生涯。日本人に夢と希望を与え、マット上のヒーローとしてプロレス界に君臨し続け、ヒーローのまま鮮明な記憶を残し去っていった。

力道山が事件に巻き込まれないまま生きていたとしたら…そんな事をふと考えてみたりもするが、結局は想像がつかない。想像を上回る破天荒さが、力道山の一番の魅力なのだから。

ジャイアント馬場

ファンがジャイアント馬場について語る時、必ず「馬場さん」と呼ぶ。生涯現役を実践した東洋の巨人・ジャイアント馬場。人間的魅力にあふれ、これほどファンから愛されたプロレスラーはいない。

いつもファンを大切にし、全日本プロレスの社長として選手を思いやる。自分の求める王道プロレスを心から大切にしていた。誰からも愛されたジャイアント馬場の人となりを辿ってみよう。

馬場正平の長身は、じつは巨人症（下垂体腫瘍肥大）という病気であった。元子夫人との間に子供がいないのは、遺伝を恐れての事だと言われている。

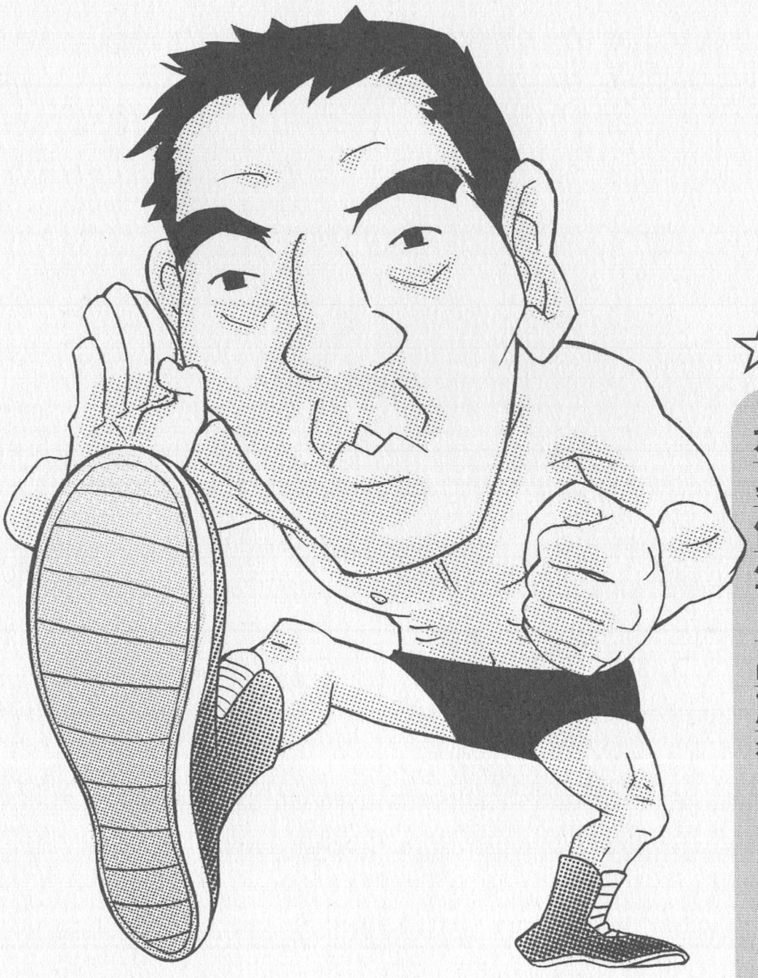
そんなコンプレックスを武器に変えて、三条実業高校時代には野球に没頭。長身から投げ下ろす豪快なピッチングがプロ野球スカウトの目にとまり、高校を中退して読売ジャイアンツに投手として入団する（背番号59／通算成績0勝1敗）。1960年にジャイアンツを自由契約になるも、諦めきれずに大洋ホエールズの練習生としてキャンプに参加した。だがキャンプ中に宿舎の風呂場で転倒して左肘軟骨を損傷、結局はプ

口野球を断念することになった。

馬場は自分の身体を最大限に活かす次の選択として、力道山率いる日本プロレスに入団。力道山に弟子入りし、プロレスラーを目指した。熱狂的ジャイアンツファンだった力道山はこれに大喜び、数々の特別待遇を許している。

新弟子の頃から給料（当時3万円）を貰い、宿舎生活を免除され、アパートから道場に通っていた。力道山の死後、馬場は「力道山に殴られた事は一度も無い」と語っているが、力道山の性格を考える上で、いかに馬場が大切にされていたかが垣間（かいま）見えるエピソードだ。

「ジャイアント馬場」のリングネームは力道山自ら命名したものだが、これには身体が大きいという意味だけでなく、ジャイアンツ出身という意味合いが含まれてい



☆ジャイアント馬場（ばば）

本名	馬場正平（しょうへい）
身長	209cm
体重	135kg
生没年月日	1938年1月23日～ 1999年1月31日
出身	新潟県三条市
所属	全日本プロレス
得意技	十六文キック、脳天唐竹割り、ランニング・ネックブリーカードロップ、ココナッツクラッシュ他多数
入場テーマ曲	王者の魂

る。

エリートとして英才教育を受ける馬場は、入団からわずか5か月でデビューを果たす。海外修行も経験し、アメリカではメジャータイトルに連続して挑戦する好機を得ている。

1963年、アメリカでスターレスラーとなった馬場に、力道山刺殺の訃報が届く。マネージャーだったグレート東郷からアメリカ定住を勧められるも、これを断って帰国。力道山亡き後の日本プロレスをアントニオ猪木とともに支えた。

BI砲（馬場&猪木のタッグチーム）の活躍により安定した興行を続ける日本プロレスであったが、力道山という支柱を無くしたフロント（経営陣）が腐敗していく。これに嫌気がさした馬場は1972年、日本テレビの後押しを受けて全日本プロレスを設立、その社長に就任した。

皮肉な事に、会社経営が多忙を極めたため、練習不足がたたって往年の動きは見られなくなってしまったものの、それでもその後十年以上の間トップを張り、ジャンボ鶴田や天龍源一郎といった次代のエースを育て上げた。レスラーとしてのピークが過ぎると、潔くメインイベントから身を退き、理想とする「王道プロレス」の実践に努めている。

総合格闘技の出現によってプロレス人気に翳りが見え始め、他団体が奇抜なデスマッチや異種格闘技戦で打開を図るなか、全日本のキャッチコピー「みんなが格闘技に走るので、私、プロレスを独占させていただきます」とやって、プロレスファンから拍手喝采を浴びている（コピーの発案は当時『週刊プロレス』編集長だったターザン山本）。

ジャイアント馬場は長きに渡りマットに立ち続け、三沢光晴のエルボーも、川田利明のキックも、秋山準のジャンピング・ニーバットも正面から受け止めた。永源遥やラッシャー木村とのコミカルな駆け引きもこなし、プロレスの厳しさ、楽しさを体現している。

馬場の最後のリングとなった1998年12月5日の時点で、通算5769試合を行っている。一人のレスラーの記録としては驚異的な数字である。

そして1999年1月31日、東京医大病院で大腸ガンの肝転移による肝不全により死去、享年61歳。巨星の早すぎる死だった。

馬場さんが残した名言のひとつに「シューティングを超えたもの、それがプロレス」という言葉があるが、今のプロレス界の現状を、どんな気持ちで天国から見ているのだろうか？

アントニオ猪木（いのき）

燃える闘魂・アントニオ猪木。彼の熱狂的ファンを人は「猪木信者」と呼ぶ。現在、プロレスやプロ格闘技に従事する者の中で猪木と接点を持たぬ者はいないと言われるほど、未だにその影響力は絶大である。

猪木は日系ブラジル人として〝逆輸入レスラー〟の触れ込みでデビューしているが、実は神奈川県横浜市の出身である。石炭問屋を営む裕福な家庭に生まれ育ったが、石炭から石油へのエネルギー源の移行により家業は崩壊。1957年、14歳で家族とともにブラジル・サンパウロ郊外に移住し、コーヒー豆の収穫を手伝いながら農場で少年時代を過ごした。ブラジルでは、この農園での過酷な収穫作業で精神力を、陸上競技の砲丸投げで基礎体力を作り上げたといわれている。

猪木青年に転機が訪れたのは、1960年の力道山のブラジル遠征がきっかけだった。力道山に「日本に行くぞ」とスカウトされた猪木青年は、帰国してプロレスラーを目指すこととなる。

リングネームの「アントニオ猪木」は豊登（とよのぼり）（力道山の右腕だったレスラー）による命名。1950年代にアメリカで活躍した名レスラー、アントニオ・ロッカにあやかってという説が一般的だが、実のところはブラジル帰りを強調するために、ブラジルでもっともポピュラーな名前を付けられたというのが真相らしい。

なお、それ以前に力道山が「死神酋長（しゅうちょう）」というテレビ番組のキャラクター名をリングネームに押したが、猪木は「そんなリングネームならプロレスラーを辞める」と固辞し、この案はボツになったという逸話がある。

日本プロレスに入団した半年後の1960年9月30日、東京・台東体育館にて大木金太郎とデビュー戦（結果は負け）を行ったが、同じ日、ジャイアント馬場もデビュー戦を行っている。

期待され、力道山から大切にされていたジャイアント馬場と違い、アントニオ猪木はシゴキにシゴかれ、虐げられた弟子時代を送っている。毎日のように殴られ蹴られ、走行中の車から突き落とされたこともある。こういった〝差別〟扱いにより、猪木がジャイアント馬場に特別な嫉妬心を抱き、己を奮い立たせてきたことは想像に難くない。

力道山の死後、豊登とともに東京プロレスを旗揚げするも3か月で崩壊。日本プロレスに戻って馬場と共に第2期黄金時代を支えていたものの、水面下ではフロント

☆アントニオ猪木

本名	猪木寛至
身長	191cm
体重	118kg
生年月日	1943年2月20日
出身	神奈川県横浜市
所属	新日本プロレス
得意技	コブラツイスト、卍固め、延髄斬り、アームブリーカー、スリーパー・ホールド、ナックルパート他多数
入場テーマ曲	イノキ・ボンバイエ

と幾度も衝突し、ついには日本プロレスを追放されてしまう。

猪木はこの追放劇直前の1971年11月、女優の倍賞美津子さんと結婚していた（1987年に離婚）。大スターだった倍賞さんの助けもあって、翌年1月には新日本プロレスを旗揚げし、ここから猪木の闘魂伝説はスタートしていく。

ジャイアント馬場率いる全日本プロレスと違い、アメリカマット界に太いパイプを持たなかった猪木は、無名に近い外国人レスラーを招聘し、自らの団体で育てるという方法で独自の運営を行い、やがてニューヨークに拠点を置くWWF（World Wrestling Federation／現WWE）との提携により安定していった。スタン・ハンセン、ブルーザー・ブロディ、アンドレ・ザ・ジャイアント、ビッグ・バン・ベイダーなど、明らかに体格差のある外国人レスラーを「風車の理論（相手の力を利用しつつ勝利する」で打ち破っていく事で、次第に猪木信者を増やしていった。

面白いことに、猪木と名勝負を繰り広げた外国人レスラーには、海外では三流扱いであったり、トラブルメーカーとして干されているようなレスラーも多かったが、新日本でその才能を開花させ、帰国後にアメリカでもスターになっている。

さらにアントニオ猪木の理念、新日本プロレスの方向性として「プロレスこそすべての格闘技の頂点である」というストロングスタイルを標榜し、異種格闘技戦でそれを実践。空手家ウィリー・ウィリアムスやボクシングのヘビー級王者モハメド・アリと試合を行っている。

このアリ戦におけるエピソードとして後に山本小鉄氏が語ったところによると、アリ陣営は初めエキシビションマッチのつもりで来日し、通訳に「で、リハーサルはいつやるんだい？」と訊いたが、「ノーノー、リアルファイトOK？」と返され、「マジかよ、キャンセルする！」と大いに慌てたという。

やがて、プロレス人気を一身に背負ってきたアントニオ猪木にも世代交代の波が押し寄せてきた。1983年、自身が立ち上げたIWGP（International Wrestling Grand Prix）選手権の決勝で、自身が育て上げたハルク・ホーガンのアックス・ボンバーをくらって失神、KOによる惨敗を喫した。

1988年8月には、革命戦士・長州力にリキラリアットでピンフォール負け。さらに弟子の藤波辰彌（たつみ）が保持していたIWGP王者に挑んだ際には、「負けたら引退」の覚悟で臨むも、結果は60分時間切れ引き分け。引退こそしなかったものの、王座への挑戦はこれが最後となった。

翌89年2月、両国国技館で行われた長州力とのシングルマッチでは、リキラリアットの連打を浴びて完璧なピンフォール負け。〝燃える闘魂〟はセコンドに抱えられ、涙を流しながらリングを後にした。事実上、トップレスラーとしての終わりを迎えた歴史的な日といえるかもしれない。

しかし、戦うことをやめないアントニオ猪木は、プロレス界から政治の世界に戦場を移す。スポーツ平和党を結成し、第15回参議院選挙に立候補。みごと当選を果たし、史上初のプロレスラー出身の国会議員となった。

政治の世界でもアクティブに活動し、湾岸戦争前夜のイラクで在留邦人の解放に尽力したり、北朝鮮でプロレス興行（猪木はリック・フレアーと対戦）を開催するなど、並の国会議員ではできないような足跡を残したが、残念なことに1995年の第17回参議院選挙で落選し、政界からも退いた。

1998年4月4日、猪木は東京ドームでプロレスを引退。力道山亡き後のプロレス界をジャイアント馬場と競い合いながら盛り上げてきた大スターが、ついにリングを去った……。

が、イノキイズムは未だ健在。現在もプロレス界、プロ格闘技界に大きな影響を与えていることは周知のとおり。彼はいつでもどこでも燃える闘魂・アントニオ猪木であり、誰の挑戦であろうと受けて立つのだ。

ジャンボ鶴田（つるた）

完全無欠のエース・ジャンボ鶴田。長年のプロレスファンに「日本人レスラーで一番強いと思うプロレスラーは?」と問うと、彼の名前を挙げる者が多い。鶴田は思わず「本気でやれっ!」と言いたくなってしまう

ほど、とにかく憎らしいほど強かったのだ。だが生来の優しい性格がそうさせるのか、戦い方に妙な余裕を感じてしまう。対戦相手がジャンボ鶴田に全力でぶつかっていくのを、8割の力で受け止めて最後はきちっと勝ってしまうのだ。

彼は他のスターレスラーと違い、団体を旗揚げしたこともなければ、社長になったこともない。病がもとで亡くなるまで、一プロレスラーとしてリングに君臨した真のプロレスラーである。

鶴田は山梨で広大なぶどう園を営む家に生まれた。赤ん坊の鶴田があまりにも可愛らしく女の子のようであったことから、友美と命名。

県立日川高校時代にはバスケットボールで全国高校選手権大会に優勝するが、中央大学進学後はバ

☆ジャンボ鶴田

本名	鶴田友美
身長	196cm
体重	127kg
生没年月日	1951年3月25日～2000年5月13日
出身	山梨県東山梨郡
所属	全日本プロレス
得意技	バックドロップ、ジャンピング・ニーバット、ジャンボ・ラリアット、フライング・ボディシザース・ドロップ、拷問コブラ他多数
入場テーマ曲	ローリング・ドリーマー、J

スケットではオリンピックに出られないことから、選手層の薄いアマレスに転向。しかし、大学のレスリング部への入部は許可されず、自衛隊のレスリング道場で技術を磨き、日本代表に選ばれるという変わり種であった。

レスリングの才能を開花させた鶴田は、1972年のミュンヘンオリンピック、レスリング・グレコローマン100kg超級に出場。善戦するも2回戦敗退(7位)に終わる。同年、ジャイアント馬場にスカウトされて全日本プロレスに入団し、その入団記者会見で「ボク、プロレスに就職します」という名言(?)を残している。

入団してすぐ、アメリカ・テキサス州アマリロのファンク道場へ修行に出るが、そこでともに練習に励むスタン・ハンセンと知り合い、以後、無二の親友となる。ハンセンは鶴田を「トミー」と呼び、練習後に鶴田が持ち込んだインスタントラーメンを二人で分け合って食べるなど、次第に友情を深めていった。お互いの全盛期にジャンボ鶴田対スタン・ハンセンの試合が常に期待外れに終わっているのは、こういった友情関係が影響していたのかもしれない。

1973年3月、テキサス州アマリロにてプロデビュー。その後、世界ヘビー級王座へ挑戦するなど異例の大抜擢を受け、150戦を消化した時点で凱旋帰国した。

同年10月には後楽園ホールでムース・モロウスキーとの国内デビュー戦を行った。それまでは本名でリングに上がっていたが、ファン公募によりジャンボ鶴田と改名、ジャイアント馬場とともにスケールの大きなプロレスを期待されての命名であった。

1970年代のジャンボ鶴田は、タイガー戸口(後のキム・ドク)との抗争やラッシャー木村とのエース対決を経て、徐々に超大物外国人レスラーとの対戦をこなしていく。ハーリー・レイス、ミル・マスカラス、ビル・ロビンソン、アブドーラ・ザ・ブッチャー、ブルーザー・ブロディ、ニック・ボックウィンクル、スタン・ハンセンなど、王者である事が当たり前のスターレスラーと互角の戦いを繰り広げ、全日本のエースとしての風格を漂わせるようになった。

だが、なぜかここぞという試合ではあと一歩及ばず、本気を出さないエースに、心無いファンは「善戦マン」という有り難くないあだ名を付けていた。しかし、これはファンが鶴田の潜在能力を認めている事の証でもあった。

1983年、なかなかブレークしきれないジャンボ鶴田に転機が訪れる。来日したルー・テーズから〝へそで投げる〟バックドロップを伝授され、フィニッシュ・ホールドとして使うようになったことで、凄味を増していった。

その後は、世界王者の常連リック・フレアーに一本勝ちしたのを皮切りに、ブルーザー・ブロディから力道山以来の日本の至宝インターナショナルヘビー級王座を奪取。これによりジャイアント馬場から「今日からお前が全日本のエースだ」とお墨付きをもらい、名実共に№1となった。

翌84年には、ニック・ボックウィンクルから日本人としては初のAWA世界ヘビー級王座を奪取し、伝説のバックドロップ・ホールドを生み出した。

だが、ジャンボ鶴田の本当の凄さ、強さを世に知らしめたのは、皮肉にも日本人レスラーとの抗争がきっかけだった。長州力率いるジャパンプロレスが全日本に参戦し、新日本プロレス仕込みの過激なハイスパートレスリングで連日にわたり全日本の選手を圧倒。一見のらりくらりとした全日本のプロレスを、そしてエースのジャンボ鶴田をこきおろした。

これに激怒した鶴田は、1985年11月の大阪直接対決で爆発。結果は60分時間切れ引き分けであったが、試合後は控え室で立ち上がれない長州力に対し、鶴田は街へ飲みに繰り出して余裕を見せた。以降、長州力はジャンボ鶴田の奥の深さを知り、一目置くようになったといわれる。

それからの鶴田は大変身を遂げる。怒った鶴田は誰よりも強いと言われ、以前と違って感情も表に出すようになる。またこの頃から、右腕を高々と上げて「オーッ!」と叫ぶキメポーズが試合に欠かせないものとなった。

後輩の川田利明との試合では、川田の執拗な顔面へのステップキックにブチ切れ、リング内外で大暴走。

反則のイス攻撃まで繰り出し、止めに入ったタッグパートナーの渕正信を突き飛ばしてレフェリーにも暴行。まさに公開処刑の感があったが、試合後の控え室ではうなだれて、「なんでボク、あんなにキレちゃったんだろう」と後悔していたというのもジャンボらしい。

1989年には初代三冠王者となり、この期に及んでもう誰も鶴田の実力を疑う者はいなくなった。

しかし、順風満帆に思えたプロレスラー・ジャンボ鶴田の人生に突然不幸が訪れる。1992年、B型肝炎発症。長期入院を経てリングに復帰するも、すでにコンディションはメインイベンターのそれではなかった。レスラーであることは辞めなかったが、リングから学問の世界に活躍の場を移し、筑波大学大学院に入学、大学教員となる。

ジャイアント馬場が亡くなった直後の1999年に引退を発表。その後はスポーツ生理学の客員教授としてオレゴン州ポートランド州立大学に赴任するも、2000年、フィリピン・マニラで肝臓の移植手術中に出血多量により死去。49年というあまりにも短い生涯を終えた。

プロレス関係者から、生前は「普段の試合では力の差がありすぎて本当の力が出せない」と言われていた天才プロレスラー・ジャンボ鶴田。天国では本当の力が出せる相手と戦えているだろうか？ 試合後にジャンボさんがコーナーに上り、ファンと「オーッ！」の大合唱を繰り返す姿が目に浮かぶ思いがする。

長州力

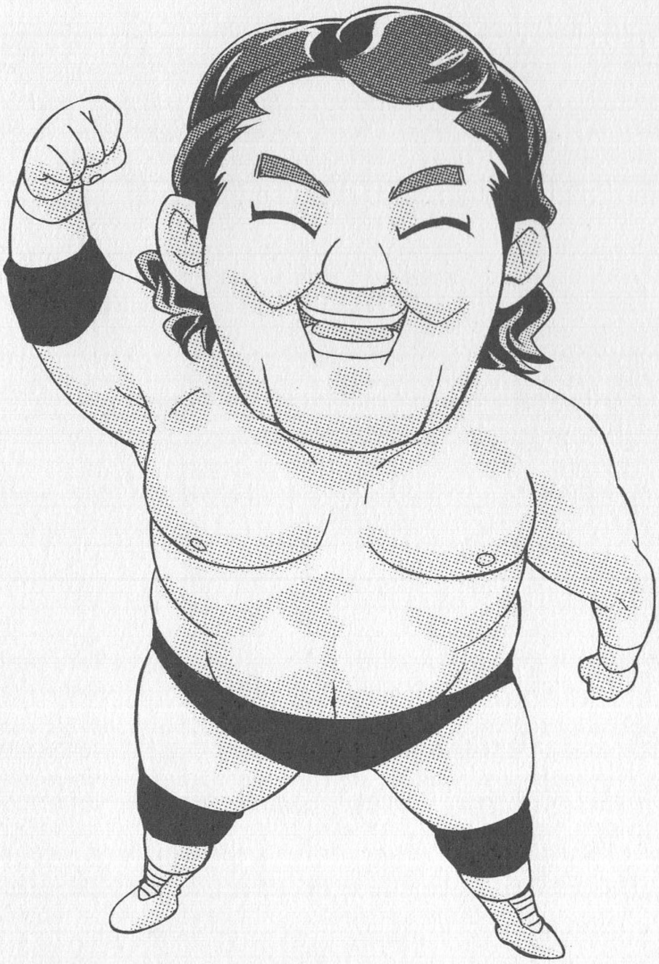
プロレスを見始めたばかりの10代、20代の若いファンの中には、長州力がスターレスラー？ と不思議に思う人がいるかも知れない。長州小力がコミカルにモノ真似をする〝もとのキャラ〟という認識しかない人もいるだろう。

だが、長州力は凄い！ 何が凄いって存在が凄い。昭和後期のプロレス人気を支え、サラリーマンに勇気

と希望を与え、相手レスラーの潜在能力を引き出し、誰よりも自身が光った。

　長州力のファイトスタイルには爽快感があった。常に自分より強い者、人気レスラーに噛み付き、相手を叩き潰すまで攻撃することを止めない。長州力がターゲットにする相手レスラーは「ふざけんな！」と反発し、眠っていた闘争本能を呼び覚まされ、やがて一流レスラーへと成長を遂げている。

　藤波辰巳、アントニオ猪木、ジャンボ鶴田、天龍源一郎らと抗争を繰り広げ、老いては橋本真也、蝶野正洋、武藤敬司の闘魂三銃士の高い壁となり、佐々木健介や馳浩を一流レスラーへと育て上げた。現在は燻っていてあまり表舞台に出なくなったが、長州力のカリスマ性はプロレス成長期に無くてはならない存在だったように思



☆長州力

本名	吉田光雄 （韓国名：郭光雄）
身長	184cm
体重	120kg
生年月日	1951年12月3日
出身	山口県周南市
所属	リキプロ
得意技	サソリ固め、リキラリアット、バックドロップ、ストンピング他多数
入場テーマ曲	パワーホール

える。彼は立派なスターレスラーであると断言する。

在日韓国人二世として生まれた吉田光雄（長州力）は、小学校の頃から柔道に没頭。徳山桜ヶ丘高校時代からアマレスに転向し、次第に頭角を現す。専修大学へ進学し、ミュンヘンオリンピックでは韓国代表として出場。同じミュンヘンオリンピック、レスリングの日本代表選手であった鶴田友美（ジャンボ鶴田）をライバル視し、大学卒業を待ってスカウトされ新日本プロレスに入団した。入団後に公募により「長州力」に改名、出身の山口県が長州と呼ばれていたことから、長州の力道山を捩った命名であると思われる。

さて、オリンピックのアマレス代表選手というと、プロレス界では超エリートの部類である。デビュー戦からサソリ固めで快勝し、長州の未来は順風満帆かと思われた。しかし、プロレスはレスリングのテクニックのみで輝ける世界ではない。人気レスラーがこぞって長髪でキャラクター作りをしている中、角刈りでずんぐりむっくりの長州力には華がなかった。筋肉隆々で精悍なマスクの藤波辰巳に人気が集中し、次第に若手の中に埋もれていくのである。

燃える闘魂・アントニオ猪木とドラゴン・藤波辰巳の人気で、1980年代は新日本ブームが到来。不満を募らせた長州力はタッグパートナーである藤波の頬を張り、あの歴史的名言「おれは藤波の噛ませ犬じゃない！」を発し、師匠のマサ斎藤らとともに維新軍を結成、体制に反旗を翻した「革命戦士」として脚光を浴びはじめた。

日焼けした肌はずんぐりむっくりをたくましい身体に変貌させた。時代に逆行する時代遅れの長髪は野武士のような精悍さを際立たせた。さらに地味なファイトスタイルを一新、全日本に移ったスタン・ハンセンのウエスタン・ラリアットを真似てリキラリアットを多用するようになり、「ハイスパートレスリング」と呼ばれる短時間で勝負をつける試合展開でファンを興奮させた。また、「噛ませ犬発言」の対象となった藤波との「名勝負数え歌」と呼ばれた一連のシングルマッチは、どちらが勝ってもファンを魅了した。

その後、長州はジャパンプロレスを旗揚げし、全日本プロレスに参戦。新日本で育った若手、中堅レスラーの多くが長州と行動を共にしたため、新日本プロレスは一時的に危機を迎えるが、奇しくも残った若手、

闘魂三銃士の起用により窮地を脱するとともに、スムースな世代交代の恩恵を与えることとなった。

全日本プロレスでもハイスパートレスリングで試合を席巻。ジャイアント馬場には「シャム猫の喧嘩」と揶揄されたが、天龍源一郎がいち早く反応し、再び名勝負を繰り広げた。

そしてプロレスファン待望のジャンボ鶴田対長州力戦。全日本のエースジャンボ鶴田と新日本出身の長州力の対決は、ジャイアント馬場とアントニオ猪木の代理戦争の様相を呈した(結果は60分時間切れ引き分け)。

やがて全日本プロレスを離脱し、新日本プロレスへと出戻るのだが、ここでも長州力が残した足跡は偉大だった。長州との激闘により才能を開花させた天龍源一郎と、覚醒したジャンボ鶴田が鶴龍対決の図式を作り上げ、全日本プロレスは長州が去った後も人気を維持し続けた。

新日本プロレスに戻った長州力は、今度は標的をアントニオ猪木へと移し、念願のフォール勝ちを奪って猪木時代の終焉を迎えるきっかけをつくった。そのまま現場監督として新日本プロレスを仕切り、１９９７年に引退。

２０００年７月に大仁田厚の挑発によって復帰するが、一度リングを離れた者が、第一線でトップと互角に戦えるほどプロレスは甘い世界ではない。体力も落ちてきた２００２年、痛烈な猪木批判による責任を取って新日本プロレスを退社した。

２００３年、ワールドジャパン(ＷＪ)プロレスを旗揚げするも、興行不振と相次ぐ選手の離脱で間もなく崩壊。２００４年、新日本にまさかの復帰を果たすが、所属はリキプロというスッキリしない立場で迷走を続けている。また愛弟子だった佐々木健介とも、金銭トラブルがもとで関係を断絶するに至っている。

一時代を築いたハイスパートレスリングも、相手の持ち味を殺してしまうとの理由で現在はほとんど実践するレスラーはいない。

プロレス黄金時代を駆け抜け、名勝負を繰り広げたレスラーの多くは引退したか逝ってしまった。願わくばスターレスラーのまま、復帰せず伝説として語り継がれる存在であって欲しかったが、裏を返せばそれこそが不器用な長州力らしさともいえる。

だが、1983年8月、突如新日本プロレスに契約解除を告げて引退、世間を驚かせる。

その後のタイガーは、1984年、第一次UWFに参加し電撃復帰。ザ・タイガー、スーパー・タイガーとして活躍するも、前田日明との確執により離脱し、修斗を設立した。

1994年には新日本プロレスに再び登場し、獣神サンダー・ライガーとのエキシビジョンマッチを行った。翌年には初代タイガーマスクとしてUWFインターナショナル、みちのくプロレス、東京プロレス、SAプロレス等に参戦。1997年にはタイガーキングとして新日本プロレス東京ドーム大会でアントニオ猪木と対戦した。

アントニオ猪木が設立したUFOにも参加し、小川直也を育てたが、団体方針の食い違いにより離脱。掣圏道を設立し、プロレス界から完全に引退したと思われたが、ザ・マスク・オブ・タイガーとしてまたもや復帰、初代タイガーマスクに戻ってドラゴンドアに参戦、WJプロレスでは初めて長州力と対戦した。2005年6月、「リアルジャパンプロレス」を旗揚げし現在も積極的に活動を行っている。

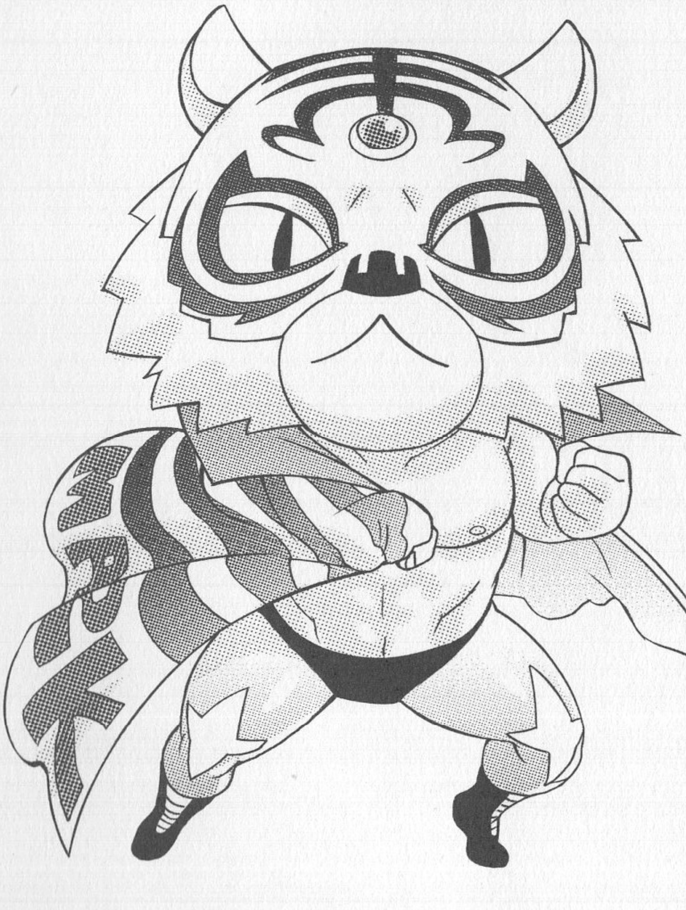
こうしたせわしない経歴を見てもわかるとおり、スターレスラー・タイガーマスクとしての伝説は、新日本プロレスを離脱した時に終わったというのが本当のところだろう。

ターダムにのし上がっていった。

　タイガーマスクの登場によって、ヘビー級の下に位置していたジュニア・ヘビー級にスポットが当たるようになると、ブラック・タイガー（マーク・ロコ）やダイナマイト・キッド、小林邦昭などのライバルが続々と現れ好試合を連発、さらにその人気に拍車がかかった。テレビ視聴率は毎週25％を超え、エース・アントニオ猪木をも凌ぐ人気レスラーへと成長したのである。

　タイガーマスクは人気だけではなく、実力的にも優れていた。活動した2年4か月の間の戦績は155勝1敗9引き分け、唯一の1敗はダイナマイト・キッド戦での場外フェンスアウトによる反則負けのみである。

　新日本の救世主として団体を支える立場にあったタイガーマスク



☆タイガーマスク（初代）

本名	不明 （一説では佐山聡）
身長	173cm
体重	95kg
生年月日	1957年11月27日
出身	不明（一説によると山口県下関市）
所属	新日本プロレス
得意技	サマーソルトキック、ローリングソバット、タイガースープレックス他多数
入場テーマ曲	お前は虎になれ

年配のファンは今でも、自分を鼓舞するときに頭の中で「パワーホール」を鳴り響かせている。

タイガーマスク（初代）

新日本プロレスに彗星のように現れ、わずか2年4か月の活動に過ぎないながら、四次元殺法を武器に、永遠に語り継がれる金字塔を打ち立てた伝説のマスクマン、タイガーマスク。天才レスラーの残した軌跡はあまりにも偉大で、後のプロレス界にも大きな影響を与えている。

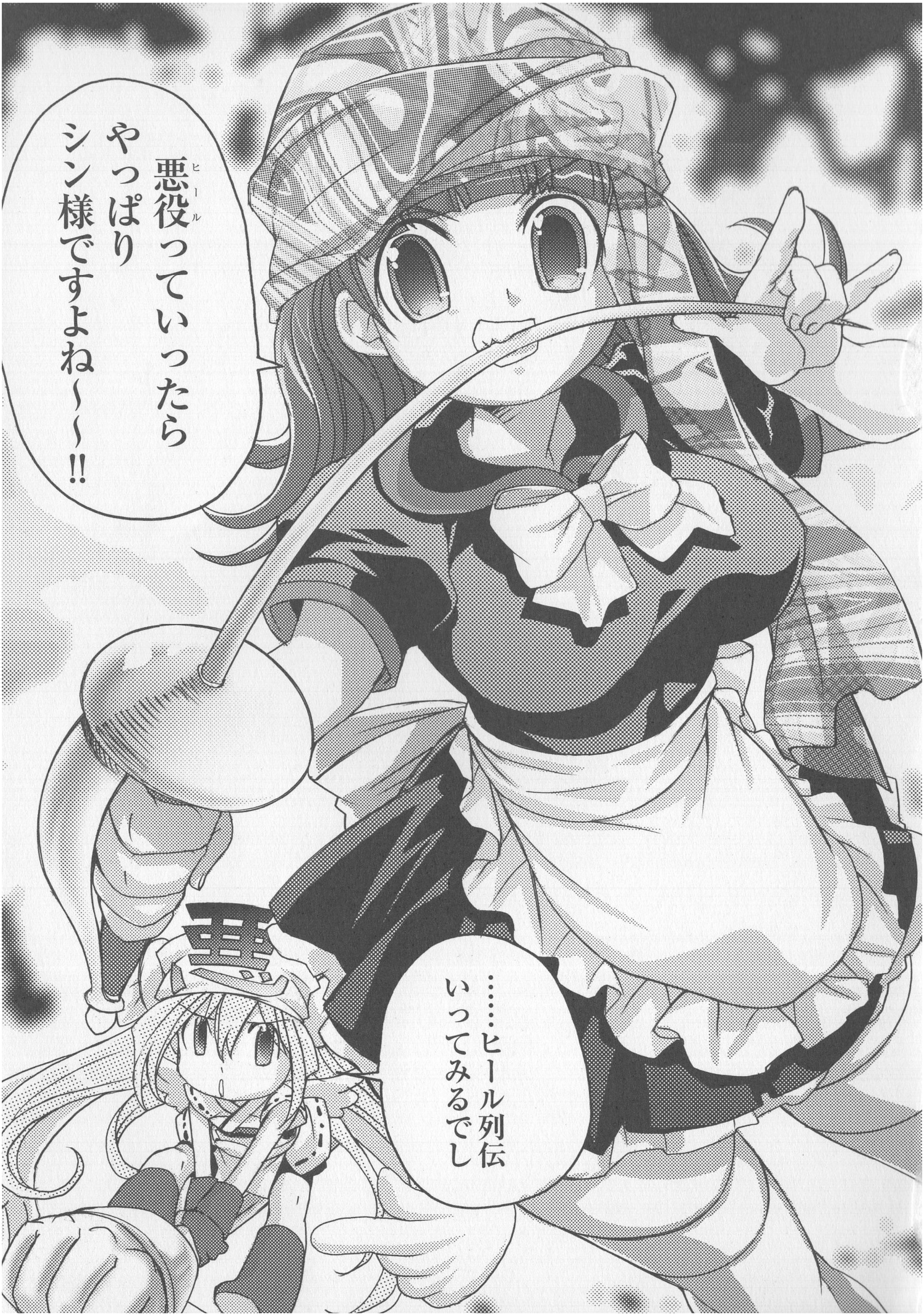
素顔のタイガーマスクは中学時代に柔道やレスリングで格闘技の下地をつくり、高校を1年で中退してプロレス入りした。1976年にデビューし、翌77年に行われた「格闘技大戦争」では、マーシャルアーツミドル級第一位のマーク・コステロとボクシンググローブ着用の統一ルールで異種格闘技戦を行うも、屈辱的な判定負けを喫してしまう。

プロレスこそ最強の格闘技と信じていた彼は、この敗戦によって実戦格闘技における打撃と間合いの重要性を知ることになる。この敗戦がなければ、後のタイガーマスクのファイトスタイルが誕生することはなかったかもしれない。

翌年、彼はメキシコに渡り、「サトル・サヤマ」のリングネームで活動、早くも世界ミドル級王座を獲得した。1980年にはイギリスに渡り、ブルース・リーの弟子「サミー・リー」として人気者になった。

海外遠征で大成功を収めていた彼に、1981年、帰国の指示が届く。いったんは断ったが説得された末に帰国し、アニメの世界から飛び出した謎の覆面レスラー・タイガーマスクとして再登場することになる。

マスクマンとしてリングに戻ってきたタイガーマスクは、デビュー当時とは比べものにならない進化を遂げていた。新日本プロレスのストロングスタイルをベースに、マーシャルアーツの打撃技、ルチャ・リブレの流れるような空中殺法を融合させた独自のファイトスタイルで観る者すべてを魅了し、あっという間にス


悪役（ヒール）っていったら
やっぱり
シン様ですよね～～!!
……ヒール列伝
いってみるでし

スーパーヒール列伝

スーパースターの次はヒール（悪役）に注目。ベビーフェイスという正義の味方がいるからには、当然悪役も必要になってくる、しかも恐ろしく強烈な悪役が…。

リングの中で正々堂々と戦おうとするレスラーをあざ笑うかのように、次々と繰り出す反則！　悪魔のようにしたたかに、ずる賢く相手をいたぶっていく。観客のブーイングなどものともせず、逆に喜んでいる。大好きなレスラーがボロボロになるまでやられているのを、ファンは拳を握りしめて耐えなければならない。フラストレーションが溜まりに溜まって限界に達したその時、一瞬の切り返しから反撃に転じるベビーフェイス！　後ずさりしながら今までの悪行の許しを乞うヒール。無様にリング内外を逃げ回りつつ（相手を深追いしない潔さもベビーフェイスの条件だ）、相手が気を許した一瞬の隙をついて急所攻撃。のたうち回る相手を踏みつけながら、観客に向かって見栄を切るヒール、その憎々しいこと……なんて具合に昔のプロレスは展開していた。

現在のプロレスはだいぶ様変わりしているが、それでも、いつの時代もプロレスにヒールはいなくてはならない存在なのだ。今ではヒールにも多くのファンがつき、時にはベビーフェイスを上回る人気を誇るヒールレスラーもいる。観客の価値観の基準が善悪からイデオロギーに変化してきたことが原因なのかもしれない。

そこで、スターレスラー以上の個性であえて悪役に徹したプロフェッショナルたちにスポットライトを当ててみた。プロレスの見方、楽しみ方は人それぞれ。ヒールが好きでも大いに結構。「何でもあり！」がプロレスの魅力なのだから。

フレッド・ブラッシー

プロフィール

本名	フレッド・マクダニエル
身長	183cm
体重	105kg
生没年月日	1918年2月8日～2003年6月2日
出身	アメリカ・ミズーリ州・セントルイス
得意技	噛み付き口撃、ネックブリーカー・ドロップ

「銀髪鬼（ぎんぱつき）」フレッド・ブラッシーは、日本のプロレス揺籃（ようらん）期において、外国人レスラーとして、そしてヒールとして最も大きな影響を与えたレスラーである。

異様な目付きでリングに登場するや、取り出した金ヤスリでギコギコと歯を磨（と）ぎ、ゴングが鳴ればひたすら相手レスラーの額（ひたい）に噛み付いて血だるまにしてしまう。グレート東郷との試合では、東郷の大流血シーンをテレビで観ていた老人がショック死するという逸話を残している。ブラッシー本人は悪びれる様子も無く、「アメリカでは俺の試合を観て50人はショック死している」と言い放ったらしい。

悪名高いブラッシーも、高校時代はスポーツ万能のエリートで、フットボールやボクシング、野球など、どの道に進んでもプロとして一流になれるだろうと言われていた。精肉所で働きながらトレーニングを積み、1935年、17歳でプロレスデビューした。デビュー当時は端正な顔立ちの正統派レスラー（！）として女性に人気があったが、その後海軍に入隊し、第二次世界大戦へ出征した。

戦後すぐにプロレスに復帰したが、正統派レスラーとしてはパッとせず、1959年に赤毛だった髪を銀髪に染め、ロサンゼルスを主なテリトリーとしてヒールに転向。そこで大ブレークし、1961年には、ロサンゼルスを拠点とする団体WWAの初代チャンピオンになった。その嫌われ方は半端でなく、ロスのプロレスファンからナイフで襲われたり、硫酸をかけられたりと、まさしくヒールの王道を歩んだ。

1962年、力道山に奪われたWWAチャンピオンベルトを追って日本プロレスに参戦。「銀髪鬼」「噛み付き魔」の異名をとり、噛み付き口撃で日本人レスラーを次々と血だるまにしていく。力道山人気と恐いもの見たさが相まって、日本プロレスは隆盛を極めた。

力道山からタイトルを奪い返した後は、アメリカで防衛を重ね、全日本プロレスや新日本プロレスにも参戦し、ジャイアント馬場やアントニオ猪木とも凌ぎを削っている…もちろん噛み付き口撃だけで。

1973年、持病の胆石の悪化によりレスラーを引退するも、前述の猪木対アリ戦ではプロレスとボクシングの橋渡し役となるべくアリのマネージャーを務めたり、無名の若手だったハルク・ホーガンやスタン・ハンセン（ウエスタン・ラリアットの名付け親であることはあまり知られていない）のキャラクターづくりを指導したりと、プロレス界に影響を与え続けた。

現役時代はプロレス界を盛り上げた悪役レスラーとして、引退後は名マネージャー、名アドバイザーとしての尽力が認められ、1994年にはWWF殿堂（現WWE殿堂）入りを果たしている。

日本人であるミヤコさんを妻とし、大の親日家であったフレッド・ブラッシー。日本とアメリカ、双方のプロレス界に大きな足跡を残し、2003年6月2日、心臓と腎臓の疾患の悪化によりニューヨーク郊外の病院で死去した。

通に言わせると、「ヤスリは爪磨ぎ用の細かい目だった」とか、「磨いでいた歯は差し歯で、磨ぐ真似をしていただけ」とか、ギミックの部分を強調したがる向きがあるが、そんなこと以上に、彼の持つ狂気に満ちたヒールとしてのプロ意識には、ただ頭が下がる思いである。

ザ・シーク

プロフィール

本名	エドワード・ジョージ・ファーハット
身長	183cm
体重	110kg
生没年月日	1926年6月7日〜2003年1月19日
出身	アメリカ・ミシガン州・ランシング（公式プロフィールではヨルダン・アンマン）
得意技	キャメル・クラッチ、火炎攻撃、凶器攻撃

「アラビアの怪人」ザ・シーク。シークとはイスラム教の首長を意味している。

リングでは狂人を演じ、凶器攻撃や火炎攻撃で悪行の限りを尽くす。たとえ仲間であっても平気で裏切る傲慢な個人主義者。そのうえ試合では、タッグパートナーを主に戦わせ、相手が弱った時だけ出ていって一方的にいたぶり、反撃されそうになると逃げるようにパートナーと交代する。勝てそうな時は、無理矢理交代して自分がフォールし、自分だけ勝ち名乗りを上げるイイとこ獲り。

レスラーだけでなく、実況席のアナウンサーや観客にも襲いかかり、全日本プロレスの実況を務めていた倉持隆夫氏の額を切り裂いた事もある。実際の生活で「こんなヤツがいたら嫌だろうなぁ…」と思わせる最低最悪のキャラクターでプロレス界に君臨したヒール中のヒール、それがザ・シークだ。

両親はレバノンのベイルートからの移民で、家は貧しく、10人兄弟の9番目という境遇からか、幼い頃から働いて家計を助けた。

1950年、アメリカでプロレスデビュー。初めはテキサスを中心に転戦し、リングに蛇を持ち込んだり、火炎攻撃などの反則を駆使してヒールとしての地位を高めていった。力の衰えを感じはじめた1964年、デトロイト地区の興行権を買い取ってプロモーターとしても活躍。アメリカのプロレス界では有名な存在となった。

日本マットへの初参戦は1972年、末期の日本プロレスに登場。坂口征二とUNヘビー級を賭けて2連戦を行なった(1勝1敗)。その後、新日本プロレスにも参戦するが、無断帰国したために(プロモーターとしての都合)永久追放となっている。

日本のプロレスファンの記憶に刻まれているザ・シークの試合は、何と言っても1977年の全日本プロレス・世界オープンタッグ選手権において、アブドーラ・ザ・ブッチャーとの「地上最凶悪コンビ」で臨んだザ・ファンクスとの一戦だろう。フォークを腕に突き立てる大流血戦となったこの試合は、プロレスファンで無くとも鳥肌の立つようなインパクトを放っていた。

その後もブッチャーとの仲間割れや、タイガー・ジェット・シンとの血みどろの抗争劇など、ヒールとしての役割を存分に果たし、シンとのシングル戦を最後に日本のメジャー団体から姿を消した。

1991年以降は大仁田厚率いるFMWに参戦。1992年にはFMW兵庫・三田大会で甥のサブゥーとタッグを組んで大仁田&ターザン後藤組とファイヤーデスマッチを行なう。団体の不手際でリング周辺の火力が強すぎ、全員が酸欠状態となってリングから飛び下りて退散する中、シーク一人が最後までリングに残って眼光鋭く見栄を切る姿は、まさに「真のプロフェッショナル」であることの現れだった。この試合で全身の60%を超える重傷の火傷を負ったシークは、一時は命も危ぶまれたほどだ。

こうしたシークのプロ意識に影響を受け、尊敬していた大仁田は、1998年12月11日、旗揚げした新団体「USO」後楽園ホール大会でザ・シークの引退セレモニーを行なったが、シーク自身は「これは何だ、俺は永遠に引退などしない」とうそぶいたといわれる。

その後、シークは故郷であるミシガン州ランシングで余生を送り、2003年1月18日、肺炎により死亡

した。

生前のシークは、ギミックなのかリアルなのかわからないようなキャラクターをリング上でも私生活でも通していた。真意の程は定かでないが、リング上ではずる賢い役を演じた事でパートナーのヒールがより注目されたのは事実だし、倉持アナがアメリカを訪れた際には、件の暴行を深く陳謝し、豪華にもてなしたという。また不手際で命を落としかけたファイヤーデスマッチ後も大仁田を責めることは無かった。

誰も知らない本当のザ・シーク、彼の引退セレモニーの最後の挨拶は「日本のファンは世界一のファンです」だった。

アブドーラ・ザ・ブッチャー

プロフィール

本名	ローレンス・シュリーブ
身長	186cm
体重	150kg
生年月日	1936年11月2日（公式プロフィールでは1941年生）
出身	カナダ・オンタリオ州（公式プロフィールではアフリカのスーダン出身）
得意技	地獄突き、エルボードロップ、ヘッドバット、凶器攻撃

「黒い呪術師」アブドーラ・ザ・ブッチャーは、外国人ヒールでありながら日本のプロレスファンに愛される人気者だ。

ラグビーボールのような体型（つまりデブ）に褐色の肌、つま先の尖ったリングシューズにダブダブ長ズボ

ン。「ブフゥ〜、ブフゥ〜」と独特の音を発する呼吸法で、目をギラつかせ、カラテの型で見栄を切る。試合では必ず額から流血し、攻撃されると「ヒィ〜ッ」と悲鳴に似た絶叫、なのに悲壮感ゼロ。「おいおい、おまえは強いのか？　ブッチャー！」

　キャラクター先行と誰もが認めるブッチャーではあるが、過去に獲得したタイトル（王座）は意外に凄い。アーニー・ラッドからNWF世界ヘビー級王座、ビル・ロビンソンからPWFヘビー級王座、ジャンボ鶴田からUNヘビー級王座、そしてNWA認定インターナショナル・タッグ王座等々、ベルトの価値から見ても、奪取した相手から見ても実力者であることは証明されている。つまりブッチャーは「強い」のである。

　アブドーラ・ザ・ブッチャー（以下ブッチャー）はインド移民の父とアフリカ系アメリカ人の母との間に生まれ、子供の頃は柔道と空手を習ったこともある。

　1958年「ゼーラス・アマーラ」のリングネームでプロレスデビュー。幾つかリングネームを変えながらシークのテリトリーであるデトロイトを主戦場としていたが、自己主張の強いわがままな性格がプロモーターから嫌われ、その結果、東南アジアや中米にも遠征している。

　1970年、日本プロレスの興行で初来日。開幕戦のBI砲（馬場&猪木）とのタッグ戦でいきなり馬場からピンフォールを奪い、衝撃の日本デビュー飾った。さらに今まで見たこともない派手な場外戦を繰り広げ、あっという間に日本マットでのブッチャー人気は確立されていった。

　1972年にジャイアント馬場が全日本プロレスを旗揚げすると、シリーズの目玉外国人として頻繁（ひんぱん）に参戦。馬場や鶴田、ザ・ファンクスなどとの抗争を通じてヒールとしてトップの地位に昇りつめる。この頃から人はブッチャーを「黒い呪術師」と呼び始めた。

　試合内容も過激を極め、ハーリー・レイスとの会場を飛び出しての場外戦、ストリートファイトは警察も緊急出動する騒ぎとなり、ザ・シークと組んでの地上最凶悪コンビ対ザ・ファンクス戦では歴史に残る流血戦も繰り広げた。

　1979年にはタイガー・ジェット・シンと組んで「プロレス　夢のオールスター戦」でBI砲の相手役

を務め、全日本プロレスの「チャンピオン・カーニバル」でも2度の優勝を飾るなど、日本における地位を確固たるものにした。

　1981年からは新日本プロレスと契約していたが精彩を欠き、87年には古巣である全日本プロレスに復帰。ジャイアント・キマラとのタッグで定着し、微妙な立場のベビーフェイスもこなした。現在もインディー団体と全日本を行き来し、プロレスラーとして悠々自適の活動を続けている。

　一流レスラーとして富と名声を得る以前のブッチャーは、貧困に喘ぎ、金銭問題でだまされ続けた苦い思い出からか、ケチだと関係者の多くは言う。ただし、食事をおごりさえすれば気さくにインタビューに応じるという憎めない一面もあるようだ。

　独特の風貌と気さくで憎めない態度でファンから愛されるブッチャー、プロモーターから嫌われ、仲間を怒らせるケチなブッチャー。きっとどちらも本当のブッチャーなんだろう。彼の仕事がヒールである限り、そんな事はどうでもいいんだから。

タイガー・ジェット・シン

プロフィール

本名	ヤヒッド・スィン・ハンス
身長	190cm
体重	120kg
生年月日	1944年
出身	インド・パンジャーブ州ルディヤーナー（公式プロフィールによる）
得意技	コブラクロー、足四の字固め、首四の字固め、サーベル攻撃

「インドの狂虎」タイガー・ジェット・シンは、アントニオ猪木のライバルとして新日本プロレスの黄金時代を築き上げた外国人ヒールだ。

入場時は、狂気の眼光とともに小刻みに身体を揺らしながら、サーベルをくわえて観客を追いかけ回す。

観客は大慌てで逃げまどい、場内は騒然。シンはタッグパートナーになだめられるようにして、ようやくリングへと向かう。

こうしてシンに追いかけられたことのあるプロレスファンは、口を揃えて「後にも先にも、あんなに恐ろしい思いをしたことはない」と言う。まるで本当の狂人か、クスリをやっているアブない男のようである。

そういった意味では、超正統派ヒールなのだ。

試合開始もまともにゴングが鳴ったことはなく、リングに上がるや否や相手レスラーの頭目がけてサーベルの柄を振り下ろす。ターバンで首を絞め、チョーク攻撃のコブラクローで相手レスラーにダメージを与える段になってようやく開始のゴングが打ち鳴らされる。

あとはやりたい放題！　たまに反撃されても一瞬の急所攻撃で形勢逆転、後はリングアウトか反則負けで試合終了だ。シンが去った後には、嵐が通り過ぎたような騒然とした空気と、ボロ雑巾のようにリングに転がっている相手レスラーが残る。まさしくやりたい放題の無法者である。こんなレスラーをなぜ、新日本プロレスはシリーズごとに招聘するのか不思議だったが……。

そこには、団体の存続とレスラーとしての生き残りを賭けた背景があった。

シンはフレッド・アトキンス（ジャイアント馬場の海外修行時代の師匠）に正統派レスリングの基本を徹底して叩き込まれ、1965年、カナダ・トロントでデビューした。世界王座挑戦のチャンスも何度かあったが、ベビーフェイスのプロレスラーとして芽が出る事はついぞ無かった。

その7年後の1972年、新日本プロレスがアントニオ猪木によって旗揚げされる。全日本プロレスと違って、アメリカマット界との強いパイプを持たない新日本プロレスは、トップレスラーとは契約ができない上、招聘するだけのギャラも払えなかったため、無名の外国人レスラーを独自に育て上げる方法しか残され

ていなかった。

アントニオ猪木がこうしたレスラーのプロフィールをチェックしていた際、口にナイフをくわえて凄むシンの写真が目に留まり、「ナイフじゃなく、サーベルをくわえさせてみよう」と語ったという。こうして日本での成功を夢見るシンと、団体に無くてはならない外国人ヒールを強く望む新日本プロレスの思惑が一致し、シンは来日を果たした。

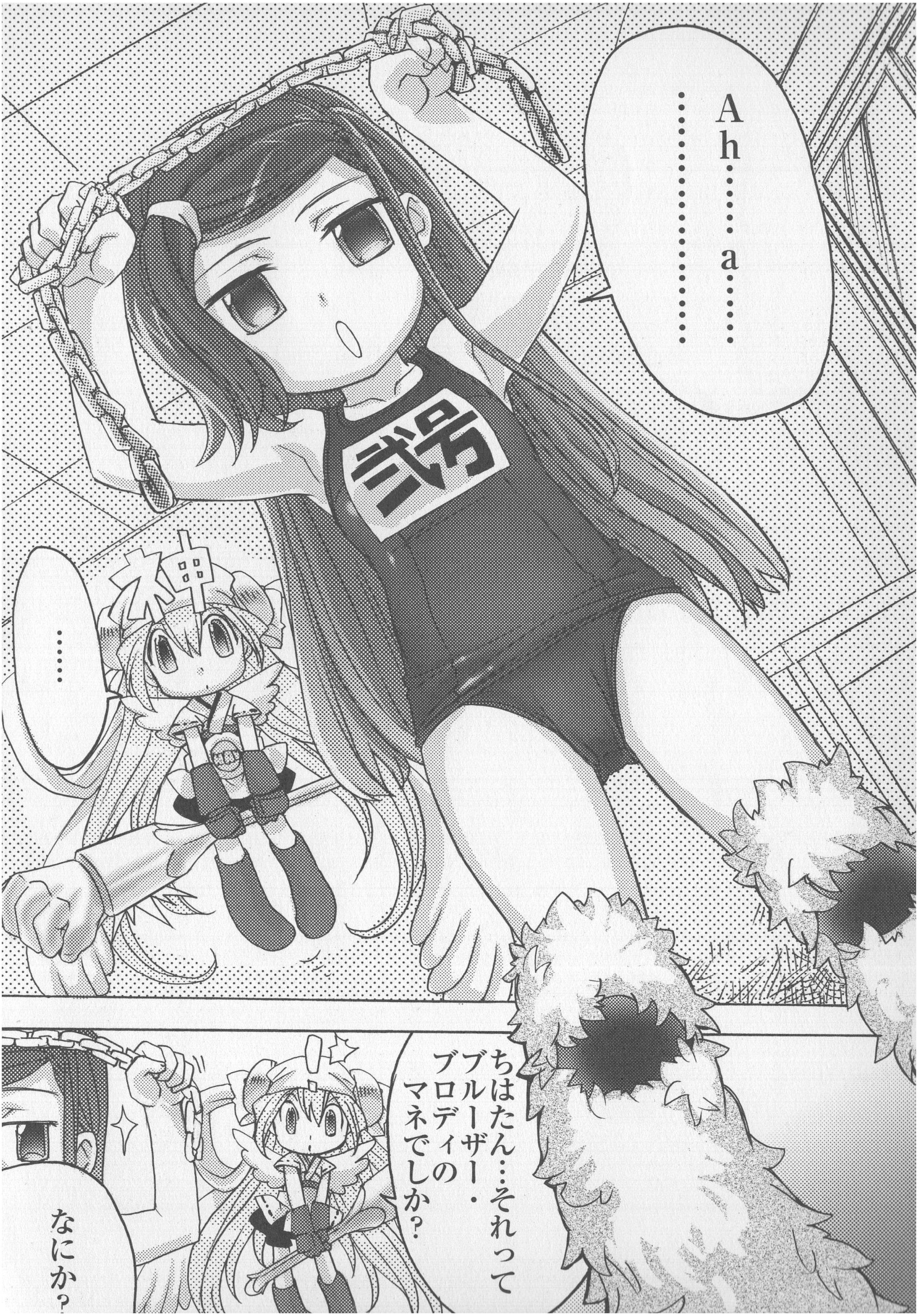
新日本プロレスに参戦したシンは、長期間にわたってアントニオ猪木との抗争を繰り広げ、ヒールのトップに躍（おど）り出た。タッグにおいても、上田馬之助との出会いによりその悪行に磨きをかけていくことになる。

1980年になると、新日本に新しい波が押し寄せてきた。スタン・ハンセンの台頭である。シンはマンネリ化した新日本マットを離れ、1981年、全日本プロレスと契約して活路を見出そうとするが、その思惑は完全に失敗してしまう。ほとんど同時期に、何とスタン・ハンセンも全日本に移ってきたのだ。またもやハンセンの陰に隠れてしまったシンは、人気の低下に歯止めをかけられず、徐々にその存在価値を失っていくことになった。

1990年には新日本に復帰を果たすが、さすがに体力の衰えは隠せず、若手とのかみ合わない試合に、誰もがタイガー・ジェット・シンの落日を感じるようになった。

最後の花道として1992年、大仁田厚率いるFMWに参戦するが、デスマッチ路線で人気を博したインディーマットで、なんとシンは再び大ブレークする。やはり「何でもあり」の試合が合っていたのか、水を得た魚の如（ごと）くリングで暴れ回ったのだ。その後もインディーを中心としてNOWやIWA・JAPANでも活躍し、ハッスルでも小川直也と対戦している。

リングでは「インドの狂虎」として暴れ回るシンだが、実は実業家としても成功を収め、カナダのトロントに大邸宅を構える富豪であり、社会的には紳士そのものだ。狂人と紳士、二つの顔を持つタイガー・ジェット・シンであるが、狂人はあくまで日本でつくられたギミックなのだから、本来は紳士なんだろうなぁ…。


Ah……a……
弐号
神
……
ちはたん…それってブルーザー・ブロディのマネでしか？
なにか？

外人スーパースター列伝

プロレスにおけるカード編成（誰と誰が対戦するかを決める作業）には幾つかのパターンが存在する。ベビーフェイス対ヒールの因縁の対決、ベビーフェイス同士の頂上決戦、ベテランと若手の世代闘争など、ファンが観たいと思うカードを提供することにより、プロレス人気は保たれているといっても過言ではないだろう。

そういった対決構図のひとつとして欠かせないのが、日本人レスラー対外国人レスラーの試合である。このカードの優れた点は、なんと言っても「わかりやすい」に尽きる。日本人の観客はやっぱり日本人レスラーが外国人レスラーにやられると悔しいし、反対に日本人レスラーが外国人レスラーに勝てば嬉しい。

体格も力もケタ違いの外国人レスラーにテクニックを駆使して立ち向かい、逆転のピンフォール決着での勝利ともなれば、初めてプロレスを観た人であっても興奮するに違いない。昭和のプロレスでは、ほとんどの外国人レスラーはヒールであった。悪役外人レスラー対日本人レスラーの試合は、会場の観客もテレビの前のファンもみんなが日本人レスラーを応援し、試合展開に一喜一憂したものだ。そして最後は必ずといっていいほど日本人レスラーが勝ち、ファンの溜飲を下げた。

プロレスが黄金時代を謳歌している頃、プロレスファンの中である変化が起こり始める。変化というより進化と言った方が正しいのかもしれない。戦中・戦後の復興期におけるアメリカに対するコンプレックスが、高度成長期、バブル期の国際化を経て次第に薄れていくにしたがい、プロレスにおいても「外国人レスラー＝悪役」という構図が成立しにくくなったのだ。

そんな折、メキシコからミル・マスカラスというマスクマンが来日する。軽快な「スカイ・ハイ」のテーマに乗ってリング内を華麗に舞うマスカラスの姿に、観客はいっぺんに魅了された。

このマスカラスから始まった外人スターレスラーの系譜は、日本人であろうが外国人であろうが、ベビーフェイスであろうがヒールであろうが、実力と華があって会場を沸かせることのできるレスラーが、人気者に成り得ることを示している。ちなみにアメリカでは、現在も日本人レスラーはヒールの役どころが主流である。

ファンによって育てられ、ファンによって変化していったプロレス界。その中で外国人レスラーがどのようにスーパースターに成り得たのか、ちょっとのぞいてみよう。

ミル・マスカラス

「千の顔を持つ男」「仮面貴族」「スカイ・ハイ」など、マスカラスには多くのニックネームというか代名詞が存在する。メキシコ（メヒコ）のプロレス界（ルチャ・リブレ）では英雄的存在の覆面レスラーである。

毎試合ごとに覆面（マスク）を替え、二重に被った覆面の一枚をリングから観客席に投げ入れるパフォーマンスで一躍有名になった。

本名はアーロン・ロドリゲス（って書いちゃってもいいのか?）、身長１８０㎝、体重１０５㎏の決して大きいとはいえ

☆ミル・マスカラス

本名	アーロン・ロドリゲス
身長	180cm
体重	105 kg
生年月日	1942年7月15日 （1938年説もあり）
出身	メキシコ・サンルイスポトシ
得意技	フライング・ボディアタック
入場テーマ曲	スカイ・ハイ

ない身体ながら、華麗な空中殺法とスピード感ある試合展開で観客を魅了した。

マスカラスは実は多くの足跡を日本マット界に残している。先述した入場パフォーマンスの他にも、全日本プロレスへの来日時にはジグゾーの「スカイ・ハイ」を入場テーマ曲に使用。その頃から入場テーマ曲はレスラーに欠かせないものへとなっていった。

またトップロープのような高い位置から繰り出される空中殺法、ハイスピードな試合展開は、その後のジュニア・ヘビー級の試合のよき見本となった。

世界で最も有名な覆面レスラーであるため、彼のパスポートは「マスカラス」というリングネームで支給されており、覆面姿の写真が貼り付けてあるという噂もまことしやかに囁かれているが、真偽の程は定かでない。

メキシコでは映画にも多数出演しており（もちろん主役）、レスラーというよりメキシコの英雄として現在も君臨している。

華やかさ、話題性でプロレス界を席巻（せっけん）したマスカラスだが、そのスタイルは万人に認められるとはいかなかったようで、意外な事にジャイアント馬場とは一度もシングル対決が実現していない。後に、馬場は自伝本でマスカラスのことに触れ、「正直言って私は、この手のタイプが好きではない。（中略）振り袖を着たお嬢さんに喧嘩（けんか）を売られたようなものだ。こっちの方がてれてしまう」と明記している。

いずれにしても、日本のプロレスがファンのニーズによって変化を余儀なくされたその時にタイミングよくマスカラスは現れ、ファンのみならず日本のプロレス界も変えていったことは事実だ。その偉業には素直に敬意を表したい。

ザ・ファンクス
（ドリー・ファンク・ジュニア＆テリー・ファンク）

何があっても正々堂々！　外国人レスラーのベビーフェイスのはしりとなり、侍魂（さむらいだましい）を持つ兄弟レスラーと

して1970年代の全日本プロレスには欠かせない存在だったのがドリーとテリーのザ・ファンクスだ。

アメリカマットで生涯ヒールを務めたドリー・ファンク・シニアの長男、ドリー・ファンク・ジュニアと次男テリー・ファンクの兄弟は、テキサス州アマリロで父によるレスリング英才教育を受けながら育った。兄のドリーは1963年デビュー、1969年にはジン・キニスキーを破り世界ヘビー級王座を奪取。その後4年3か月にわたりベルトを守った。

弟のテリーは、1965年デビュー、1975年にはジャック・ブリスコを破り世界ヘビー級王座を奪取。ドリーと並んで史上初の兄弟世界王者となった。

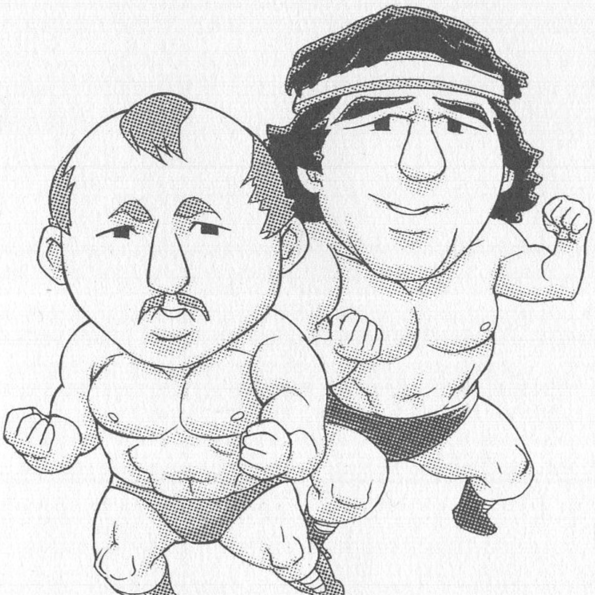
ドリーのニックネームは「グレート・テキサン」、テリーは「テキサス・ブロンコ」、その名の通りカウボーイをイメージさせるコスチュームで1970年に初来日し、以降、全日本プロレスで大活躍した。

ザ・ファンクスの日本における人気は、他に類をみない凄さだった。会場に入場テーマ曲の「スピニング・トーホールド」が鳴り響き、ファンクスが姿を現すと地鳴りのような歓声があがる。試合では、フラフラになったテリーが繰り出す起死回生のジャブ2発から右ストレート(反則です)で反撃の狼煙をあげ、どちらかが倒れた相手の足を掴むとファンは大興奮。それに応えるように繰り出される必殺のスピニング・トゥ・ホールド。

☆ザ・ファンクス

本名	ドリー・ファンク・ジュニア
身長	190cm
体重	115kg
生年月日	1941年2月19日
出身	アメリカ・インディアナポリス
得意技	スピニング・トゥ・ホールド、エルボー・スマッシュ

本名	テリー・ファンク
身長	188cm
体重	110kg
生年月日	1944年6月30日
出身	アメリカ・インディアナポリス
得意技	スピニング・トゥ・ホールド、ストレートパンチ



ファンクスが成功した理由は、何といってもヒールの外国人レスラーとの抗争にある。ブッチャー、シーク、ブロディとの試合で、兄弟力を合わせて全力で立ち向かっていく姿は、日本のファンの感情を大きく揺り動かした。ただ、そうした全力ファイトの影響もあって、テリーは膝に故障を抱えることとなり、現在は鎮痛剤なしでは日常生活を送れないほどに悪化しているという。

テリーはその後、引退と復帰を繰り返し、ＥＣＷやＷＷＦ（この時のリングネームはチェーンソー・チャーリー）のリングではハードコア路線に転向、このスタイルでもミック・フォーリーらと共に伝説的な試合を数多く残している。

レスラーとして超一流であったファンクスは、指導者としても類い稀な才能を発揮し、アマリロのファンク道場からは多くのスターレスラーを輩出している。

ジャンボ鶴田、天龍源一郎、西村修、スタン・ハンセン、テッド・デビアス、ボブ・バックランド、最近ではカート・アングルなどは、ファンク道場でプロレスを学んだといっても過言ではない。

駆け引き無し、真っ向勝負！　ザ・ファンクスはテキサス生まれのラストサムライとして今もプロレス界の中で生き続けている。

スタン・ハンセン

桁外れのパワーで「不沈艦」「ブレーキの壊れたダンプカー」などと呼ばれ、完全無欠の必殺技、ウエスタン・ラリアットで日本のプロレス界を席巻、新日本プロレスと全日本プロレスで長らく№1外国人として君臨したスタン・ハンセン。彼はとにかく強いレスラーだった。

学生時代はフットボーラーとして名を馳せたが、友人のテリー・ファンクにスカウトされプロレス入り。アマリロのファンク道場ではジャンボ鶴田と同期生で、互いにトミー、スタンと呼び合い、日本から送られ

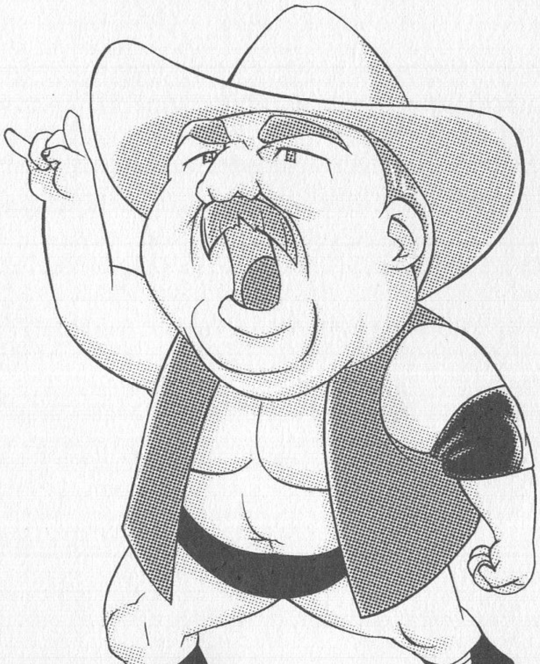
てきたインスタントラーメンを分け合って食べるほどの親友だった。ちなみにジャンボ鶴田の死後間もなく、ハンセンも静かにマットから身を引いた。

1973年にプロレスデビュー。一躍その名を轟（とどろ）かせたのは1976年、当時のWWWF世界ヘビー級王者であったブルーノ・サンマルチノとの試合で首を骨折させてしまった事件である。実際はハンセンがボディスラムを失敗したために起きたアクシデントなのだが、スターレスラーを大怪我させたことにより、アメリカのプロレス界から干されてしまう。

試合を求めて1975年に全日本プロレス、1977年には新日本プロレスに参戦し、アントニオ猪木との抗争を繰り広げ、徐々に日本での実績を積み上げていった。

フットボールのタックルを応用したというフィニッシュ・ホールド、ウエスタン・ラリアットは、まともにくらうと立ち上がれる相手は皆無だった。新人時代の長州力もこの技を多く受けたレスラーの一人で、ハンセンが全日本に移った後「リキラリアット」として自らも必殺技にしてしまった。

ハンセンは1981年に全日本プロレスに再登場し、ここからNo.1外国人レスラーの地位を不動のものにしていく。だが単に強いだけではスーパースターには成り得ないのもプロレスの面白さである。ハンセンもまたスターに不可欠なパフォーマンスに長（た）けていた。



☆スタン・ハンセン

本名	ジョン・スタンリー・ハンセン
身長	192cm
体重	135kg
生年月日	1949年8月29日
出身	アメリカ・テキサス州ナックシティ
得意技	ウエスタン・ラリアット
入場テーマ曲	サンライズ

入場テーマ曲の「サンライズ」が会場に鳴り響くと、一呼吸おいてハンセンが登場。今にも噛み付きそうな目をしてブンブンとブルロープを振り回す。ロープが観客に当たろうがおかまい無しだ。逃げまどう観客を追い払いながらリングイン、人差し指と小指を突き立てる独特のサイン、ロングホーンを作って高く掲げ「ウィーーーー！」

得意技のエルボードロップを落とす時には「ディーヤッ！」、ハンセンのかけ声に合わせて観客も声を振り絞っていた。寝技で相手を締め上げる時は、レフェリーに「アスク　ヒム！（奴に聞け）」と繰り返し、ギブアップを催促する。

観客はひたすらハンセンが相手の首を刈るその瞬間を待つ。左腕をちょいと掲げ、肘のサポーターをずらしたらウエスタン・ラリアットの合図。ハンセンの試合におけるウエスタン・ラリアットは、水戸黄門の印籠ばりのお約束なのだ。

豪快にラリアットをぶちかまし、大の字にのびた相手レスラーを見下し、勝利の雄叫び「ウィーーー!!」。そして勝利の余韻にひたる事も無く不機嫌そうに花道を引き揚げていく。ハンセンの試合はざっとこんな感じで行われるのだが、このアブないオジさん。観客の知らないところでは割合に人がいい。

ブルロープで怪我をしたファンがいると聞けば控え室に呼び、丁重に詫びてサインを渡したり、入場の際に動けない初老のご婦人にブルロープが当たってしまった時も、素に戻って「ソーリー、ソーリー」とひたすら謝っていた（テレビではご婦人に襲いかかっていたように見えたが…）。

また、ハンセンは外国人レスラーを大切に扱ってくれるジャイアント馬場を心から信頼し、全日本のリングに上がる限りはほとんど他団体のリングに立つ事は無く、シリーズの合間も日本人の妻が待つアメリカの実家で休養とトレーニングに努め、常にベストの状態で全日本プロレスに出場することに専念したという。ハンセンにとって、全日本のリングはまさに「ホームリング」だったのだ。

だが、そんなハンセンも２０００年11月、両膝の故障がもとで引退する。だが引退試合は行わなかった。「日本のファンには、強いスタン・ハンセンのイメージを残したままリングを去りたい」という理由からだ。

東京ドームで行われた引退セレモニーには新日本、全日本の両団体のレスラーが駆けつけ、亡くなったレスラーのみに行われるはずの異例のテンカウント・ゴングでそのレスラー人生の幕を下ろした。ハンセンは日本のファンを愛し、また日本のファンもハンセンを愛した。

ハンセンはその後、PWF(Pacific Wrestling Federation)の会長を務めたりしながら、故郷の子供たちにスポーツを指導し、余生を楽しんでいる。

ブルーザー・ブロディ

圧倒的なパワーと巧妙な試合運びで、ハンセンとともに日本のプロレス界を盛り上げたブルーザー・ブロディ。この二人がタッグを組んだ日にゃ、どんなレスラーでも勝てる気がしなかったものだ。

ハンセンとブロディには数多くの接点がある。もともと同じウエストテキサス大学でフットボールに熱中する先輩・後輩であったが、ブロディは卒業後にNFLでプロフットボールの選手となった。その後、膝の故障で引退し「ダラス・モーニング・ニュース」の記者に転身、スポーツコラムを担当している。

間もなく名レスラーであり、テキサス州ダラスのプロモーターでもあった〝鉄の爪（つめ）〟フリッツ・フォン・エリックにスカウトされてプロレス界に身を投じ、1972年ヒューストンでプロレスデビューを飾っている。

その後、ハンセンとタッグを組んで王座を奪取するも、王座転落後はコンビを解消し、リングネームを本名のフランク・グーディッシュからブルーザー・ブロディに改名。WWFに移ってキャリアを重ね、メインイベンターへ成長していった。

1979年1月、エリックの紹介で全日本プロレスへ初参戦。シリーズを負け無しで終え、その後は常連外国人レスラーとなった。1981年にはドリー・ファンク・ジュニアからインターナショナルヘビー級王

座を奪取し、そのベルトをめぐってジャンボ鶴田、天龍源一郎、そしてドリーらと名勝負を繰り広げ、日本での人気を不動のものにした。

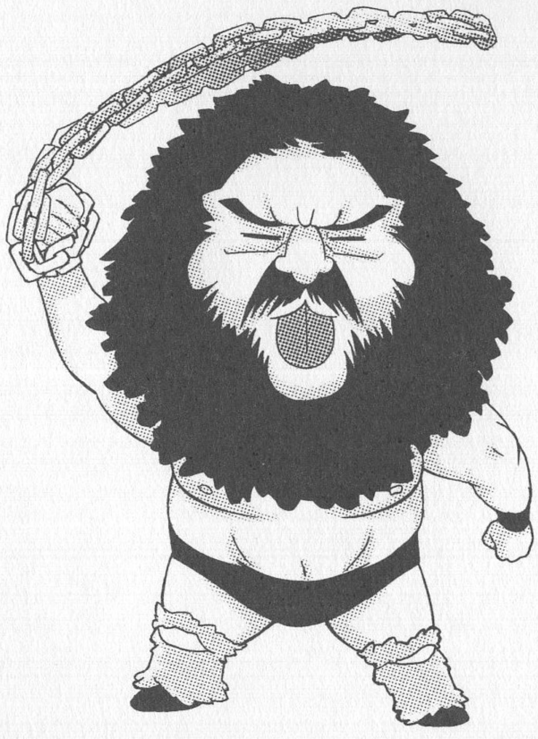
1982年には再びハンセンとタッグを結成、超獣コンビとしてブレイクした。1985年、新日本に移籍するもトラブル続きで最終的には永久追放となり、1987年には全日本に復帰。ここからブロディの強さはさらに磨きがかかっていった。

ブロディの神がかり的な強さ、そして巧さは他のレスラーを圧倒するレベルにあった。恵まれた体格に、新聞記者を勤めるほどの頭脳をもち、自身のプロレス感をリング上で体現しようとするその姿勢に対し、ファンから「インテリジェント・モンスター」「哲学獣」と呼ばれることもあった。

普段のブロディは物静かで穏やかな人柄であったといわれているが、レスラーを安くぞんざいに扱う上に、平気で使い捨てるブッカーやプロモーターを極端に嫌い、トラブルが絶えない一面もあったという。そんな性格が彼の人生をあれほど早く終わらせることになるとは誰が想像できただろう。

1988年、ジャンボ鶴田からインターナショナルヘビー級王座を奪回し、超獣のギミックを忘れて観客と抱き合うほどの幸せを体験し、まさしく前途洋々だったブロディを突如不幸が襲う。

同年7月16日、プエルトリコに参戦中、興行主のカルロス・



☆ブルーザー・ブロディ

本名	フランク・グーディッシュ
身長	198cm
体重	135kg
生没年月日	1946年6月18日～ 1988年7月17日
出身	アメリカ・ペンシルヴェニア州ピッツバーグ
得意技	キングコング・ニー
入場テーマ曲	移民の歌

コロンと衝突しトラブルとなった。その時コロンの配下であったレスラー兼ブッカーのホセ・ゴンザレスに腹部を刺され、出血多量が原因でこの世を去った。刺し傷は肝臓にまで達し、服用していた鎮痛剤の影響で出血が止まらなかったのも不幸な偶然だった。

この事件では信じられない結末が待っていた。現場に居合わせた他の関係者らは、コロンの影響力を恐れてか事件の証言を拒否、犯人のホセ・ゴンザレスは裁判で無罪となってしまったのだ。

プロレスラーとして最盛期にあったインテリジェント・モンスターは、最強のまま伝説になった。ブロディの試合を一度でも観た者は、「移民の歌」の入場テーマ曲に乗り、鎖をジャラジャラ鳴らしながら登場する勇姿を思い出すだろう。彼の伝説は永遠に語り継がれるのだ。

ハルク・ホーガン

ハルク・ホーガンはアメリカのプロレス界では伝説的存在であり、コアなファンは「ハルカマニア」と呼ばれるほどの人気を誇る。プロレスラーとして史上最も成功した男と言われ、その影響力は未だ健在である。「リアル・アメリカン」というニックネームも、彼のアメリカにおける人気をよく表わしているといえるだろう。

そんなスーパースターのハルク・ホーガンも、実は日本で育てられた〝逆輸入レスラー〟であり、ホーガンのアメリカでの成功こそ、日本のプロレスのレベルの高さを証明するものといえるだろう。

フロリダ州タンパ出身のテリー・ボレア（ホーガンの本名）は、高校時代にウエイトリフティングで鍛えていたが、南フロリダ大学時代は「ラッカス」というロックバンドのベーシストとして音楽の道を志していた。

ところが、元世界王者ジャック・ブリスコの弟ジェリー・ブリスコにスカウトされてプロレス入り、1977年、テリー・ブルドーのリングネームでデビューした。1979年12月、マジソン・スクエア・ガーデ

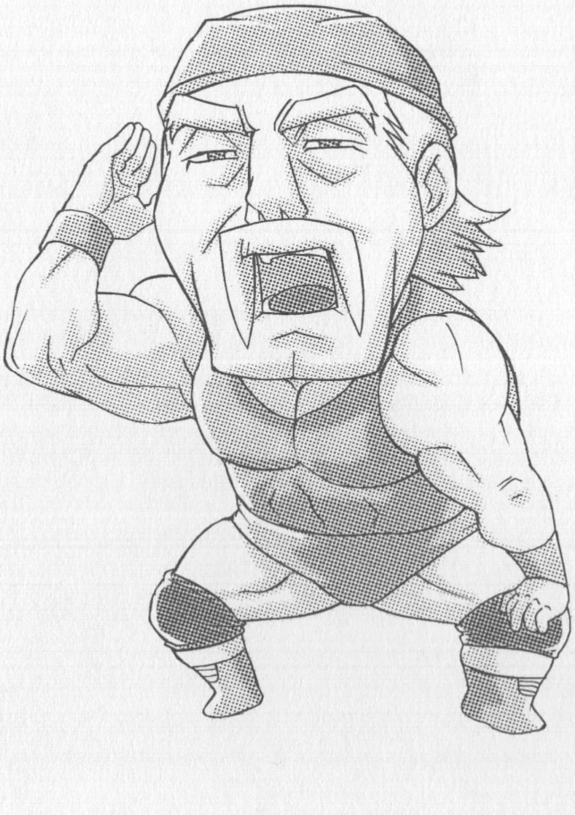
ン進出をきっかけに、当時の人気コミック「超人ハルク」にあやかってハルク・ホーガンに改名。デビューから負け知らずの二十数連勝の偉業を達成し、「マジソン・スクエア・ガーデンの奇跡」といわれた。

１９８０年5月に新日本プロレスに初参戦。当時はまだグリーンボーイ同然の若手であったが、新日本のファイトスタイルを素早く吸収し徐々に頭角を現していく。

この時の先輩レスラーにスタン・ハンセンがいた。ウエスタン・ラリアットひとつで新日本マットを席巻するハンセンに触発され、ハンセンが全日本に移ったのを機に、ラリアットの際に肘を直角に曲げて相手の顔面に叩き込む「アックスボンバー」を開発、やがて自身の代名詞となる得意技に磨きあげていった。

１９８３年、アントニオ猪木が「世界王者の中から本物の世界王者を決める」と提唱して開催した第1回ＩＷＧＰ決勝リーグ戦に出場。猪木と同点1位となり、決勝戦を行うが、ここでホーガンの人気を絶対的にする出来事が起きた。ストロングスタイルの象徴的存在であった猪木をアックスボンバー一発で失神ＫＯに追い込み、病院送りにしてしまったのである。こうしてホーガンは、大番狂わせで初代ＩＷＧＰ選手権者となる快挙を成し遂げた。

新日本のエース・アントニオ猪木を破ったホーガンではあるが、レスリングは決して巧いといえるレベルではなかった。そ



☆ハルク・ホーガン

本名	テリー・ジーン・ボレア
身長	201cm
体重	145kg
生年月日	1955年8月11日
出身	アメリカ・フロリダ州タンパ
得意技	アックスボンバー、レッグドロップ
入場テーマ曲	リアル・アメリカン

れでもスーパースターに成り得たのは、超人ハルク顔負けの筋肉美と、着ているＴシャツを力任せに破り捨て、「イチバーン！」と人差し指を突き立てる派手なパフォーマンスのおかげであろう。

その後は、新日本とホーガンが所属するＷＷＦ（現ＷＷＥ）との断絶から日本のマットに上がる事はほとんど無くなったが、アメリカに戻って定着したホーガンは、母国アメリカで不動のヒーローになっていった。

ちなみにプロレスでスターになったホーガンも、映画俳優やミュージシャンとしての活動ではパっとせず、そちらの世界でスターになることは叶わなかった。

アンドレ・ザ・ジャイアント

「世界8番目の不思議」といわれた２２３㎝の巨体を駆使し、日米のトップレスラーを翻弄（ほんろう）したアンドレ・ザ・ジャイアントは、プロレス史上最も大きい存在感を放ったスターレスラーの一人である。

本名はアンドレ・ルネ・ロシモフ。幼い頃はサッカー、ボクシング、レスリングに打ち込むスポーツ少年だった。巨人症による長身を見込まれ、１９６４年、パリで18歳の若さでプロレスデビュー。

一般的には、樵（きこり）をしていたアンドレを同じフランス系のレスラー、エドワード・カーペンティアがスカウトしたという逸話が知られているが、これは後年の創作である。ただし、当時最も小柄なトップレスラーだった（身長１７０㎝未満！）カーペンティアが、最も大柄なアンドレを〝発見〟したというのは、おとぎ話としては面白い。

１９７０年にカナダのモントリオールに移住し、リングネームを「ジャン・フェレ」として活躍した。それが認められＷＷＷＦ（後のＷＷＦ、現ＷＷＥ）と契約し、アンドレ・ザ・ジャイアントとしてメジャー団体での売り出しが始まった。

日本へは１９７０年、吉原功（いさお）にスカウトされ「モンスター・ロシモフ」のリングネームで国際プロレスに初

参戦。その時に出会ったバーン・ガニア（ＡＷＡの帝王と呼ばれたアメリカマット界の重鎮）の指導によりレスリング・テクニックも向上、当時は寝技や弓矢固めなども楽々こなしたという。

その後、新日本プロレスに参戦し、アントニオ猪木と熱戦を繰り広げている。東洋の巨人・ジャイアント馬場の２０８㎝をはるかに超える身長と２３６㎏の体重を誇るアンドレは「人間山脈」と呼ばれ、実況の古館伊知郎からは一人民族大移動とニックネームを付けられている。

アンドレはプロレス界において変わった存在価値を持っていた。普通はレスラー個人がどれだけ強いのかを競うものだが、アンドレには強い・弱いの基準が存在しない。それよりもアンドレを抱え上げ、ボディスラムで投げることが強さの基準とされていたのだ。

ちなみにアンドレをボディスラムで投げることができたレスラーは、ハルク・ホーガン、スタン・ハンセン、ハーリー・レイス、ローラン・ボック、エル・カネック、アントニオ猪木、長州力の7人のみ。確かに皆がスーパースターであり、誰もが認める実力者である。

１９９３年1月27日、父親の葬儀に出席するため滞在していたパリのホテルにおいて急性心不全で死去、その生涯を終えた。巨人症の影響なのか、長年にわたる異常なまでの酒量が原因な

☆アンドレ・ザ・ジャイアント

本名	アンドレ・ルネ・ロシモフ
身長	223cm
体重	236kg
生没年月日	1946年5月19日～ 1993年1月27日
出身	フランス・グルノーブル
得意技	ヒップドロップ

のか、大巨人の終わりはあっけなく訪れた。

アンドレの死後、親友だったマイティ井上の証言により、天涯孤独と思われていたアンドレに内縁の妻がいて、娘も元気に成長しているという事がわかった。

番外編 ルー・テーズとカール・ゴッチ

プロレスというジャンルがこれだけの繁栄を得るためには、そこに至るまでの土台をつくり、プロレスを支えてきたレスラーが存在する。言うまでもなく、日本の「プロレスの父」は力道山だが、力道山以外にも日本のプロレス界の基礎づくりに多大な貢献を果たした外国人レスラーがいる。

ルー・テーズとカール・ゴッチ。日本で一時代を築いた大物レスラーは、必ずといっていいほどこの二人の指導を受けている。二人をあえて形容するならば「太陽と月」「水と油」といったところか。仲違いしていた時期もあるが、基本的にはお互いの実力を認め合っていたと思われる。この二人のプロフィールを簡単に紹介しておこう。

●ルー・テーズ

ルー・テーズ（本来の発音はセーズ）は、1916年4月24日、アメリカに移住したばかりのハンガリー人の父とドイツ人の母の間に生まれた。1932年9月、弱冠16歳でプロレスデビュー。1937年12月には21歳の若さでNWA世界ヘビー級王者となった。

その後も各団体のヘビー級王座の奪取を繰り返したが、1948年7月20日にビル・ロンソンを破って第38代NWA世界ヘビー級王者となってから、1955年3月レオ・ノメリーニに反則負けを喫するまで、引き分けをはさんで936連勝という偉業を成し遂げている。

1957年10月には日本プロレスに初参戦、力道山と名勝負を繰り広げた。さらに国際プロレス、新日本プロレスと参戦し、新日本プロレスではカール・ゴッチとタッグを組んで世界最強タッグ戦に出場。アントニオ猪木、坂口征二と試合を行っている。

　この時テーズ57歳、すでに「鉄人」の異名をとり、20世紀最強レスラーと言われるほどの名声を欲しいままにしていたが、さらに74歳まで現役を貫き、なんと57年もの長きに渡りプロレス界に君臨し続けた。世界的視野で見れば、20世紀のプロレス史はルー・テーズの歩んだ歴史と言っても過言ではない。

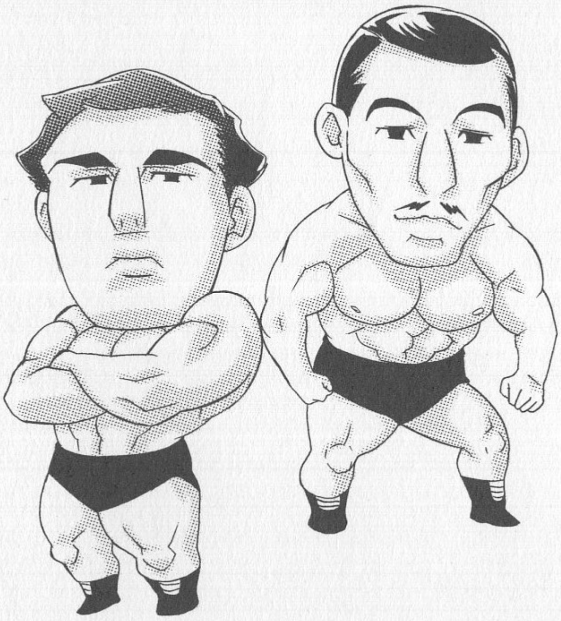
　強くて巧いプロレスラーとして脚光を浴び続けたスーパースター、ルー・テーズ。新日本とUWFインターナショナルの間のゴタゴタに関わるなど、日本のファンや関係者から心よく思われない時期もあったが、それでもなお、彼がプロレス界最大の功労者であることは間違いない。

●カール・ゴッチ

　そのルー・テーズが、ベストレスラーの一人として認めていたのがカール・ゴッチである。

　本名カール・イスタス。1924年8月3日、ドイツ・ハンブルクで生まれた彼は（ベルギー出身説もあり）、1959年に「カール・クラウザー」のリングネームでアメリカマットへ進出。

☆ルー・テーズ＆カール・ゴッチ



本名	アロイシアス・マーティン・ルー・セーズ
身長	191cm
体重	110kg
生没年月日	1916年4月24日～2002年4月28日
出身	アメリカ・ミシガン州バナット
得意技	バックドロップ、ダブル・リストロック、フライング・ボディシザース・ドロップ

本名	カール・イスタス
身長	188cm
体重	110kg
生没年月日	1924年8月3日～2007年7月28日
出身	ドイツ・ハンブルク （公式プロフィールによる）
得意技	ジャーマン・スープレックス

「ゴッチ」の名は1961年に20世紀初頭の伝説のレスラー、フランク・ゴッチにあやかって付けられた。

同年5月、日本プロレスへ初参戦。ここで吉村道明を相手にジャーマン・スープレックス・ホールドを初披露し、プロレスファンの度肝を抜いた。ちなみに技名の「ジャーマン」は、ゴッチがドイツ系であるという単純な理由からついたものだった。

その後はアメリカに戻り、当時テーズが保持していたNWA世界ヘビー級王座に9回挑戦したが、いずれも引き分けもしくは惜敗に終わり、「無冠の帝王」の異名を取るに至る。

1968年には日本に移住し、日本プロレスのコーチに就任。「ゴッチ教室」を開いてアントニオ猪木にジャーマンと卍固めを伝授した。そのヨーロッパ仕込みのテクニックに多くのレスラーが傾倒し、日本では「プロレスの神様」と称されるようになる。

その後、レスラーとしても来日参戦するが、やがてフロリダ州タンパに移って「ゴッチ道場」を開設。新日本プロレスの木戸修、藤原善明、佐山聡、前田日明などの実力派レスラーを次々と育て上げた。

親日家のゴッチは、第一次、第二次UWF、藤原組、無我ワールド・プロレスリングの顧問を務め、パンクラスの名付け親になるなどして日本マット界の発展に貢献し、2007年7月にフロリダ州タンパの自宅で82歳の生涯を終えた。

20世紀最強レスラーと無冠の帝王、それぞれのプロレス感は微妙に違っていても、プロレスの方向性を示し、導いてきたその足跡は偉大であり、スーパースターであったことは疑う余地は無い。

神

忘れちゃいけない〝いぶし銀〟

プロレスはスーパースターだけでも、悪役レスラーだけでも、外国人レスラーだけでも成り立たない。それぞれの魅力を引き立たせる中堅レスラーが絶対に必要だ。

トップに立っていないからといって、決して中堅レスラーに実力がない訳では無い。例えは悪いが、サーカスのピエロのようなものと考えてみて欲しい。華麗な空中ブランコや猛獣使いなど、メイン級の催しものの合間に突然現れるピエロ。顔は滑稽だし、芸をするとズッこけて観客の笑いを誘う。しかし、実はサーカス一座の中で一番のテクニシャンであったりするのだ。

どんなレスラーが相手でもきちんと試合を組み立て、第一試合から続く流れを途切れさせることなくメインイベントへ向けて盛り上げていく役目は、中途半端な実力のレスラーにはかなり難しい仕事である。

スターとしての華はないが、強くて巧い、そんな〝いぶし銀〟のレスラーたちにも注目して欲しい。中にはトップレスラーより強いレスラーもいたりするから、プロレスは奥が深い！　会場に足を運ぶようになったら、第2～第4試合あたりも注意して観てごらん。「う～ん」と唸るような攻防を見る事ができるよ。

石川敬士

プロフィール

本名　石川孝志
身長　180㎝

体重	110kg
生年月日	1953年2月5日
出身	山形県鶴岡市
得意技	相撲タックル、相撲ラリアット、スモーピオン・デスロック

彼をひとことで言い表すなら、「受け身の芸術家」といったところだろうか。

スタン・ハンセンや長州力のラリアットをあれほどきれいに受けてみせるレスラーは他にいない。通常、ラリアットをくらうと後ろにふっ飛ばされて後頭部をマットに打ちつけてしまう。ところが石川敬士が受けると、一回転してうつ伏せに倒れこんでしまうのだ。一瞬の出来事なのだが、それはもう見事な一回転だ。これによりハンセンや長州の技の威力が際立ち、観る者に凄さと痛みを感じさせることができる。

基本的に石川の技の受け方は思い切りがいい！　受けることにより自己主張しているようにも感じるのだが、それは相撲出身レスラーの悲しいキャラクターが成せることかも知れない。

石川は日大相撲部では主将として活躍。卒業後は大相撲花籠部屋に入門し、「大ノ海」の四股名で前頭四枚目まで昇りつめたが、糖尿病が悪化したため廃業。

プロレス転向は1977年で、まずはジャイアント馬場の勧めで渡米、元世界王者のパット・オコーナーの指導を受けた。同年11月17日、ボブ・オートン・ジュニア戦でデビュー、〝スモウレスラー〟として髷をつけたまま戦っている。

その後、国際プロレスに参加するために帰国し、1979年に全日本プロレスへ移った。全日本では主にアジアタッグ王座を保持し、中堅としての地位を築いていった。この全日本時代が石川にとって一番輝いていた時期かもしれない。新外国人レスラーの腕試し役や、長州力率いるジャパン軍団の大きな壁として全日本を代表して戦った。また、元横綱・輪島の全日本プロレス入団の際には、輪島の後輩として尽力している。

1988年には輪島と共に全日本を引退するが、1990年には新団体SWS（メガネスーパー・ワール

ド・スポーツ）の旗揚げに参加するかたちで復帰、ＳＷＳ崩壊後は天龍源一郎率いるＷＡＲ（レッスル・アンド・ロマンス）に参加するも、これまた離脱。

1994年には東京プロレスを自ら設立、団体を旗揚げしたプロレスラー史上、もっともカリスマ性の無い社長レスラーと揶揄（やゆ）された。その東京プロレスも2年で崩壊、次にインディー統一機構ＦＦＦに参加するも、これまた旗揚げ前に崩壊、新東京プロレスを旗揚げするもやっぱり崩壊。新日本プロレスの東京ドーム大会に参戦するも敗退。そしてついに1998年1月19日、プロレス界を引退した。

しかしまあ、復帰後は見事なくらい恵まれなかったレスラーだ。これだけ災難続きだとそのうち忘れられてしまいそうなものだが、試合での受けっぷりが買われたのだろうか、負けることで己の必要性を体現した貴重な存在といえる。

唯一試合中に石川選手がテクニックで魅せた場面が、スモーピオン・デスロック（変型のサソリ固め）。ステップ・オーバーした際の誇らしい表情が懐かしい。

藤原喜明（ふじわらよしあき）

プロフィール

身長	185cm
体重	100kg
生年月日	1949年4月27日
出身	岩手県北上市
得意技	脇固め、腹固め、一本足頭突き

丸坊主頭に強面の風貌は、個性的なキャラクター揃いのプロレス界においても異彩を放っている。今でこそ俳優やタレント業でのネームバリューもあり、プロレスファンでない人も知る存在となったが、プロレスラーとしての組長はかなり遅咲きだった。

１９７２年11月に新日本プロレスに入門、なんとその10日後の11月12日に藤波辰巳戦でデビューした。カール・ゴッチを師と仰ぎ、レスリングの技術に磨きをかけていった。ゴッチの教えを次々に吸収し、テクニックにおいては新日本プロレスの道場では誰にも引けを取らないまでに成長したが、何せ華が無い。来る日も来る日も前座試合に出場し、テレビでのプロレス中継に映ることはほとんど無かった。

それでも新日本の中堅レスラーや新人からは「鬼」と恐れられ、アントニオ猪木のスパーリング・パートナー兼ボディガードとして海外遠征に帯同している。その頃にはコアなプロレスファンからは、「道場では猪木よりも強い」と言われるほどの実力者になっている。

力自慢の勘違い男が道場破りに乗り込んでくると、必ず藤原が相手になって関節技で相手を翻弄、道場には相手の悲鳴が響き渡り、終いには大抵ボロ雑巾のようになって道場から叩き出されていたというエピソードは有名である。

そんな〝知る人ぞ知る〟存在だった藤原が一躍脚光を浴びるきっかけとなったのが、１９８４年2月3日、雪の札幌大会での「長州襲撃事件」である。藤波との「名勝負数え歌」といわれた試合の直前、入場の花道で長州を襲撃して血だるまにしてしまったのだ。これにより「テロリスト・藤原」として、その後の維新軍団との抗争に無くてはならない存在になった。

長州力が藤波を踏み台にしてトップレスラーに昇りつめた事を考えると、藤原が長州を踏み台にしたのは皮肉な話である。この維新軍団との抗争の中、組長は何とも味のあるサイコーのプロレスラーだった。格下相手には情け容赦のない関節技でいたぶり、格上相手には大健闘しながらも見事なやられっぷりで、スリーパー・ホールドを仕掛けられたまま意識朦朧となり、口から泡をブクブクと出し、瀕死のブルドックのような形相で身体全体を痙攣させ相手の強さを表現して見せた。

かっこ悪さの中にキラリと光る玄人（くろうと）好みの関節技をもった藤原は、コアなプロレスファンだけでなく新人レスラーからも慕（した）われ、傾倒する弟子が自然に増えていった。

その愛弟子たちの移籍に合わせ、第一次ＵＷＦに参加、新日本復帰、第二次ＵＷＦと渡り歩き、１９９１年3月、自らの団体「プロフェッショナル・レスリング藤原組」を旗揚げした。しかしエースの鈴木みのる、船木誠勝らが「パンクラス」旗揚げのため円満離脱したため、以降はフリーのようなかたちでリングに上がっている。

プロレス以外にも、イラストレーター、映画俳優、浪曲師、陶芸家……と独自のセンスを活かして各方面で活躍していたが、２００７年10月、突如胃ガンであることが発覚し、すぐに手術を行った。

今後の試合への出場は微妙な状況だが、〝組長〟の最後の花道はぜひとも華々しくあっていただきたいものである。

木戸修（きどおさむ）

プロフィール

身長	１８０cm
体重	１０５kg
生年月日	１９５０年2月2日
出身	神奈川県川崎市
得意技	キド・クラッチ

プロレス界で「いぶし銀」というと、それは木戸修の代名詞だ。寡黙（かもく）な職人肌でファンの間では「プロレス

界の良心」とも言われている。

どんなに激しい試合展開が続いても、試合中に彼のヘアースタイルが乱れることはなく、まるで彫刻のようにきちんとセットされたヘアースタイルが木戸のトレードマークであった。また極端な潔癖性でも知られ、グレート・ムタ（武藤敬司の化身）戦で顔面に毒霧を噴かれてしまった時には、武藤はその後の三日間口をきいてもらえなかったらしい。真面目なサラリーマンが間違ってリングに上がってしまったような感じだが、プロレス入りのきっかけは何だったのだろうか。

実は、初めプロレスラーを目指していたのは、木戸の実兄である木戸時夫さんの方だった。時夫さんは日本プロレスに入団するも、練習中に脊椎を損傷しデビューを断念。長い闘病生活を続けたが、1977年に他界した。木戸はその闘病生活を見守るうち、「兄の叶えられなかった夢を自分が叶えてみせる」とプロレスラーになる決心をした。

1968年2月21日にプロレスデビュー。1972年3月に新日本プロレス旗揚げに参加し、藤波辰巳とともにドイツ遠征の後、アメリカに渡る。そこでカール・ゴッチと運命の出会いを果たし、「ゴッチ道場」にて骨太のレスリングテクニックを伝授された。素直に教えを吸収し、みるみる実力をつけていった木戸を、カール・ゴッチは「私のムスコ」「私の領域に一番近付いた男」と評してその後も特別に可愛がった。

帰国して新日本でのレスラー生活をスタートさせたが、ライバルの藤波辰巳がとんとん拍子で出世していくのに対し、過度な自己主張をしない寡黙な木戸は前座での試合が続き、あまり陽の目を見ることはなかった。

ほとんどのレスラーが移籍をすると人気が落ちていくものなのに、木戸だけはメジャーの新日本プロレスを飛び出してから逆に人気が出て、ファンから認められたという不思議な経歴を持っている。

1984年4月、第一次UWF旗揚げに参加。派手な大技を廃したグラウンドテクニック中心の試合展開は、木戸のファイトスタイルと見事にリンクして、ファンの間での評価は瞬く間に上がっていった。

第一次UWFの崩壊に伴い新日本プロレスに復帰すると、「キド・クラッチ」や「脇固め」を駆使してその

人気も全国区となっていったのである。

１９９０年代以降、大技が中心の派手な試合展開が当たり前になっていくが、木戸サンは頑（かたく）なにグラウンドテクニックにこだわり、相手を翻弄（ほんろう）してきた。一度は引退するが、現在はビッグマウス所属のレスラーとして相変わらず寡黙に職人芸を披露している。

タッグチーム列伝

1対1でプロレスラーとしての優劣を決するシングルマッチと違い、2対2（あるいは3対3）で戦うタッグマッチは個性とスタミナ、そしてチームワークが問われる試合形式だ。タッグのチャンピオンだからといって、各々のプロレスラーが強いとは必ずしも言い切れない。自分の欠点を補うパートナーとともに協力し合って試合を構成していくことは、そう簡単なことではないのだ。

シングルマッチでは自分も光り、相手の良さも引き立てて勝つことを求められるが、タッグマッチではそれにプラスしてパートナーの良さも引き立てなくてはならない。それができない自分勝手なレスラーはいつまで経ってもパートナーに恵まれず、真のメインイベンターとして認められない。相手を光らせてこそのプロレスなのだから、タッグマッチは一流プロレスラーになるためには避けては通れない試合形式なのだ。

ここでは「この二人が組んだら凄かった！」というタッグチームを幾つか紹介することにしよう。

ザ・ロード・ウォリアーズ

プロフィール

リングネーム	アニマル・ウォリアー
本名	ジョセフ・ラリナイダス
身長	190cm
体重	130kg

リングネーム	ホーク・ウォリアー
本名	マイケル・ヘグストランド
身長	190cm
体重	127kg

生年月日　1961年1月26日
出身　アメリカ・ミネソタ州ミネアポリス
得意技　パワースラム、ミリタリースラム

生没年月日　1958年9月12日〜2003年10月18日
出身　アメリカ・イリノイ州シカゴ
得意技　ダイビング・ラリアット

1985年3月、全日本プロレスの「激闘エキサイティング・ウォーズ」で戦慄（せんりつ）が走った。照明が落とされ真っ暗になった会場に、ブラック・サバスの「アイアン・マン」が静かに響きわたったその時、花道をリングに向かって突進する二人組の姿。サードロープ下に身体を滑らせるようにリングインし、アニマル浜口を集中攻撃。バタバタの中でゴングが鳴ったが、試合自体はあっという間に終わってしまった。

きっと全日本プロレスのファンは、これほど一方的にやられまくったアニマル浜口を観たこともなければ、これほど短い試合時間を経験したこともなかったに違いない。プロレスにおける「秒殺（びょうさつ）」という言葉はこの日生まれた。

この二人組、アニマル・ウォリアーとホーク・ウォリアーのチーム名が「ザ・ロード・ウォリアーズ」である。

ミネソタ州のごく普通の家庭で育った二人は、ミネアポリスのレスリングコーチ、エディ・シャーキーの手ほどきを受けて、1983年6月にプロレス界に入った。ただし、デビュー当時の公式プロフィールでは「シカゴのスラム街でゴミ箱をあさって育ち、ごちそうは死んだネズミだった」となっている。もちろん、これはプロレス流のおとぎ話だ。

二人とも顔に隈取り（くまど）のようなペインティングを施し、アニマルはモヒカン、ホークは逆モヒカンのヘアースタイル、映画「マッドマックス」の荒くれ者をイメージしたというスパイク付きのプロテクターを上半身にまとった姿は、まさに「暴走戦士」の異名通りだった。

日本で衝撃的デビューを飾ったタッグマッチ専門のこの二人は、全日本プロレスに一大センセーションを巻き起こした。もう強いのなんのって……試合の流れなど一切お構い無し！　嵐のように現れて、嵐のよう

に暴れ回り、嵐のように去っていった。リングに残るは瓦礫（がれき）に埋もれたような瀕死の状態の相手チームだけという有り様だった。

一時期、アニマルの負傷欠場による長期離脱の際には、新日本でホークとパワー・ウォリアー（佐々木健介）とで「ヘルレイザーズ」を結成したり、アニマル復帰後もトリプル・ウォリアーズを名乗ったりしていたが、やはりアニマルとホークのタッグチームには、別格の感があったといえるだろう。

2003年10月18日、ホークの急死に伴い、「ザ・ロード・ウォリアーズ」は事実上解散した。前人未到、WWE、NWA、AWAのアメリカ三大メジャー団体の世界タッグ王座を制覇した、史上唯一のタッグチームとして。

BI砲

※馬場、猪木のプロフィールは「スーパースター列伝」のページを参照。

全日本のエースだったジャイアント馬場と新日本のエースだったアントニオ猪木。二人はかつての日本プロレス時代、日本最強とうたわれたタッグチームだった。

このタッグチームの名前である「BI砲」は、巨人の王と長嶋が「ON砲」と呼ばれていたのにならい、本来は馬場と猪木のダブルドロップキックの呼称だったが、そのままチーム名として呼ばれるようになった。日本プロレスの看板タッグチームとして第9代インターナショナルタッグ王座を奪取、以後第10代、12代、14代と4度にわたって王座に輝いている。

チームワークを必要とするタッグチームでありながら、二人のライバル心は相当なものだったといえる。それにもかかわらず、長きに渡り世界タッグ王者として君臨できたのは、個々の実力がずば抜けていたことを表している。馬場も猪木もプロレスラーとして当時全盛期にあり、自分こそがNo.1だという自負を持っている者同士がリング内で競い合っているのだから弱い訳が無い。

この黄金タッグも1971年、ザ・ファンクスに敗れて王座から陥落したのを最後にコンビを解消。それぞれが新団体を旗揚げして袂を分かつこととなった。その後、一度だけ「プロレス　夢のオールスター戦」で再結成されたが、昔ほどの輝きは無かったのは仕方のないことだろう。

あと一度でいいから、ジャイアント馬場とアントニオ猪木の伝説の「BI砲」を観たかったが、馬場がこの世を去り、猪木がプロレスを引退した今となっては、それも叶わぬ夢となってしまった。

鶴龍（かくりゅう）コンビ

※鶴田のプロフィールは「スーパースター列伝」のページを参照。

プロフィール

リングネーム	天龍源一郎
本名	嶋田源一郎
身長	189cm
体重	120kg
生年月日	1950年2月2日
出身	福井県勝山市
得意技	53歳、パワーボム、グーパンチ

全日本プロレスのタッグチーム史上、これほど安心して観ていられたタッグチームは他に無かった。第一線を退いたエース、ジャイアント馬場を別格として、No.2のジャンボ鶴田とNo.3の天龍源一郎がタッグを組んだ訳だから、事実上の全日最強タッグチームといえる。

「鶴龍コンビ」は1983年の世界最強タッグリーグ戦で初結成されたチームだ。結成当初は格上の鶴田、

格下の天龍というイメージができあがっていて、実質は鶴田が天龍を補佐するような試合が多かった。

もちろん、天龍はそのままの状態に甘んじるような性格ではなく、密かにジャンボ鶴田に対するライバル心を燃やしていたのだから、お互いのプロレスラーとしての実力が徐々に上がっていったのもうなずける。

さらに鶴龍コンビが強くなっていく過程において、強敵となるタッグチームに恵まれたことも大きい。スタン・ハンセンとブルーザー・ブロディの「ミラクルパワーコンビ」や長州と谷津の「長州軍最強コンビ」との激闘によって、次第に天龍も鶴田と同格に扱われるまでに成長したのだ。

鶴田と同格になった天龍がその後、鶴田を追い越したいと挑戦状を叩き付けたことは、強さを追求するプロレスラーとして自然な成り行きといえる。長州力率いるジャパンプロレスが全日本プロレスを離脱して間もなく、この全日最強タッグは解消され、今度は二人による頂上対決へと移行していった。

1989年6月5日、三冠王者であるジャンボ鶴田に天龍源一郎が挑戦、直接対決が実現した。プロレスファンのほとんどが注目したこの試合は、鶴龍対決の中でも最高の名勝負と言われるほどの激闘となったが、結果、天龍が鶴田を下し第2代の三冠王者に輝いた。

鶴田を下し、全日のトップになったはずの天龍だったが、ファンのイメージはそれでも鶴田がトップというものだった。「両雄並び立たず」、悩み抜いた天龍は全日本プロレスを離脱し、名勝負とともに最強タッグチームも終焉を迎える。

今の天龍は、ジャンボ鶴田の存在無くしては語れない。お互いを認め合い、助け合い、競い合った最高のライバルであり、最高のタッグチームであった。

プロフィール

維新（いしん）軍最強コンビ

※長州のプロフィールは「スーパースター列伝」のページを参照。

リングネーム	アニマル浜口
本名	浜口平吾
身長	178cm
体重	103kg
生年月日	1947年8月31日
出身	島根県浜田市
得意技	ダイビング・エルボードロップ、ダイビング・ネックブリーカー・ドロップ、エアプレーン・スピン

長州力はその潜在能力から、基本的に（日本人レスラーなら）誰とタッグを組んでも成功を収めている。なかでもマサ斎藤との「維新軍子弟コンビ」や谷津嘉章との「長州軍最強コンビ」などは話題性もあり、安定感においても優れたタッグチームだったといえる。しかし、長州力が最も信頼し、一番輝いて見えたタッグパートナーは、何といってもアニマル浜口との「維新軍最強コンビ」だろう。

アニマル浜口といえば、「気合いだーっ!!」で有名になった強面のおっさんであり、アマレスの浜口京子選手の親父として、今ではプロレスに興味の無い人まで知っている超有名人である。

アニマル浜口は1981年の国際プロレス崩壊の後、「はぐれ国際軍団」として新日本プロレスに参戦、長州力率いる維新軍に合流し、新日正規軍と戦った。

長州力のカリスマ性と他を寄せつけないパワーファイトに対し、アニマル浜口はレスラーとしては身体も小さく、ずんぐりとした風貌から、最初はアンバランスなタッグチームに見えたものだ。しかし、アニマル浜口の男気とタッグパートナーの長州を引き立てる〝助演〟の妙技に、やがて参謀として、精神的支柱として長州のそばになくてはならない存在になっていった。

このタッグチームの最大の魅力は、何といってもツープラトン攻撃だろう。一方がパイルドライバーに抱

え上げた状態でもう一方が相手の両足を持ち、さらに勢いをつけて脳天を打ちつける荒技や、長州が抱え上げた相手にトップロープから浜口が飛んでのネックブリーカー・ドロップ、さらには相手の背中を二人そろって闇雲に叩く「太鼓の乱れ打ち」など、多くのバリエーションがあった。褒め過ぎかもしれないが、アニマル浜口無くして長州力の成功は無かったのではないだろうか。

その後、新日本プロレスを離脱したジャパン勢は、全日本プロレスに戦いの場を移し、長州もタッグパートナーを谷津嘉章に替え、勝ちに重きを置くようになっていったが、それでも浜口との信頼関係が崩れることはなかった。

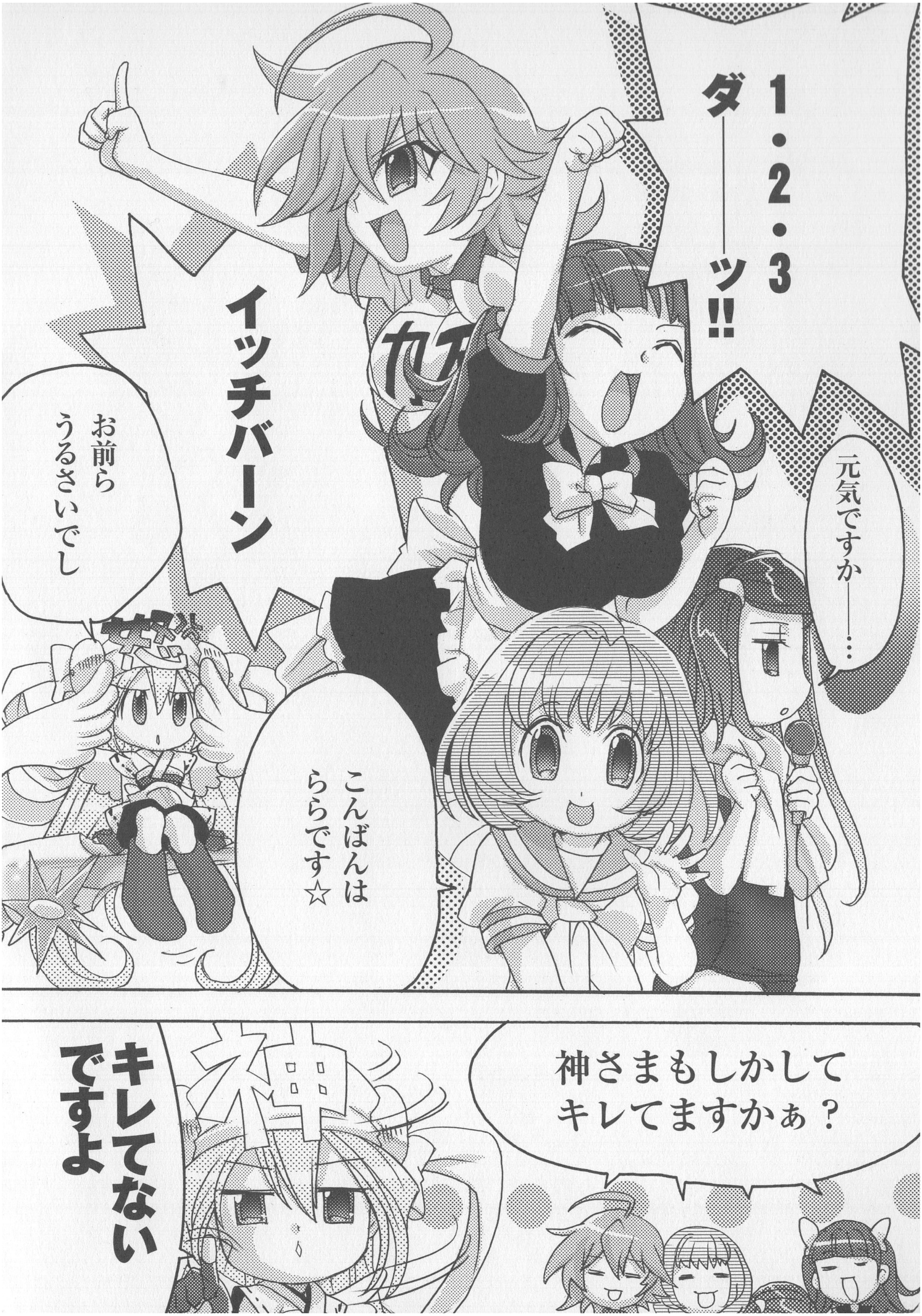
１９８７年、ジャパンプロレス分裂から新日本プロレス復帰に合わせ、アニマル浜口はプロレス界を引退する。引退時はすでに長州と浜口は違う立場に立たされ、同じマットに立つことはなかったが、培ってきた信頼関係には一片の歪みもなく、長州は声をあげて男泣きした。

その後、輝きを失う長州に「喝」を入れるために長州戦限定の復帰を果たし、ＷＡＲでＷＡＲ６人タッグ王座を獲得するが、陥落後はリングからも遠ざかり、「アニマル浜口レスリングジム」で後進の指導に当たっている。

強さ弱さを超越した名タッグチーム、維新軍最強コンビ。こんなタッグチームがあるからプロレスは面白いのである。

第五章

使える！レスラー名言・珍言集


1・2・3 ダーーッ!!
元気ですか——…
イッチバーン
お前ら うるさいでし
こんばんは ららです☆
神さまもしかして キレてますかぁ？
神
キレてない ですよ

プロレスラーの豊かな感性の証明

　ここまでお読みいただいた方は、プロレスが単純に勝ち負けのみを追求するものではない、奥深い世界であることを理解してもらえたと思う。そんなプロレスの奥深さを、プロレスラーたちが身体ではなく言葉で表現しようとする時、数々の名言が生み出される。

　リング上の闘いを通じて培（つちか）われたプロレスラーの豊かな感性は、ときに常人ではとうてい理解の及ばない領域にまで達し、ファンに対して様々な問いを投げかけてくる。とらえ方は人それぞれだ……。

人生の指針とする者、
大きく励まされる者、
思わず吹き出してしまう者
どうしても理解できない者、

　ひとつひとつの言葉を、自分なりの感性で受けとめて欲しい。そこからプロレスラーが何を考え、どう生きているのかという一端が見えてくるかもしれない。

　なお、プロレスラーの名言は数限りなく存在し、ここに記したのはそのほんの一部でしかないということはご理解いただきたい。なかにはやや信憑（しんぴょう）性に欠けるものもあるが、虚実をひっくるめて飲み込むぐらいの広い度量が、真のプロレスファンには求められるのだ。

＊＊＊＊＊＊

「あいつが強いのはチェルノブイリの放射能を微量に浴び続けているからだ」

by アントニオ猪木

〈解説〉かつてＰＲＩＤＥのプロデューサーを務めていたこともあるアントニオ猪木が、２０００年当時全盛にあったウクライナ出身の格闘家「北の最終兵器」イゴール・ボブチャンチンの強さの秘密を関係者から訊かれた際のコメント。いくら例の事故（※）から十数年経っているといったって、こんなことを公の場で堂々と言っちゃいけないと思うんだが……。もちろんボブチャンチンが強かったのは生まれ持った資質と努力のおかげなわけで、放射能の影響では絶対ない（と思う）。おそらく猪木は、ボブチャンチンにプロレス的な突拍子もないキャラクター性を与えたかったのだろう。

※１９８６年にウクライナのチェルノブイリ原子力発電所で起きた放射能漏れ事故。

＊

「あいつがくたばったら、あいつの墓に糞（くそ）ぶっかけてやる！」

by 長州力

〈解説〉１９９５年、プロレス界を何かと騒がせていたＵＷＦインターナショナルの取締役、宮戸優光（Ｕインターの頭脳と呼ばれた元プロレスラー）に対し、当時新日本プロレスの現場責任者だった長州力が放った一言。単に「糞ぶっかける」だけでも相当ヒドイ行為なのに、さらに「くたばった後の墓に」が加わる。故人の墓石の上にまたがって、鬼気迫る表情でウ●コをひり出す長州の姿を想像するだけでもゾクゾクする。ちなみに90年代屈指のドル箱企画となった新日本vsＵインターの対抗戦が始まったのは、この発言から半年後のことである。

＊

「キレちゃいないよ。キレてからが俺の勝負だから」

by 長州力

〈解説〉今となっては長州小力のモノマネ「キレてないですよ」の方が有名になってしまった名文句。新日本との対抗戦で「長州には２００％勝つ！」と豪語し、対戦前からしきりに挑発を繰り返していたＵインターの安生洋二との試合後（試合は長

州の圧勝」に、長州がバックステージで語ったコメントだ。要は本気出すまでもなかったということらしい。

＊

「入るなコラッ！ 入るな……入るなよッまたぐなよコラァ！」

by 長州力

〈解説〉1999年から始まった大仁田厚による〝長州引きずり出し計画〟において、大仁田が当時引退していた長州に対戦を直訴しに行った際、長州が大仁田に向けて放った一言。おそらくは「大仁田だかなんだか知らんが、インディーごときが新日本の敷居を軽々しくまたぐんじゃねぇ」といった意味だと推測される。しかし情に厚い長州は、その後の2000年7月、大仁田の挑発に乗るかたちで現役に復帰することになる。

＊

「目ん玉飛び出るようなストロングスタイルで、プロレス界のド真ん中を目指します」

by 長州力

〈解説〉猪木批判を行って新日本プロレスを離脱した長州力が、フロントの盟友、永島勝司らと共に2002年に旗揚げしたWJプロレスの設立記者会見で発したマニュフェスト。この「目ん玉飛び出るような」「ド真ん中」といった斬新なフレーズは、当時のプロレスファンの間でアホみたいに流行した。WJは希望に溢れた船出となるはずだったが、翌年春の旗揚げシリーズから予期せぬアクシデントが続出し、〝諸般の事情〟も重なって次々と選手が離脱、わずか2年あまりで崩壊してしまった。団体は幻となったが、この名言の価値は今に至るもいささかも損なわれていない。

＊

「もうラックリしたいよ」

by 長州力

〈解説〉ＷＪに関わる一連のゴタゴタで精神的に疲弊しきった長州が、２００３年にプロレス専門誌のインタビュー中で発した言葉。おそらくは「ラクに、ゆっくり、まったり」などを合わせた意味だと思われるが、正確な意味を知っているのは、むろん長州本人のみである。

*

「何がやりたいんだ、コラ！　紙面飾ってコラ！」（長）
「オッサン、舐めんなよこの野郎！」（橋）

by 長州力＆橋本真也

〈解説〉２００３年11月、観客動員で低迷が続くＷＪの活路をＺＥＲＯ・ＯＮＥ（当時、代表は橋本真也）との対抗戦に見出した長州が、橋本の記者会見に突如乱入した際の一幕。二人によるこの一連のやり取りは、俗に「コラコラ問答」と呼ばれる。マスコミの紙面を通じて挑発を繰り返した橋本に対し、激怒した長州が直に殴り込んできたという設定で、プロレスの因縁ドラマとしては芸術の域に達している。二人のやり取りをすべて知りたい人は、「コラコラ問答」でググってみよう。

*

「おい、きむっとぅわんコラ！」（天）
「この野郎テメエとっとと死ね！　テメエも死ねコラ！」（長）
「おいしんしゃー！　おし！」（平）

by 長州力＆蝶天タッグ＆平田淳嗣

〈解説〉２００５年秋、新日本プロレスに現場監督として電撃復帰した長州力が、ＩＷＧＰタッグ王座を狙う蝶天タッグ（蝶野正洋＆天山広吉）と、なぜかそばにいた平田淳嗣に向かってバックステージで突如ブチ切れた場面でのやり取り。吠えまくる天山はともかく、リング上のストーリーラインとはまったく関係のなかった平田は、いきなり話を振られたことで理解不明な言葉を発してしまった。プロレスラーが本気で興奮すると、常人の考えが及ばない領域に達してしまう事をよく示した一言。興味がある人は「おいしんしゃー！」でググってみよう。

*

「ブラックタイガーはセンスありますからね～」（辻）
「エディはプロレス一家だからね」（マサ）

by マサ斎藤

〈解説〉１９９０年代半ば、新日本のジュニア・ヘビー級戦線を大いに盛り上げた外人レスラー、二代目ブラックタイガーの試合で、実況の辻義就氏（現・よしなり）と解説のマサ斎藤の間で繰り広げられた一幕。マスクマンのブラックタイガーの正体は後にアメリカのＷＷＥでトップに立ったエディ・ゲレロだから、当時海外マットとの渉外役でもあったマサさんが正体を知っているのは当然……だからってオンエア枠で平然とバラすなよ……。ちなみにエディは本当にプロレスの一家の出身で、父のゴリー、兄のチャボ、ヘクター、マンドの全員がプロレスラーだ。

「解説はいつものとおり、獄門鬼（ごくもんき）*ことマサ斎藤さんです」（辻）
「獄門鬼って言わないでよ……」（マサ）

by マサ斎藤

〈解説〉「獄門鬼」とはマサ斎藤のニックネーム。若いファンには解説者として知られるマサさんだが、実はかつてのアメリカ三大メジャー団体の一つ、ＡＷＡでトップレスラーとして長く活躍していた時期がある。しかしアメリカで成功を収めたマサさん、巡業中にホテルで同室だったレスラーが暴力事件を起こし、巻き添えをくうかたちで現行犯逮捕、実刑判決を受けてしまう。マサさんはその後17か月に渡って獄中生活を送り、凶悪犯ばかりの刑務所内で囚人たちのボスとして君臨したという……。獄門鬼のニックネームはこれが由来だが、辻アナとのやり取りから察するに、シャイなマサさんはその事を本気で気にしていたっぽい。

「ここはよく目ん玉くりぬいて*見てください」

by マサ斎藤

〈解説〉先述のとおり、マサさんは約20年もの間（１９６７年～１９８６年）アメリカで暮らしていた。それが原因なのかどうか、

マサさんの日本語は明治大学出身のエリートにしてはかなりアヤしく、試合の解説ではこんなトンデモ発言もしばしばだった。この他にも「ジャンプ・ステップ・ホップ」などの名言も残している。それにしても、目ん玉くりぬいたら試合が見れなくなっちゃうでしょうに……。

＊

「これだけの小橋コールを受けられるのは小橋だけだ」

by 蝶野正洋

〈解説〉小橋とは「絶対王者」「鉄人」の異名をもつプロレスリング・ノアの小橋建太のことである。冷静に考えてみると、小橋以外のレスラーにファンが〝小橋コール〟を送ることはないわけだが……。蝶野としては本来、「今のプロレス界でこれだけ凄いコールを受けることができるのは小橋だけだ」と言いたかったのだろう。二人は2003年5月の新日本プロレス東京ドーム大会で対戦しているが、おそらくこの時の発言ではないかと思われる。

＊

「な〜にがノアだ、このクソボケが!!」

by 獣神サンダー・ライガー

〈解説〉2002年、新日本プロレスの獣神サンダー・ライガーがプロレスリング・ノアの武道会大会に殴り込んだ際、試合中にノアファンから受けたブーイングと納得のいかない試合内容に激怒して放った一言。「クソ＋ボケ」という上品このうえない単語を連発しながらバックステージの（ノアのロゴの入った）ボードを叩き壊すライガーのキレっぷりは、プロレスラーの愛社精神の鑑（かがみ）のようだった。なお、ライガーは他にも「チャンピオン連れて来い、ぶち殺してやるって」「クソかこの団体は?」などの挑発的なコメントを数多く残している。

＊

「俺たちのタッグはな、1＋1＝2じゃなくて……200だ！ 10倍だぞ10倍！」

by 小島聡

〈解説〉今でこそ新日本と全日本に袂（たもと）を分かってしまった天コジこと天山広吉と小島聡だが、かつては名タッグチームとして数々の栄冠を手にしている。そんな二人のチームとしての完成度を、小島自身が表現した言葉がこれである。1＋1＝2以上というのは良いタッグチームのたとえとしてよく使われる表現だ。その10倍となると2×10＝20になるはずだが……、天コジの場合、さらに一ケタ飛び越えて200になってしまうのである。まさに常軌を逸したチーム力といわざるを得ない。

＊

「正直、スマンかった」

by 佐々木健介

〈解説〉2001年、当時まだ新日本プロレスに所属していた佐々木健介が、PRIDEで名を上げて〝外敵〟として戻ってきた藤田和之に申し述べたお詫び。というのも、この年の春までIWGPヘビー級王者だった健介は、「ベルトを賭けてやってやる！」と藤田の挑戦を受諾していたにもかかわらず、藤田との試合前に組まれたスコット・ノートンとの王座戦にコロっと敗れてしまったのだ。健介の人柄からいって、かつての後輩に謝りたくなるのもわからないではないが……。なお、この発言はその後ネット上で流行語となり、ひと皮むけた健介本人も現在は「ネタ」として使っている模様。

＊

「ヴァーッ!!」

by 佐々木健介

〈解説〉佐々木健介が感情の高ぶりを抑えられなくなったときに発する魂の叫び。2002年1月4日の新日本プロレス東京ドーム大会で、小川直也との対戦が不完全決着のノーコンテストとなり、試合後のコメントで発したものが最初とされる。この〝言葉には表せない魂の叫び〟がファンに与えた衝撃はかなりのもので、現在ではファンが健介を語る上で欠くことのできないフレーズとなっている。苦しさや切なさを思うように表現できないとき、ぜひ声に出して言ってみよう。男子はくれぐれも「アーッ！」と発音しないように注意。

＊

「助けてママ！」

by 中嶋勝彦

〈解説〉健介ファミリーの一員であり、最近は全日本プロレスの世界ジュニア王座を奪取するなど、レスラーとしての成長も著しい中嶋勝彦。だが、2004年にDDTマットで組まれた男色ディーノとの試合では、この日本マット界史上初のホモレスラーに若い肉体（当時16歳）をさんざんに弄（もてあそ）ばれる結果となってしまった。この試合で中嶋は何度もレフェリーにギブアップを伝えるが、レフェリーはこれを認めず、一縷（いちる）の望みを託して発した叫びがこの「助けてママ！」である。プロレスはエンターテイメントともいわれるが、この一言は明らかに、それを越えたところから発せられているようだ。誰がこの少年を責めることができようか。

*

「日本中の爆弾かき集めてこいって!!」

by 越中詩郎

〈解説〉このぶっそう極まりない発言は、過激派のテロリストではなく、最近お笑い芸人ケンドー・コバヤシの尽力もあってプチブレークした侍・越中詩郎のものである。2003年3月のWJプロレス旗揚げ戦で大仁田厚と電流爆破マッチで対戦することになっていた越中は、その二週間前、神奈川県鎌倉の海岸で強化合宿に望んでいた。この情報を聞きつけた大仁田は、電流爆破を甘くみる越中を震え上がらせるため鎌倉へ急行、砂浜にパイナップルと大がかりな爆破実験装置（！）を設置して越中を待ち構える。ランニング中の越中の姿を確認すると、スイッチON、パイナップルは轟音とともに跡形もなく砕け散った。だが、大仁田の思惑は大ハズレ。越中はこの光景に震え上がるどころか、さらなる闘志をかき立てられ、「こんなもんか？　小学生の爆竹以下だ！」と吠えた後に冒頭の台詞を言い放ったのだ。あっぱれ、侍魂！　ちなみにこの試合に投入された火薬は、長州の復帰戦となった2000年7月の電流爆破マッチの240％にも上る量だったという…。

*

「死ね、エロ社長！」

by 高山善廣（よしひろ）

〈解説〉プロレス界では、現役もしくは引退したプロレスラーが団体の代表（社長）を務めるケースがほとんどだ。業界のルールや業界内における知名度など、ビジネス上の要因が大きいのだろうが、この状況、冷静に考えてみるとなかなかスゴイ。なにしろ社員は、いざ仕事（リング上の試合）となれば、相手が社長であろうが思いきりブン殴った方が勤務評価が上がるのだ。そのうえ、こんなエゲツない台詞を吐こうと何ら懲罰（ちょうばつ）を受けることはない。観客が喜べばOKなのだ！　居酒

屋でネチネチと上司の文句を垂れているサラリーマンとはわけがちがう。ちなみに高山の言う「エロ社長」とは、プロレスリング・ノアの代表取締役社長であり、若かりし頃は「エルボーの貴公子」とも呼ばれた三沢光晴のことである……、かつての貴公子も今じゃエロ社長だ。

＊

「お前、何も言わねえんだったらあっち行けオラ！」（高）
「お前、仕事しねえんだったら帰れオラ！」（大）
（三沢＆小川組には初めての勝利ですが？）
「もう、今さら遅えっ！　バカ野郎！」（大）（高）

by ノー・フィアー

〈解説〉２０００年５月、旧体制の全日本プロレス最後の武道館大会となった「世界最強タッグ決定ワンナイト・トーナメント」において、１回戦を突破したノー・フィアー　大森隆男＆高山善廣（よしひろ）の二人が試合後にインタビューを受けた際の一幕。このインタビュー、担当アナウンサーがまだ新人だったのか、控え室に引き揚げる二人を遠巻きから怖そうに眺めるだけで一向に質問をしてこない。その〝やる気のない勤務態度〟に、サラリーマン経験のある数少ないプロレスラーの一人である高山と、誰もが認める良識派プロレスラー大森が激怒。〝社会人の先輩〟として厳しくこれを叱責した。プロレスラーというと一般的な社会通念がない人たちというイメージを抱きがちだが、職種にかかわらずプロ意識の有無にはかなり敏感なようである。

＊

「今からお前たちを殴る！　この痛み、悔しさを覚えておけ！」

by 大森隆男

〈解説〉２０００年の全日本退団後、ノア、ＷＪと波乱の経歴を重ねてきた大森隆男は、ようやくＺＥＲＯ・ＯＮＥ　ＭＡＸに落

ち着いた。その大森が、２００５年11月、自身のステップアップと若手レスラー育成のために立ち上げたユニットが「アックスボンバーズ」である。このアックスボンバーズ、所属の違う他団体の4選手を生徒に迎え、大森が熱血教師ばりのアツい指導を行うというもの。ちなみにユニット名は大森の得意技アックスボンバーにちなんで名付けられた。この一言は、ユニット結成直後に組まれた試合でふがいない戦いぶりをみせた生徒たちを集め、試合後の控え室で大森が頬（ほお）を張ったときに発したもの。ある年代以上のファンなら思わずグッときてしまう台詞である。4人の頬を張った大森は、その後全員で円陣を組んで結束を誓いあった。なお、生徒の一人は後に自身のブログでこのように記している。

「こんな僕らを突き放さず、逆に手を差し伸べてくれる大森選手に涙がこぼれそうになった。これで僕はアックスボンバーズでがんばって行く気持ちが固まった！」

＊

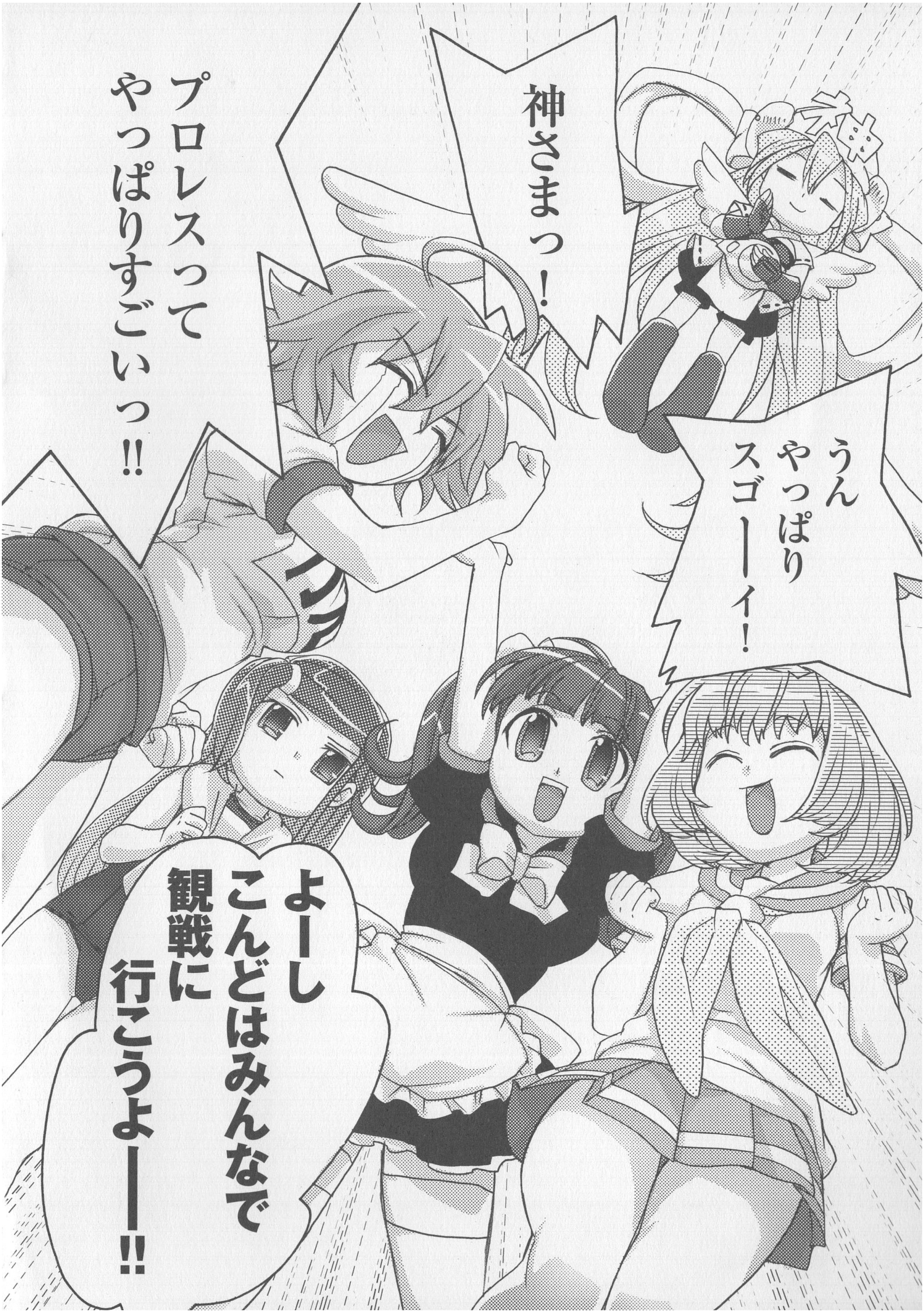
「何年選手だと思ってるんだ！　蹴り殺すぞ、コラァ！」

by ザ・グレート・サスケ

〈解説〉東北の英雄、ザ・グレート・サスケがプロレスラーとして全盛期にあった頃の名台詞。１９９７年5月3日、新日本プロレス大阪ドーム大会の10人タッグマッチの試合後、各チームの控え室でコメント録りが行われた。この席上、サスケは対戦チームの一人だった金本浩二に対し、本来の明るいキャラからは想像もつかない激しい怒りを露わにした。ここで注目したいのは、〝蹴り殺す〟と言ったにもかかわらず、直後にサスケが凄い勢いで〝ジャドーボクシング〟を始めたこと、そして格下を相手にするような発言内容とは裏腹に、金本のデビューがサスケと同じ年（厳密にはサスケの方が半年ほど早い）で、年齢では3歳上だったことである。しかし、そんなことがどうでもよくなるほどグレートなキレっぷりだったことは確かだ。なお、この台詞は現在みちのくプロレス出身のＧａｍｍａが勝手に受け継ぎ（サスケ本人に向かって言ったこともある）、彼のキャッチフレーズとして主戦場であるドラゴンゲートのファンに親しまれている。

第六章

観戦に行ってみよう！


神
神さまっ!
うん やっぱり スゴーーイ!
プロレスって やっぱりすごいっ!!
よーし こんどはみんなで 観戦に 行こうよーー!!

ドッ
ワァ

ライブ観戦の魅力とは？

プロレスの何たるかを学んだところで、いよいよ実践編へと入っていこう。そう、直接会場へ足を運んでの観戦だ。

試合会場でのライブ観戦は、当然のことながらテレビや雑誌では得られない臨場感、プロレスラーや他のファンとの一体感を得ることができる。また第一試合からメインイベントまでを通して興行全体の流れを感じることができるのも、ライブ観戦ならではの魅力だ。

日本のプロレスでは、第一試合は主に新人レスラーが務める事が多い。新人同士の意地の張り合いは、技術は未熟でも、将来のメインイベンターを目指して一生懸命に取り組む情熱にあふれている。ここで注意して、末永く応援できる新人レスラーをチェックするのもいいだろう。

また序盤の試合では、ベテランの中堅レスラーと新人レスラーの試合も見逃せない。経験豊富な中堅レスラーが新人レスラーの高い壁となって大きく立ちはだかる。中堅レスラーにとっては「こんな小僧には負けていられない！」という意地があり、新人レスラーには「こいつに勝たない限り上には行けないんだ！」という危機感がある。

大抵の新人レスラーは子供扱いされ、ボロボロにされて終わるのが常だが、次第にリングでの経験を積み、努力する新人レスラーがその壁を突き破って勝利する時がくる。そんな時は、歴史の目撃者にでもなったかのような興奮を覚えたりするものだ。

そして試合は進み、タッグマッチやジュニア・ヘビー級の試合を経て、観客がヒートアップしてきた頃、次代を担うスターレスラーが登場し、外国人レスラーや実力者との絡みでセミファイナルが行われる。コアなファンにはこのセミファイナルの方が面白いという者もいて、その通りスピード、パワー、スタミナの三

拍子揃ったイキのいい旬のレスラーが凌（しの）ぎを削る。

そしていよいよメインイベントでは団体のトップレスラーが登場。会場の熱気も最高調となり、手に汗握る熱戦を繰り広げていく。

ここまでの流れでわかるのは、プロレスの興行は全試合を通じて徐々に観客の熱気を盛り上げていくように構成されているということ。序盤に新人レスラーの情熱を感じ、中盤で優れたテクニックやスピード感あふれる攻防に目を見張り、終盤のセミファイナルで気持ちはヒートアップし、メインイベントで頂点に達する。

こうした構成が巧くできる団体は、観客も満足して会場を後にし、また観に来てくれる（リピーターになる）という訳だ。しかし、これはあくまで一般論であり、決してその通りの展開がベストとはいえないのもプロレスの奥深さだ。

各団体のカラーを知る

プロレス団体には大きくメジャーとインディーという二つの分け方がある。メジャーは古くから団体を維持し、老舗（しにせ）としての安定感を持ち、マスコミやメディアへの露出も多い。一般的には新日本や全日本、新興ではあるが全日イズムを正しく継承するプロレスリング・ノアなどがそれに当たると言えるだろう。

それ以外の団体は一般にインディーと呼ばれ、テレビはもちろん新聞にも雑誌にも露出が少ない。しかし侮（あなど）るなかれ、インディーならではの試合形式、試合展開はメジャーのそれにも負けないインパクトとサプライズがある。またインディーに所属するレスラーの中にも、メジャーの選手以上の才能と実力を持った逸材が数多くいる。

どちらも特色を押さえて観戦することにより面白さも倍増、いろいろなジャンルのプロレスを楽しめると

いう訳だ。

ただし、100近い団体が乱立している現在、すべてを網羅（もうら）しようとするのは不可能に近いし、これから実際に観戦してみようという皆さんの混乱を招く事も考えられるので、ここでは主だった団体をピックアップし、それぞれの団体カラーを紹介していくことにする。

新日本プロレス

（正式名称／新日本プロレスリング株式会社）

プロレス業界の盟主といわれる最大手。設立は1947年1月13日、アントニオ猪木を代表取締役に発足。設立当初からストロングスタイルを標榜し、プロレス最強軍団を自負する。

認定タイトルは「IWGP(International Wrestling Grand Prix)」を冠としたヘビー級、タッグ、ジュニア・ヘビー級、ジュニア・タッグ、U-30無差別級を設けている。

またIWGPが防衛戦スタイルで保持される中、これとは別に年に一度、真夏のVロードを戦い抜く「G1クライマックス」という新日最強戦士を決めるリーグ戦（またはトーナメント戦）が行われる。レスラーにとっては、このG1クライマックスの優勝も非常に大きな名誉となる。

新日本プロレスを観戦する場合、トーナメント戦がカードに組み込まれた興行がお勧めだ。通常はシリーズで展開され、本隊（正規軍）とそれ以外のユニットの抗争劇が見所のひとつ。

全日本プロレス

（正式名称／全日本プロレスリング株式会社）

日本マット界において一時代を築き上げた老舗（しにせ）団体として、その権威は未だ健在である。

1972年、ジャイアント馬場が理想のプロレスの実践のために設立し、ジャンボ鶴田、天龍源一郎、三沢光晴、川田利明ら日本人スターを輩出。アメリカマット界（NWA、AWA）との強固なネットワークによ

り、ザ・デストロイヤー、ブッチャー、ザ・ファンクス、マスカラス、ブロディ、ハンセンなどの外国人トップレスラーを招聘（しょうへい）し、「明るく・楽しく・激しい」プロレスを繰り広げ大人気となった。

　ジャイアント馬場の死後、馬場の妻・元子夫人と所属レスラーとの確執によりレスラーが大量離脱。その存続が危ぶまれたが、残った渕正信、川田利明の頑張りや、2002年に新日本プロレスから移籍した武藤敬司が社長となってからは人気レスラーが集結。新コンセプト「明るく・楽しく・激しく・新しい」プロレスを掲げ、かつての勢いを取り戻しつつある。

　「パッケージ・プロレス」を提唱する武藤社長だけに、興行全体に安定感があり（つまりハズレ試合が少ない）、これからプロレス観戦を始めようとする人にはお勧めだ。

プロレスリング・ノア（正式名称／株式会社プロレスリング・ノア）

　2000年6月、ジャイアント馬場亡き後の全日本プロレスの体制に不満を抱いた三沢光晴（当時代表取締役社長）を中心としたプロレスラー、スタッフ、社員など、総勢50人にも及ぶ大量離脱劇によって旗揚げされた。

　その際、メジャー団体に必要不可欠なテレビ放映枠（地上波）も全日本プロレスから移行したため、全盛期の全日本プロレスの流れを汲むという点では、こちらの方が現在の全日本プロレスより「王道」といえるかも知れない。

　リング上は三沢光晴、小橋建太、秋山準などのトップどころの脇を、丸藤正道（なおみち）、KENTAといった新世代スターが固め、プロレス界一の安定感を誇る。現在、武道館大会を定期的に行えるのはノアだけということも、それを証明している。

　試合では過激な攻めと受けの美学を巧みに操り、流れるような試合展開の中にも観る者を飽きさせないインパクトがある。老若男女（ろうにゃくなんにょ）、誰が観ても楽しめる、わかりやすさがノアの最大の魅力である。

ドラゴンゲート（正式名称／株式会社ドラゴンゲート）

２００４年に闘龍門（とうりゅうもん）ＪＡＰＡＮから名称変更し、現在のドラゴンゲート（通称：ドラゲー）となった。所属レスラーの大半がウルティモ・ドラゴン（浅井嘉浩（よしひろ））が設立したプロレスラー養成学校・闘龍門の出身で、年代もほとんどが20代というイキのよさがウリの団体である。

ルチャ・リブレの華麗なスピード感とアメリカン・プロレスのエンターテイメント性を融合させた独自の試合展開は、インディーの中でもピカ一のレベルを誇る。ただし、身長１８０㎝以下、体重80㎏前後と、ジュニア・ヘビー級よりひと回り小さいレスラーが中心なので、メジャー団体のレスラーにある並外れた体格とパワーは控えめ。

しかし、それを補って余りあるエネルギーを感じることができるのも事実。プロレスには珍しく（？）会場は女性ファンで埋まり、試合のクライマックスには黄色い声援が飛び交う。

ドラゴンゲートは２００７年現在、日本で最も興行数の多い団体であり、既存のプロレスファンだけでなく、プロレスを知らない、もしくは好きでない層をターゲットにファンを拡大していった姿勢は、まさにインディーの新星といえる。

ＤＤＴ（ドラマティック・ドリーム・チーム）（正式名称／有限会社ＤＤＴプロレスリング）

高木三四郎らが中心となって１９９７年に旗揚げされた、良きインディーの見本ともいえる団体。アメリカのＷＷＥに範をとったエンターテイメント性に重点を置きつつ、ときには新日本プロレスのようなストロングスタイルの試合もやってのける器用さがウリ。

とにかく、小難しい理屈を無視して思いっきり楽しみたいならお勧めの団体だ。団体名の通り、全てがド

ラマティック！　リングネームも含め、レスラー全員が素晴らしいタレント揃いで、女子レスラー、レフェリー、フロント、果てはレスラーの奥様までがリング上でドラマを繰り広げる。社長交代劇やホラー、ヒーロー、シリアス……などなど、次々と放たれる奇抜なストーリーにファンはついて行くのがやっとだ。

しかし、単なるお笑い系と侮るなかれ。他団体へレスラーを派遣した際には、ＤＤＴのレスラーはきっちりと試合を盛り上げ、自分の役割をこなす。レスリングの基礎は確かなもので、「デスマッチだけがインディーのウリじゃない」ことを実践している。

観戦を終えたファンがみな笑顔で帰っていく姿からも、こんな団体こそもっともっとみんなに知って欲しいものだと思う。

大日本プロレス

（正式名称／大日本プロレスリング興業株式会社）

1995年、元全日本プロレスのグレート小鹿が旗揚げした、ある意味で究極のプロレス団体。この団体の凄いところは、本気でデスマッチのメジャー化を目指し、取り組んでいる姿勢だ。

過去十数年に渡ってありとあらゆるデスマッチ方式を再現、または開発し、文字通りの〝死闘〟を繰り広げている。蛍光灯や有刺鉄線はもちろん、剣山（けんざん）、画鋲（がびょう）、火炎、サボテン、レモン、塩……。ダイレクトに痛さが伝わり観る者も鳥肌が立つような凶器から、思わず吹き出してしまうようなユニークなアイテムを駆使し、あらゆる手段を使って試合を盛り上げる。「なにもそこまでしなくても…」という行き過ぎの感さえあるが、真剣にデスマッチと向き合うレスラーたちの姿は清々（すがすが）しくもある。

2005年に子会社「レスラーズ運輸」を設立。引っ越し代行サービスで一人暮らしの女性に大人気となる。その中で面白いのは「蛍光灯無料引き取りサービス」、もちろん引き取った蛍光灯はデスマッチの凶器としてリサイクル（?）されている。

王道の真逆をひた走る大日本プロレス。強い個性をもった団体だが、ファンサービスに熱心なことでも有

名だ。一度観戦してみたら、ひょっとするとハマってしまうかもしれない。

みちのくプロレス

（正式名称／みちのくエンタテインメント有限会社）

ご存知、東北の英雄「ザ・グレート・サスケ」が1993年に旗揚げした、東北六県を中心に興行を行う「地域密着型」のインディー団体である。

地域密着型とうたっているにもかかわらず人気は全国区！　それもそのはず、所属レスラーはルチャを下地としたテクニシャン揃いで、初めての観戦でも満足すること間違いなし。旗揚げ当初はTAKAみちのくやスペル・デルフィン、四代目タイガーマスク、ディック東郷なども所属していて、テクニシャンの宝庫みたいな団体だった。現在は義経らが新世代のエースを目指し、東北各地で奮闘を続けている。

2003年にはサスケが岩手県議会議員に当選、会長に退いた。新崎人生が代表取締役に就任すると、サスケとの仲違いで離脱し大阪プロレスを旗揚げしたスペル・デルフィンとの提携も開始、インディーには珍しく安定経営を行っている。

他と違って観戦の機会がそう多い団体ではないため、近くで興行があるならぜひ足を運んでおきたい。

パンクラス

（正式名称／株式会社ワールドパンクラスクリエイト）

「秒殺」という流行語まで生み出したパンクラスは、1993年、藤原組を円満離脱した船木誠勝と鈴木みのるが中心となって旗揚げされた。

「ハイブリッド・レスリング」をスローガンに掲げ、真剣勝負、完全実力主義を標榜（ひょうぼう）。鍛えられた理想的な筋肉美を持つレスラーたちによるハイスパートな試合展開は、コアなプロレスファンや格闘技ファンを魅了し、人気を博した。しかし、グラウンドによる展開は防御が中心となるため、一般のファンにはわかりにく

く、大ブレークするまでには至っていない。

2000年にエースの船木がヒクソン・グレイシーに敗れて引退すると、パンクラスは道場対抗戦へと方向転換を図り、格闘技としての色合いをますます濃くしていったが、プロレス独特の曖昧さを完全に払拭することができず、須藤元気や美濃輪育久などの人気レスラーは新天地を求め離脱している。

「真剣勝負の負けないプロレスをやってみたらこうなりました」という感じのパンクラスだが、一部のファンには絶大な支持を得ているのも確か。ありきたりのプロレスに面白みを感じることのできない人は、一度試合を観てみるといいかもしれない。

イノキ・ゲノム・フェデレーション（IGF）

（正式名称／イノキ・ゲノム・フェデレーション株式会社）

2007年3月に設立された新団体。ご存知、燃える闘魂・アントニオ猪木によって旗揚げされた。旗揚げ戦の「闘今BOM・BA・YE」は話題性といい対戦カードといいインディーの域をはるかに越えており、メジャー団体でも実現不可能な興行となった（カート・アングルとブロック・レスナーの試合なんて奇跡に近い快挙である）。

これから猪木氏がどんな仕掛けをしていくのかとても楽しみだが、ここではそのヒントとなる猪木氏の起業挨拶を引用して紹介しておく。

「戦後、力道山は心を打ちひしがれた日本国民に、生きる〝勇気と希望〟をプロレスというものを通じて与えてくれました。そして、私も師匠・力道山の遺伝子を引き継ぎ、プロレスを通じて国民に〝元気〟を与えてきました。いつの時代も、プロレスが国民にそして世の中に貢献して参りました。そして、今この時代、プロレスは一体何をすべきなのか!?　私は自問自答しました。元気がなく、夢と希望を持てなくなった時代だからこそ、プロレスがもう一度元気を取り戻し、日本にそして世界にその元気を発信していかなければな

らない。誰もが一歩踏み出す勇気を持てなくなってしまった時代に、一歩踏み出す勇気を与えなければいけない。プロレスにはそれだけの役割と責務がある。もう一度、この遺伝子を継承しなくてはいけない。これが力道山ゲノム、猪木ゲノムであり、IGFの理念であります。イノキ ゲノム フェデレーション株式会社代表取締役社長 アントニオ猪木」

健闘を祈ります。

その他の主な団体

先に紹介した以外にも、ZERO1・MAX、IWA・Japan、格闘探偵団バトラーツ、大阪プロレス、無我ワールドプロレスリング、リアルジャパンプロレス（真日本プロレス）……などなど、活動中の団体は数多く存在するが、地域限定の団体（みちのくプロレス、大阪プロレスを除く）、女子のみの団体、自主興行が困難な団体、スターレスラーの存在しない団体は割愛させていただく。

さらに、個人的に大好きな西口プロレスのようなお笑いとプロレスのコラボレーションとしての成功例もあるが、本人たち自身が「シャレ」と言っていることから、ここではあえて外している。

プロレスは「何でもあり！」が信条。あらゆる団体の興行に出かけてみて、自分だけのブームとして楽しむのもいいかもしれない。

団体認定王座とベルトについて

プロレスが闘いによってレスラーの優劣を決めるものなら、「その中で、誰が一番強いんだ！」ということを明確にしておかなければならない。逆に言えば、一番強いヤツこそ団体のトップであるともいえる。

どのレスラーも団体のトップを目指し、毎日の厳しい練習に耐えている。チャンスをモノにしてチャンピオンの座につくことを虎視眈々（こしたんたん）と狙っているのだ。そのトップの証（あかし）といえる王座とチャンピオンベルトについて知っておくことは、彼らの強さを知るうえでも大きな参考となるだろう。

歴代の名レスラーたちがいかにして防衛を重ね、そして敗れたのか……。団体数が多いので、ここではメジャー団体の認定王座に限って紹介するが、もし興味が湧いたなら、インディー団体の王座もいろいろ調べてみよう。なかには意外と長い歴史があったり、バカバカしいくらい権威のない王座があったりして面白いものだ。

IWGPヘビー級王座

新日本プロレスの象徴とされ、団体において最も権威あるタイトルである。

初代IWGPヘビー級王者は1987年に戴冠（たいかん）したアントニオ猪木だが、IWGP（International Wrestling Grand Prix）自体は1980年代初頭に猪木が提唱した「プロレス界における最強の男を決める」という計画が基となっている。

当初の予定では、日本でグランプリ開幕戦を行い、韓国、中近東、ヨーロッパ、メキシコとサーキットし、決勝戦をニューヨークで行うという、まさしく世界規模のプロレスイベントだったが、各地区にチャンピオンが存在するため、地区プロモーターからの大反発に会って頓挫（とんざ）。結局は新日本プロレス内のリーグ戦というかたちでスタートしている。

記念すべき第一回リーグ戦の勝者は、アントニオ猪木を失神KOで破ったハルク・ホーガン。このIWGPのリーグ戦は毎年行われたが、当初の「グランプリ形式でその年の最強を決める」という目的から逸脱（いつだつ）した感は否めず、第五回大会の勝者、アントニオ猪木を初代チャンピオンにすることで、その後は防衛戦形式の王座として存続していった。

経緯はどうであれ、メジャー団体・新日本プロレス最強レスラーの証として現在もその輝きが失せることはなく、防衛戦にかたちを変え、世界中の強豪挑戦者たちと熱い闘いを繰り広げている。

三冠ヘビー級王座

三冠ヘビー級王座の「三冠」とは、力道山ゆかりのインターナショナル・ヘビー級王座、日本プロレス時代にアントニオ猪木がもたらしたユナイテッドナショナル（UN）ヘビー級王座、ジャイアント馬場が全日本プロレス旗揚げ後に認定したパシフィック・レスリング・フェデレーション（PWF）ヘビー級王座の総称で、全日本プロレスを象徴する偉大な王座である。

それぞれのベルトの存在自体が日本のプロレス界の歴史そのものであり、国宝級の王座であることに疑いの余地はない。1988年と1989年に各チャンピオン同士による統一戦が行われたが決着が着かず、結局、最初の三冠王座に輝いたのは1989年4月18日、対スタン・ハンセン戦において片エビ固めでフォール勝ちしたジャンボ鶴田であった。

それ以降はこの三冠ベルトをめぐって鶴田、ハンセン、天龍に四天王（三沢光晴、川田利明、田上明、小橋建太）らが加わって激闘を繰り広げ、ベルトの権威をさらに高めていった。

なにせこのベルトを腰に巻くということは、全日本最強であることの証明になるのだから、〝至宝〟のベルトを求めて、現在も多くのプロレスラーが団体内外でシノギを削っている。

ちなみにジャンボ鶴田による三冠統一後、団体内からベルトを一本に絞ろうという意見も出たが、ジャイアント馬場は頑として三本のベルトにこだわった。ベルトの一本一本には過去にそれを保持したレスラーの血と汗、そして思い出が染み込んでいる事を誰よりも知っていたからだ。

IWGPのベルト（王者ではない）が現在4代目と新しいのに対し、三冠ヘビー級のベルト三本は骨董（こっとう）品のように古めかしい。だが、それこそが日本のプロレスが刻んできた歴史なのである。

資料編

プロレス用語集
&公式ルール

特別付録① プロレス用語辞典

あ行

【アマチュア・プロレス】
プロレスラーではない素人がプロレスをすること。学生プロレスや社会人プロレスなど。ひと昔前までは真っ当なプロレスファンからイロモノ視されていたが、最近は学生プロレス出身のプロレスラーも登場し、徐々に認知されてきた。試合自体は結構ハイレベルで、中にはプロより面白い試合もある。

【アマレス】
アマチュア・レスリングの略。メジャー団体のトップレスラーには学生時代にアマレスでならした選手が多い。

【アングル】
「仕掛け」の意。プロレスはショービジネスの側面も持つため、各レスラーにストーリーライン上の役柄や個性を与えることが多い。軍団抗争や仲間割れもアングルの一つで、そういったストーリーがあるからこそ観客も試合に感情移入しやすくなる。

【アンコ型】
相撲取りのようなでっぷりした体型のこと。単なるデブではない。プロレスではスタミナや受け身をとる上である程度の脂肪があった方がいいといわれるが…、真偽は不明。

【異種格闘技戦】
「プロレスこそ最強の格闘技」を証明するためにアントニオ猪木が仕掛けたプロレスラー以外の格闘技選手との戦い。猪木戦で有名なものは対モハメド・アリ戦や空手のウィリー・ウィリアムス戦、柔道のルスカ戦が

ある。

【イス】

プロレスにおけるイスは、観客席という意味とは別に、凶器としての意味をもつ。凶器として使用する場合は折り畳んで使うことが望ましい。

【いぶし銀】

地味だがテクニシャンの渋いレスラーをこう呼ぶ。普段は地味に黙々と試合をこなしているが、本気になったらエース級の強さを持つ。

【イリミネーションマッチ】

大人数でのチーム対抗戦に適した試合形式。通常のタッグマッチはチームの誰か一人がフォールかギブアップした時点で勝負が決するが、この試合形式ではフォールやギブアップ、またはトップロープを越えて場外に落とされた（オーバー・ザ・トップロープ）レスラーが失格となり、どちらかのチームの人数が0になるまで試合が続行される。軍団抗争の決着戦などに用いられる事が多い。

【インサイドワーク】

プロレス特有の反則カウントの曖昧さの裏をかいた戦術。レフェリーのブラインドをついた目つぶし、ロープやコーナーポスト、エプロン等を使って巧みに相手を攻撃する。

【インディー】

「独立」「中立」などの意味を持つ自主興行をしている比較的小規模の団体を指す。大仁田厚がＦＭＷ創設時にインディー団体と呼んだことから一般的になった。

【売り興行】

団体が各地のプロモーターに一興行いくらで買い取ってもらう興行形態のこと。金額の相場はあるが、団体にとっては当日の客入りが少なくとも相応の利益が見込めるので、地方巡業におけるリスク回避の手段として使われる。売り興行に対し、団体自らが主催する興行形態を「手打ち」と呼ぶ。

【エキシビジョンマッチ】

公式な勝敗を決めずに行われる模範試合。引退試合のような特別な意味を持つ場合は、引退するレスラーに敬意を表してエキシビジョン形式で行われることが多い。

【エプロン】

リング上のロープより外側の部分の名称。タッグマッチでは待機するレスラーがエプロンで交代を待っている。下は鉄骨でマットが敷かれていないため、エプロン上で頭を打ちつけるような攻撃はかなり危険。

【落とす】

頸動脈などを絞めて相手を失神させること。プロレス技のスリーパー・ホールドでは首自体を絞めるのは反則なので、頸動脈を絞める。

【オープンフィンガーグローブ】

本来は総合格闘技用に開発された指がむき出しになったパンチ用のグローブ。指が自由になるため関節技にも対応できる。

か行

【ガチンコ】

真剣勝負の意。プロレスの奥深い魅力と相反する試合形式だが、レスラーの目の色が変わる戦いは新鮮だ。「セメント」や「シュート」といった呼び名もある。

【カード】

レスラー同士の対戦の組み合わせのこと。カードを決めることをカード編成という。

【カット】

タッグマッチなどで試合権利のある味方のレスラーがカバー（フォール）された際、3カウントを阻止するために、控えのレスラーがリング上に入って攻撃すること。

【金網デスマッチ】

数あるプロレスのデスマッチのなかでも最も知名度が高いデスマッチ形式。リングの四方を高さ４ｍ以上の金網で囲んで試合が行われる。金網デスマッチでは通常の試合と同様の決着方法に加え、金網から先にエスケープとした方が勝者となる。また金網自体も凶器として使うことができる（反則にはならない）。

【カバー】

押さえ込みのこと。プロレスは押さえ込まれて両肩がマットについて3カウントで勝負が決まるため、相手も必死で返そうとする。「フォール」ともいう。

【噛ませ犬】

売り出し中のスター候補レスラーの知名度を上げるため、簡単に勝てる相手、もしくは負けることを義務づけられた相手レスラーのこと。「ジョバー」ともいう。

【関節技】

サブミッション。相手の関節を伸ばしたり捻（ひね）ったりする（極める）ことでダメージを与える技の総称。ダメージとは裏腹に地味な印象がある。

【ギブアップ】

「まいった！」「降参」の意。レフェリーに声で直接伝えるか、マットや対戦相手の身体を叩く（タップ）ことで意思表示する。

【ギミック】

プロレスファンが感情移入しやすいように設けられたレスラーの仮のキャラクターのこと。「テキサスでカウボーイをしていた」「●●刑務所を脱走してきた」など、レスラーの個性を伝えて観客のイメージを操作する。

【極める】

関節技をかけて相手を逃げられない状態にすること。

【キャリー】

試合の流れをリードし引っ張っていくこと。経験豊富なベテラン選手も、新人と戦う際にキャリーしてやらないと相手の良さを引き出せない。

【グラウンド】

試合中に寝た状態で戦うことを指す。お互いが寝た状態で関節を取り合うことをグラウンドの攻防と呼んだりする。反対に立った状態で戦うことをスタンドと呼ぶ。

【グリーンボーイ】

キャリアの短い新人選手のこと。日本語の〝青二才〟というニュアンスに限りなく近い。

【軍団抗争】

プロレスのドラマ性を盛り上げるための定番の手法。複数のレスラーからなるユニット（軍団）同士が一定期間に渡って抗争を繰り広げる。カード編成のバリエーションが飛躍的に増えるため、シリーズ形式で行われる日本のプロレスではとても重要。

【ケーフェイ】

プロレス界に関わる人間が犯してはならない暗黙のルールや、関係者以外に漏らしてはいけない秘密の決まり事のこと。

【コーナー】

リング四方の鉄柱（コーナーポスト）のあるところ。試合前には基本的に赤コーナー側にチャンピオンや格上のレスラーが位置し、対面にある青コーナー側に格下やキャリアの短い新人レスラーが位置するが、その時々で変化する場合もある。

【ゴング】

試合の開始または終了を告げる鐘。通常はリングサイドの本部席に置かれている。ゴングが鳴る前の奇襲はヒールレスラーの常套（じょうとう）手段であり、試合中も凶器として使われる場合がある。またレスラーが亡くなった場

合、追悼のために10回連続でゴングを鳴らす「テンカウント・ゴング」というセレモニーが行われる。

さ行

【サーキット】

巡業のこと。最近は日本全国をサーキットできる（企業体力のある）団体がごく一部になってしまった。

【サミング】

目潰し攻撃。主にヒールのレスラーが多用する。もちろん反則だが、レフェリーの死角になるように繰り出す。

【実況席】

試合が何らかの形で映像化されて発信される場合に、リングサイドに設けられる実況解説用の席。実況担当のアナウンサーと解説者（引退したレスラーなど）がテーブルに面して座っているが、プロレスでは場外乱闘の舞台になることもしばしば。

【ジュース】

流血を意味するスラング。流血戦は迫力満点で異常な盛り上がりをみせる。

【しょっぱい】

納得のいかない、つまらない試合やレスラーのことを指す形容詞。観客とシンクロできない試合展開やレスラー同士がスイングしない試合は途端にしょっぱくなる。

【シリーズ】

興行のまとまりのこと。プロレス団体は「●●シリーズ」などと銘打って数週間ごとの単位で各会場をまわって興行を行う。これによりシリーズ中の興行で行われる各試合は〝点〟ではなく〝線〟としてつながる。また外国人選手のギャラはシリーズ単位または週単位で支払われる。

【スイッチ】

攻守が入れ替わるタイミング。またはタッグマッチでの交替のこと。

【スタンド】
試合中に立った状態で戦うことを指す。お互いが立った状態で打撃や投げなどを狙うことをスタンドの攻防と呼んだりする。反対に寝た状態で戦うことをグラウンドと呼ぶ。

【スワンダイブ式】
トップロープに飛び乗り、その反動で大きくダイブして仕掛ける技の総称。スプリングボード式とも呼ばれる。

【セコンド】
試合で選手の介抱や作戦指示にあたる補佐役。中にはセコンドのアドバイスにより実力以上の力を発揮するレスラーもいる。またレフェリーの死角で相手レスラーに攻撃を加えることもある。もちろん反則だ。

【セール】
試合中に自分がやられる場面、攻撃を受ける動作をいう。セールでのやられっぷりや苦痛の表情など、観客に〝伝える〟技術がないと一流レスラーとはいえない。

た行

【タイトルマッチ】
権威の有無にかかわらず、王座を賭けた試合のこと。転じて王座またはチャンピオンベルトのことをタイトルと呼ぶ。

【打撃系】
パンチ、キック、ヒザ、ヒジなどを使って相手にダメージを与える技、またはファイトスタイルの総称。見た目が派手で観客にも痛みが伝わりやすいので若いレスラーに多い。

【タッグマッチ】
二人組のレスラー同士がそれぞれチームとして組み、タッチによって交代しながら戦う試合形式。3対3で

戦う試合形式は「6人タッグマッチ」という。

【タックル】

相手に組みついて倒すこと。片足タックル、両足タックル、胴タックルなどがあり、グラウンドを得意とするレスラーが多用する。

【タップ】

マットや対戦相手の身体を叩いて「降参」の意思表示をすること。ギブアップのように声に出さない分悔しさを半減できるが、タップしたくせに「俺はギブアップしていない」などと往生際の悪いレスラーもいたりする。

【断崖式】

エプロンまたは花道から場外に落下しながら仕掛ける技の総称。受け手は高度な受け身を要求されるため、トップレスラー同士の試合以外ではほとんど見られない。

【チャント】

会場で観客が一体となってレスラーの名前や決め台詞を叫ぶこと。アメリカン・プロレスではチャント用の決め台詞があることはトップレスラーの証でもある。

【チョーク】

相手の喉仏を圧迫するように首を絞める技。チョークスリーパーとして認可している団体もあるが、プロレスでは基本的に反則。

【ツープラトン】

タッグチームが二人がかりで仕掛ける技のこと。技の威力を倍増させたり、二つの技を組み合わせて掛ける。いいタッグチームは豊富なツープラトン技を持っている。

【テーブルマッチ】

相手レスラーをテーブル（長机）に叩きつけ、先にテーブルを破壊した方が勝者となる試合形式。通常の試合形式とは違い、ギブアップやピンフォールでは決着がつかない。

【トリプルスレットマッチ】

3人のレスラーが一つのリングで同時に戦う試合形式。自分が関わっていなくても、自分以外のどちらか1人がフォール、ギブアップを奪われた時点で自分も敗者となるため、非常にゲーム性の高い試合展開となる。3Wayマッチ、3Wayダンスとも呼ばれる。

【トンパチ】

規律や序列に厳しいプロレス界において、非常識な行動や発言を平気で行うレスラーのこと。恐いもの知らずの若手レスラーが、のし上がるためにトンパチを装う場合もある。

な行

【雪崩式】

コーナーポスト上にいる相手に対して、自らもコーナーポストに上って仕掛ける技の総称。オリジナルの技の威力が増すため、フィニッシュにつながる大技として多用される。

は行

【バトルロイヤル】

複数のレスラーが一つのリングで同時に戦う試合形式。フォール、ギブアップ、オーバー・ザ・トップロープで失格となり、最後に残った1人が勝者となる。他のレスラーと結託したり、裏切ったりすることで試合展開に面白みが生まれる。

【ハンディキャップマッチ】

1対2、2対3など敵味方の人数が異なる試合形式。大物レスラーの怪物ぶりをアピールしたり、ベビーフェイス側を窮地（きゅうち）に陥れるために組まれる場合が多い。

【ヒール】

悪役のこと。観客に憎まれれば憎まれるほど優れたヒールといえる。またブーイングはヒールにとって歓声と同義。なお、ヒールのレスラーは私生活では紳士である場合が多く、リング上の性格とイコールではない。

【ブッカー】

レスラーと合意の上で、レスラーの身柄を一定期間預かるかたちで各団体への試合出場を確約（ブック）する請負人（うけおいにん）のこと。本来はマッチメーカーと違って対戦カードや試合展開を決める権限はないのだが、日本のプロレス界は成り立ちが特殊なため、現在ではほぼマッチメーカーと同義で使われている。

【ブッキング】

海外マットも含めた他団体のレスラー、フリーのレスラーの試合出場を確約（ブック）すること。普段観ることのできない超大物選手のブッキングは興行成績に大きな影響を及ぼす。

【プロモーター】

興行の主催者のこと。特殊なケースを除き、日本ではプロモーターにカード（対戦の組み合わせ）を決める権限はない。

【ベビーフェイス】

善玉のこと。老若男女誰もが応援できるレスラーで、正々堂々テクニックとパワーでヒールのレスラーと戦う。だが最近はヒールでも大きな歓声を集めることがあり、ベビーフェイスとヒールの境界が曖昧になってきている。

【ベルト】

チャンピオンベルトのこと。王者の象徴としてすべてのレスラーがベルトを巻くことを目指して闘いを繰り広げるが、アメリカン・プロレスではイスに次ぐ凶器としても多用される（金属の部分で殴る）。

ま行

【マスクマン】

マスク（覆面）をしたレスラーのこと。マスクマンにとってマスクは自らのアイデンティティそのものであり、マスクを剥がされることは最大の屈辱である。ただし場合によっては、マスクを被ることで正体を隠すため、すでに名が知られているレスラーが意図的にマスクを被るケースもある。

【マッチメーカー】

対戦カードや試合展開を考え、各レスラーに指示する現場（リング）の責任者のこと。マッチメーカーの手腕が団体の隆盛を左右することもあり、非常に重要な役職である。

【マット界】

プロレス界とほぼ同義。「馬場はアメリカマット界との太いパイプをもち～～」といった感じで使われる。

や行

【ユニット】

複数のレスラーから成る〝軍団〟のこと。観客が最もわかりやすい構図として、プロレス特有の軍団抗争には欠かせない。最近は一つの団体内だけでなく、異なる団体のレスラーが参加するユニットもある。

ら行

【ラダーマッチ】

ラダー（脚立）を使った試合形式。リング中央の頭上高く、ラダーの最上段に上ってようやく手が届く位置にチャンピオンベルトなどを吊り下げ、先にこれを獲った方が勝者となる。通常の試合と違い、ラダーを使った攻撃は反則にならない。見所はラダーの上からのダイビング攻撃。

【ルチャ・リブレ】

メキシコのプロレスのこと。レスラーは「ルチャドール」と呼ばれ、善玉の「リンピオ」と悪玉の「ルード」で抗争するのが基本的な対立構図。マスクマンが多く、遺恨試合としての「マスカラ・コントラ・マスカラ」

（マスク対マスクの意、敗者はマスクを脱ぐ）は人気がある。

【レフェリー】

試合を裁く者として多くのスポーツ同様その存在は絶対だが、プロレスの場合は〝陰の演出家〟ととらえた方がわかりやすい。試合を盛り上げるために敢えて死角をつくってヒールの反則技を誘発したり、技を誤爆されて一定時間〝気絶〟したり、そのせいでカウントが超スローになったりと役割は多い。また、カウント2・●で止めるハイレベルな技術があると会場の盛り上がりも一味違う。

【ローブロー】

反則技の急所攻撃のこと。ヒールが形勢逆転を狙って仕掛けたり、チャンピオンが反則負け（ルールによっては反則負けによる王座移動はなし）を狙って仕掛けたりする。

特別付録②　プロレス公式ルール

「何でもあり」が信条のプロレスにも公式ルールは存在する。各団体ごとに微妙に異なる点もあるが、基本的なルールは同じだ。プロレスを観戦する上で、このルールを知らないと本当の面白さを理解できないこともあるので、ぜひ知っておこう。

（以下の競技者規約は、新日本プロレス株式会社のものを抜粋させていただいた）

新日本プロレスリング認定　プロレスリング競技者規約

本規約は新日本プロレスが認定したものであり、本規約は、厳粛に遵守、服従しなければならない。本規約は、平成13年6月22日改訂制定、発効とする。

第一章　公式試合

第一条

選手権試合（シングル・タッグ）は資格を有する両者が、規約に基づく手続きを完了させる場合、各選手権実行委員会及び認定する団体がそれを認定する。

第二条

新日本プロレス認定の選手権試合には次の体重二階級を設ける。

一、ヘビー級100・00キロ以上

二、ジュニアヘビー級100・00キロ未満

第三条

選手権保持者はタイトル獲得後六ヶ月以内に国内、国外を問わず防衛戦を行わなければならない。但し各選手権実行委員会及び認定する団体が止むを得ざると認めた場合はこの限りではない。

第四条

試合時間（シングル・タッグ他）は時間制限及び時間無制限に区分する。時間制限とは十五分、二十分、三十分、四十五分、六十分であり、それを超える場合は時間無制限とする。選手権試合は各選手権実行委員会及び認定する団体の認可により時間を両者間で決定確認する。

第五条

試合方式（形態）は一対一のシングルマッチ、二対二のタッグマッチの他各種形態の方式を行う事ができる。

（例バトルロイヤル、ハンディキャップマッチ等）

第六条

オープンフィンガー・グローブ着用については、相手競技者、コミッショナー及び審判部のグローブチェックを受けた場合にのみ特に着用を許される。

第七条

試合の勝敗は審判によって行われ、審判は原則的には一人のレフェリーによって実施されるが、特例とし

て複数のレフェリー(サブ・レフェリー)を置く事も出来る。レフェリーは試合に関し絶対的な権限を有し、試合の最終決定権を持つ。

第八条

勝敗は一本勝負、三本勝負、又は相互に決められた方式により争われ、試合判定の分類はピンフォール、ギブアップ、ノックアウト、場外ノックアウト、レフェリーストップ、ドクターストップ、反則、ノーコンテスト(無効試合)により決められる。時間切れ等の場合は引き分けとなる。三本勝負の場合の休憩時間は1分とする。ミックスドマッチ(異種格闘技戦)においては、実行委員会、審判、競技者の協議により特定の協議規約設けることが出来る。

付記

ピンフォールとは競技者の両肩がマットにつき、カウント3を数えた場合の負け。ギブアップとは競技者が降参の意思表示をした場合の負け。ノックアウトはリング内で戦闘不可能の状態になりエプロンではカウント10、リング下ではカウント20を数えた場合の負け。尚、このリング外での場合、カウントはレフェリーが戦闘不可能と判断した時点から始まる。レフェリーストップ（ドクターストップ）は負傷などの事故により試合続行不可能な状態になった場合、レフェリー(ドクター)の判断において試合を中止、勝敗をつける事が出来る。反則は規約の禁止事項(別記)を競技者が犯した場合、レフェリーがカウント5を数える間にその行為をやめない場合は反則負けとする事が出来る。ノーコンテスト(無効試合)は勝敗の収拾のつかめぬ状態になった場合レフェリーは中止を宣言し試合を不成立とする。

競技者がリング外にでた場合、レフェリーは競技者をリング内にもどす様にしなければならない。競技者がレフェリーの注意、警告を無視し、リング外で乱闘を続け、収拾のつかぬ状態になった場合、レフェリーはカウントを数え始め、カウント20以内に競技者がリング内に戻らぬ場合引き分けとする。尚、この競技者に対し、各種の罰則を適用する場合もある。選手権試合に限りこれを適用せず、試合時間内であれば何度も再試合とする。選手権試合においてはタイトルの移動は全ての勝ちで行われるが、ノーコンテストの場合、タイトルの移動はなく防衛記録の更新もない。

第二章　試合運営と役員

第一条

正常のリングの広さは6メートル50センチ以内の正方形で、高さは床から90センチ以上とする。強く張った三段のロープで四方を囲まねばならない。フロアは水平で表面はキャンバスで覆わねばならない。以上と異なるリング使用の場合はコミッションの許可を得なくてはならない。リングと客席の間に危害防止のためフェンスを設ける事が出来る。

第二条

リングアナウンサーは試合の司会をし、公式のアナウンス、コメントを行う。

第三条

タイムキーパーは正確な計時を行い、開始、終了の告示をする。勝負の終了時間はレフェリーの裁定時とする。

第四条

ドクター、トレーナーは競技者の健康を管理するため臨場し、その任に当たることを要する。

第三章　競技者の禁止事項

第一条

すべての競技者は次に定める禁止事項（反則行為）を犯してはならない。

一、体のいずれの箇所をもナックルパート（正拳）で殴打してはならない。

二、頭髪、トランクス（タイツ）を掴んではいけない。

三、指で目を突く、鼻を掴む、口の中に手を入れる、耳を引っ張る、噛みつく等をしてはならない。

四、股間の急所を握ること、蹴ること、殴ることはならない。

五、手、足の指を掴む場合は、三本以上でなくてはならない。

六、爪先でのキックはいかなる箇所にも許されない。肘、膝の鋭角的攻撃も許されない。

七、関節技に入って競技者がギブアップの意思表示、もしくは失神した場合は、相手競技者はブレークする。またはレフェリーはブレークさせねばならない。

八、競技者の体の一部がロープに触れている場合、相手競技者はブレークする。またはレフェリーはブレークさせねばならない。

九、リング内外を問わず器物（試合進行の妨げとなる危険物）を使って相手競技者に危害を加えてはならない。

十、故意に相手競技者を場外フェンスにぶつけてはならない。

第二条

すべての競技者、役員は新日本プロレスの定めた規約を遵守し、健全なプロレスリングの発展のために努力しなくてはならない。規約の侵犯が起こった場合は、当事者に懲戒もしくは活動の停止などの罰則を適用する。

どうだろうか？　プロレスが意外にきちんとしたルールの下で行われていることがおわかりいただけたと思う。

ただし実際のプロレスラーは、こうしたルールの隙間を突きながら試合を組み立てている。例えば「反則は規約の禁止事項を競技者が犯した場合、レフェリーがカウント5を数える間にその行為をやめない場合は反則負けとする事が出来る」という一文は、裏を返せば「カウント4までなら多少の反則には目をつぶりますよ！」という意味にもとれる。このあやふやな解釈こそプロレスのプロレスたる由縁なのだ。

ルールがわかったらさっそく観戦に出かけてみよう。「百聞は一見にしかず」。会場で体感して得られる興奮はこんなものじゃないぞ！

萌える！プロレスのススめ

2007月12月10日発行

製作　**萌えプロ製作委員会**
企画・コミック原案　**金井秀行**
文　**稲葉靖郎**
イラスト　**吉井ダン**

発行人　塩谷茂代
発行所　イカロス出版株式会社
〒162-8616　東京都新宿区市谷本村町2-3
［電話］販売部　03-3267-2766
　　　　編集部　03-3267-2831
［URL］http://www.ikaros.jp/

装丁＆本文DTP　小林加代子（AD S.K.I）

印刷所　図書印刷
Printed in Japan

禁無断転載・複製

9784863200128

1920075014292

ISBN978-4-86320-012-8
C0075 ¥1429E

定価：本体1429円＋税
発行―イカロス出版

昨今は総合格闘技の人気に押されっぱなしのプロレス界。闘いとエンターテイメントという相反する側面を併せもつプロレスは、ルールをはじめ、単純な勝負の世界より何かとわかりにくいのもその一因だろう。
この本は、プロレス未経験者（?）の素朴な疑問に応えるルールや技の解説をはじめ、プロレスの歴史、名レスラー列伝、魂に響く名言集、観戦の手引きまで、美少女たちと一緒に学んでいける、ちょっと変わった入門書である。
プロレスの面白さを知りたい人は、ぜひ読んでみるべし!

萌える!
プロレスの
ススメ